

東京農業大学
学術情報課程
1982年～2022年における
40年の歩み

東京農業大学



東京農業大学

東京農業大学学術情報課程開設40周年を記念して



東京農業大学学長

江口 文陽

東京農業大学学術情報課程は、開設40周年を迎えることとなりました。この期間には、多くの教職員が学生の教育と研究にあたり、学生と教職員が歴史を築いてきたのです。関係各位に心から感謝申し上げますとともに、実習等の受け入れとともにご指導ご協力いただいた博物館、美術館、図書館、資料館など施設の方々に心からお礼申し上げます。

さて、東京農業大学学術情報課程の設置の意義とその教育と研究の活動についての私の考えを記します。教育と研究における学術活動の成果として生み出された情報や事実を収集し、編纂・構築することは、私たちが生活する時空の過去、現在さらには未来のためにも重要です。

私たちの活動は、作文集、生活文集、学術論文、報告書、学術書、抄録、図録などとして編集され後世に継承されるのです。このような情報をどんな施設や設備によって維持管理して公開するかを考究する専門集団こそが学術情報課程で学んだ人材であり、そのような素養を持った有能な知的集団の力が文化と教養、人々の心の豊かさを育み、人間力を高めていくものと私は強く確信しています。

東京農業大学の学術情報課程の教育は、企業の情報部、資料室、特許部（知的財産権本部）、研究開発部や営業部さらには公共機関としての博物館、資料館、科学館、児童館、図書館、情報教育センターのみならず大学機関などで科学技術に関する仕事に従事する人々に学術情報に関連した基礎

と応用を習得させることを目標にしています。

東京農業大学を巣立ったのちには、研究、教育、技術、営業、就農など多方面でキャリア展開をする人材がそれぞれに従事する仕事の場面で習得した知識を存分に発揮できることが大切です。また過去に集積した情報を社会で生活する人々の生活の質を維持するとともに高めていくことにも貢献することもあるでしょう。

そのような基礎能力は、高速情報化時代といわれる現代においてコンピュータ等の機器を賢く使いこなすためにも不可欠です。そうした人材の育成は、東京農業大学のみならず多くの研究機関においても活発に行われています。

しかしながら現在わが国においては、科学技術情報の調査から提供までを担当できる専門家が不足し、その養成教育は大学における教育の盲点の一つと考えられます。情報を取扱う人材養成は、農学を基盤とした理系大学においてはほとんど実施されていません。したがって、企業や公共機関において、科学技術情報を取扱う人材、特に総合農学とその関連分野の人材確保には困難な状況が生じています。東京農業大学の学術情報課程は、全学科の学生に開放設置され、社会の要求にこたえるために開設されました。この学術情報課程を修了すると学芸員または司書の資格が与えられます。

東京農業大学の学術情報課程は、開設40周年を迎えるにあたり社会のニーズに答えられる人材の教育と養成に今後も取り組ん

でまいります。そのために東京農業大学の教育基盤となるものがいかなるものであるかをここで少し紹介させていただきます。

総合農学を牽引する教育や研究はどのようなものと皆さまは考えられるでしょうか。総合農学とは、山の上から海までその全てを科学する幅広い学問であると私は定義しています。その学問体系の中には自然科学や人文科学、社会科学という幅広い領域が存在します。その全てを東京農業大学は教育・研究することのできる大学なのです。そのステージの中で、院生や学生には大きく羽ばたいてもらいたいと思います。そして将来の自分のビジョンに向けての勉学に励み、能力を高めていってもらいたいのです。

能力を高めるためにフィールド科学を重視した実学教育を東京農業大学では展開したいと思います。「食」に関する教育や研究を行いその専門的な知識を活かした人材としてのみならず食品産業に関するキャリアを意識するならば、フィールドで体験することが重要です。東京農業大学は、網走の寒冷地農場や水産学を学ぶオホーツク臨海研究センター、富士山の雄大な景色を一望できる富士農場、さらには伊勢原農場、棚沢圃場、宮古亜熱帯農場、森林領域を学ぶ奥多摩演習林と群馬分収林などのフィールドを日本全国に整備しています。これらのフィールドで学生や教職員が共に五感で物事を感じ、そこから学び得たものを活かして科学を重視した実践教育や研究を展開しているのです。これまでのフィールド科学をさらに強化した東京農業大学ならではの实学教育を展開することを意識したいのです。

東京農業大学の学祖である榎本武揚先生は、学問や研究とは、論理と実践の両輪がうまく軌道するとともに社会生活と産業振興に貢献するものでなければならないと述べられました。私は、そうした学問こそが農学であると説かれたと強く認識しています。さらに、初代の学長である横井時敬先生は、榎本武揚先生の思いを実現する為に「稲のことは稲に聞け」、「農業のことは農民に聞け」と言う名言を残したのです。二人の学祖を持つ私たち東京農業大学の教職員は、学祖の思いをしっかりと心に受け止めて、東京農業大学の学生に伝えることが肝心です。その伝承は、東京農業大学内のみならず「食・農・環境」の恩恵を受けている万人へのメッセージになるでしょう。

先達が歴史の中で作ったそれぞれの業績などを大きく活かしていくことが、「総合農学」を牽引する東京農業大学の学長としての私に与えられた使命と考えます。

学術情報課程で学ぶ学生諸君とともに、東京農業大学を卒業して学芸員や図書館司書として資格を持ち、多くの方々に情報を伝達している専門家には、フィールドから得た感性を磨いて業にあたっていただきたいのです。感性豊かな人材はコミュニケーションスキルが高まるとともに「こころ」ある人物として万人に接することが出来るはずです。

東京農業大学の学術情報課程は、専門的知識とともに人間力の高い人物を社会に送り出していく課程として今後も取り組んでまいります。

新たな40年に向けて更なる東京農業大学学術情報課程へのご指導とご支援をお願いします、学長としてのご挨拶とさせていただきます。

学術情報課程の国際化に向けて



教職・学術情報課程 主任

入江 憲治

わが国の博物館等への年間入館者数は、3億人を超えるとされる今日、古今東西の博物館をみると、世界でもっとも古い美術館は、1471年にローマ教皇シクストゥス4世が古代の重要な彫刻群をローマ市民に寄贈し設立したカピトリウム美術館でイタリア・ローマのカピトリウムの丘のカンピドリオ広場にある。日本の最古の博物館は、東京上野にある東京国立博物館で1872年に設立されている。国際連合教育科学文化機関（UNESCO、以下ユネスコ）によると、2021年3月現在、世界の博物館の総数は約10万4,000館と推定され、最も多いのが米国で約33,082館、次いで、ドイツが約6,741館、日本が約5,738館となっており、日本は世界有数の博物館保有国である（ユネスコ 2021）。日本の博物館の館種として、総合、歴史、郷土、自然史、科学、美術、動物園、植物園、水族館等があげられ、2018年時点には、登録博物館が914館、博物館相当施設が372館、博物館と類似の事業を行う施設が4,452館となっている（文化庁 2018）。学芸員は、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う「博物館法」に定められた、博物館におかれる専門的職員の資格に関する規定として1951年に制定され71年が経過した。学芸員は、歴史や科学博物館をはじめ、美術館、動物園、植物園、水族館などを含む多種多様な施設で働くことから、学芸員の分野は、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等の専門性によって多岐に渡る。東京農業大学学術情報課程は、博物館で働く学芸員の資格を取得できるように1982年に設置され、今年で40年を迎えた。さらに2年後には司書課程が1984年に設置されている。これまでに学芸員あるいは司書として、博物館などの施設で働いた卒業生は約280施設になる。東京農業大学の学術情報課程には、6学部23学科の多様な専門性をもつ学生が学芸員と司書について学び、2021年には、学芸員237名、司書98名が資格を取得した。毎年、全国約1万人程度が学芸員の資格を取得することから、本学の学芸員資格取得数は高く、相当数の学生が学術情報課程で学んでいる。

博物館法が制定され71年が経過した現在、博物館に求められる役割・機能が多様化・高度化している。これまで博物館は、貴重な資料を収集・保管し、公開・教育普及を行い、調査研究を行う役割から、これからの博物館は、文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、地域の生涯学習活動、国際交流活動、ボランティア活動や観光等の拠点など幅広い役割を有し、教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としての役割が求められている（文化審議会答申 2021年）。さらに、近年、博物館を取り巻く環境は、ユネスコや国際博物館会議（ICOM）等の国際的な動向に踏まえた対応をする必要がある。2019年 ICOM 京都大会では、現代社会における様々な事柄をつなぐ、「文化をつなぐミュージアム（Museums as Cultural Hubs）」が提唱され、博物館が文化の結節点としての役割を担うことが重視された。このように国際的な博物館間の交流や協力が進展している状況を踏まえ、学芸員が現代的な課題に対応し、国際的に遜色のない高

い専門性と実践力を備えた質の高い人材として育成されることが求められている。今後、本学の学術情報課程においても履修すべき科目、単位について具体的な見直しを含め、国際化に対応した学芸員教育について検討が必要になるだろう。

ICOM が提唱する文化をつなぐミュージアムの構想は、「既知と未知をつなぐ（触発、創造）」、「知識・経験をつなぐ（探求・創発）」、「世代をつなぐ（多世代交流、伝承）」、「人びとをつなぐ（交流、共創）」、「多様な文化・分野をつなぐ（多文化理解）」、「地域と人をつなぐ（土地への愛着、地域課題への対応）」、「住民（ホスト）と来訪者（ゲスト）をつなぐ（観光振興、地域活性化）」、「自然と人をつなぐ（環境保護）」を理念とし、今後の博物館の在り方を提案している。東京農業大学の教育、活動には、これらの理念と調和するところが多くみられ、本学の教育環境で学ぶ学生は、本学の特色を活かした専門性を備え、文化をつなぐことを実践できる学芸員の育成が期待できる。さらに国際的に遜色のない活動を展開できる学芸員は、企画展示技術の向上や館種の異なる美術館、博物館等との連携・協力ができると求められるだろう。そして文化の伝達者として国内外において、一般市民に対してアウトリーチ活動ができるアウトプット能力が必要とされる。東京農業大学は、大学の顔として立派な大学図書館、附設博物館、植物園等を持ち、2023年には大学の叡知を海外に発信する国際センター（仮称）が竣工する。学術情報課程としても、このような施設環境を活かし、大学文化財等の適切な保存管理の研修やアウトリーチ活動の実践に取り組んでいきたい。

私も博物館を見学するのは好きで、頻繁ではないが、近くにある東京国立博物館や国立科学博物館で興味のある企画展示が開催されると見学に行く。国内外の旅行先でも時間の許す限り、その土地の博物館を訪ね見聞を深めることは一つの楽しみでもある。これまで訪ねた博物館には、世界で2番目に古いバチカン美術館（1506年設立）など格式高い美術館も良いが、開発途上国にある博物館を訪ねるのも一見の価値がある。エチオピアにある国立博物館は、上野の東京国立科学博物館で見たルーシーの復元模型に惹かれて、行きたかった博物館の一つである。この博物館には、ルーシーの骨格模型を始め、古い人類化石の標本（模型）を見ることができる。人類発祥の起源地の一つと考えられるエチオピアにはコーヒーの起源地でもある。エチオピアではコーヒーは日本の茶文化でみられる作法に似たコーヒーセレモニーと呼ばれる儀式のもとで飲まれる。

「資料」との出会い	宮迫 陽奈	69
学生時代の思い出と現在の仕事との関係	鈴木 麻衣	71
学びに匹敵する財産	塚田 泰佑	73
学術情報課程との出会いと選択	原 萌子	74
2022年収穫祭参加者一同 寄せ書き		76

資料編

学術情報課程関連40年の歩み〈年表〉	80
学術情報課程歴代主任・歴任教員一覧	82
1982年度から1999年度に学術情報課程で開講された科目担当教員一覧	83
世田谷キャンパス学芸員科目年度別担当者一覧表	84
世田谷キャンパス司書科目年度別担当者一覧表	88
厚木キャンパス学芸員科目年度別担当者一覧表	92
厚木キャンパス司書科目年度別担当者一覧表	96
北海道オホーツクキャンパス学芸員科目年度別担当者一覧表	100
資格取得のための履修科目一覧表（世田谷・厚木キャンパス）	102
学芸員・司書資格取得者数	103
学芸員・司書関連就職先一覧	106
『学術情報課程通信：農大と図書館・博物館・動植物園を結ぶネットワーク』	108
バックナンバー	
『東京農薬大学オホーツクキャンパス学術情報課程年報：博物館と学芸員を目指す』	110
バックナンバー	
「食と農」の博物館における学術情報課程が主催・共催・協力等をした	112
企画展ポスター	
著者名索引	116
編集後記	117
コラム：創設時の課程について（『農大報』より）	119



凡例



1. 「教育にたずさわって」においては、学術情報課程主任を歴代順（村～上原）、学術情報課程教員を就任時順（梅室～那須）、その他で配列した。
2. 「卒業生・修了生からのメッセージ」においては、卒業（あるいは修了）年順で配列した。
3. 巻末の著者名索引について、著者名の読みで五十音順に配列した。



教育にたずさわって



開設40周年によせて



2010～2012年度 教職・学術情報課程 主任

村 清司

開設40年を機に記念誌を発刊されますことは、これまで歩んできた道を振り返り、今後の教育のあり方を再考する上で意義深いものと存じます。心よりお祝い申し上げます。

私は平成22（2010）年4月から教職・学術情報課程の主任を3年間務めました。主任の任期は2年で、2期務めることになっていましたが、2期目の途中で二高の校長を務めることになり、教職・学術情報課程の主任の仕事は3年間で終えることになってしまいました。教職課程、学術情報課程のどちらも新しい先生をお迎えし、任期中にできるだけ両課程の発展に努めたいと考えていたのですが、任期途中での退任となり、教職・学術情報課程の先生方にはご迷惑をおかけすることになってしまいました。

教職・学術情報課程は、長い間、多くの教員、学芸員および司書を養成し、農大において重要な役割を果たしてきた教育部門です。しかし私は主任を務めるまでどちらの課程にも仕事で関係することはほとんどありませんでした。そのため、まずは教員、学芸員、司書、それぞれがどのように養成されているかを知ることから始めなければならぬという有り様で、教職課程、学術情報課程、どちらの先生方にとっても頼りない主任だったと思います。

私が主任になったとき、学術情報課程は学芸員課程に小西先生と黒澤先生の2名、司書課程に中野先生、大滝先生、惟村先生の3名という体制で、すべての教員が世田谷キャンパスに研究室を持たれていました。厚木キャンパスは教職課程も含めて常

勤の教員は不在で、授業のときだけ教員が通うという体制になっていました。またオホーツクキャンパスは、教養分野の宇仁先生が1名で学芸員養成に当たっていらっしゃいました。

思い返すと、私が教職・学術情報課程の主任として最初に行った仕事は、厚木キャンパスに標本資料室を設けてもらったことではないかと思います。厚木キャンパスの実習授業は学科と共用の実習室を使っていたのですが、黒澤先生から授業の教材を保管する場所がないので標本資料室がほしいという要望があり、厚木キャンパスへ出向いて農学部長の岡島先生に標本資料室を別途用意してくれるようお願いしました。その甲斐あって、すぐに教務課が使えるような部屋を探してくれたのですが、それは倉庫のような施設で、とても教室とは言い難い部屋でした。それでも標本資料室として使える部屋が確保できたため、黒澤先生からは授業がとてもしやすくなったと喜んでもらうことができました。

2年目には、教職・学術情報課程の会議を、教職課程と学術情報課程が単独で行うかたちに改めました。課程会議は両課程合同で開催されていましたが、2つの課程の事案は接点がほとんどなく、合同で開催する必要性は乏しいように感じられたためです。主任は2つの会議に出席しなければいけなくなりましたが、各課程の話し合いに十分時間が取れるようになり、分けたメリットは大きかったように思っています。

3年目には、学術情報課程の広報誌『学

術情報課程通信』の発行を始めました。私もそうであったように、学内には学術情報課程に対する関心が薄く、その現状を正しく理解していない教職員が少なくありませんでした。そこで、受験生や学生だけでなく、教職員にも学術情報課程が大きな役割を果たしていることを知ってもらう必要があると考え、広報誌の発行を提案しました。それを受けて木村先生が中心となって素敵なデザインの広報誌を発行していただき、学内はもちろんのこと、学外にも農大の学術情報課程をアピールする媒体として使われるようになりました。

学術情報課程の履修者数は年度によってかなり変動がありましたが、私が主任を退くころには履修者の増加傾向が見られるようになっていました。その要因としては、1つに2008年からNHKの総合テレビで始まった「プラタモリ」の影響があったように思います。「プラタモリ」は、タモリが全国各地へ出向いて街の歴史の痕跡を見つけ、地理学・地質学的な側面を掘り下げるという街歩き番組です。この番組には毎回のように学芸員が登場し、専門家としてさまざまなことについて解説するため、この番組を通して学芸員という職種がよく知られるようになっていました。「プラタモリ」はまだ続いているようですが、学術情報課程にとって大変ありがたい番組でした。

また、毎年開催されるオープンキャンパスも、学術情報課程の履修者を増やす要因になっていたように思います。学術情報課程のコーナーには、インパクトのある教材がたくさん陳列され、多くの見学者が足を止めて説明に聞き入っていました。そこで学芸員の仕事、司書の仕事を知ると同時に、学芸員課程の実習の場である「食と農」の博物館を見学することもでき、受験生に学

術情報課程をアピールする効果は大きかったように思います。

さらに、履修者が多くなっていたのもっとも大きな要因として、学術情報課程を履修した学生の学芸員教育ならびに司書教育に対する評価の高まりがあったと思います。学芸員課程は梅室先生の後任に黒澤先生、小西先生の後任に木村先生をお迎えしましたが、両先生とも興味深い授業ならびに親身な学生指導を实践され、そのご努力は全国の博物館をはじめ、さまざまな文化施設に多くの卒業生が学芸員として採用されるというかたちで結実していました。また司書課程は、大滝先生が国立国会図書館の館長に就任されたため、その後任として那須先生をお迎えしましたが、那須先生は他大学で司書養成の責任者を務められた経験があり、それまでのキャリアを活かして司書養成に積極的に取り組んでくださいました。IT化の進展により司書に求められる役割が大きく変わってきており、それに伴って司書教育にも新たな内容が加わり、司書課程の先生方はそれに対処するため日々研鑽されていました。その先生方のご努力により、司書の資格を活かして図書館などへ就職する卒業生が毎年コンスタントに見られようになっていました。そのような学術情報課程の教育に対して履修学生の評価は年々高まりを見せ、その評価の高まりが下級学年の履修者の増加に結びついていたものと思っています。

私が主任を務めた期間はわずか3年間でしたが、その間の学術情報課程の進展ぶりには目を見張るものがありました。またその後も履修者の増加傾向は続き、多くの卒業生が全国各地で学芸員、司書として活躍していると伺っています。これからも農大ならではの学術情報課程としてますます発展されますことをお祈り申し上げます。

東京農業大学学術情報課程40年の歩みに寄せて



2016～2017年度 教職・学術情報課程 主任

地域環境科学部 生産環境工学科 教授

小梁川 雅

学術情報課程が設置されてから40年、おめでとうございます。

私は2016年から2年間主任を務めさせて頂きました。就任するまで学術情報課程とのつながりはほとんどなく、いきなり指名されましたので狼狽した覚えがあります。主任を務めるようになってから、農大における学術情報課程の設置意義や成果を知ることになり、それまで知らなかったことを反省いたしました。

学術情報課程は学生の資格取得を担って

いますが、そればかりではなく、情報の整理とその取り扱いに関する知識を教授しており、専門学科の教育にとっても重要な知識を学生に与えております。そのことは専門学科の教員ももっと知るべきであると感じています。またそれ以外にも、貴重な古農具や日本の農業史にとって重要な資料の収集・保管に努められ、農大の知の集積にも大きな役割を果たしてこられました。今後もこのような活動に努められることを期待しています。



11号館入口

学術情報課程40周年記念 「農大の殿堂」



2018～2020年度 教職・学術情報課程 主任

地域環境科学部 森林総合科学科 教授

上原 巖

私と農大の図書館、博物館

東京農業大学学術情報課程の創設40周年、まことにおめでとうございます。

全国に学芸員、司書を養成する大学はありますが、その多くは人文、社会科学系の大学です。本学のような自然科学系を中心とした大学での課程は、稀な存在ですね。つまり、本学の学術情報課程そのものが、個性的な存在なのです。さらに、本学の新学部、新学科の創設も相俟って、学術情報課程の希望者数は格段に増加をしてきています。中には、「学術情報課程で勉強するために」「学芸員の資格を取るために」農大を選んだという学生もいるようです。

私が農大に入学したのは1983年（昭和58年）。学術情報課程が出来て間もなくの頃でした。農大の構内に入り、クスノキの下を歩き、本部の赤レンガの建物をくぐると、創立80周年を記念して植栽されたメタセコイアの本立があり、そこを抜けると白亜の図書館がありました。図書館前の石段を上がり、重いガラス戸を開くと、博物館特有のホルマリンのにおいがしたものです。当時は、図書館の中に、材鑑や農機具などが展示されており、また蔵書の中から定期的に農古書などが紹介されていました。『豆腐百珍』などの伝統的な料理本もショーケースの中で紹介されていたことを思い出します。

図書館は、その大学の顔であるとも評されることがあります。実際、国内外を問わず、伝統校では数多くの蔵書、資料を有す

る瀟洒な図書館を持っています。オックスフォードやケンブリッジなどをはじめとしたヨーロッパの伝統的な大学では、まさに歴史的遺産とも言えるような蔵書を数多く収蔵し、実に荘厳な図書館を所有していますね。図書館のそのたたずまい自身が英知や感性を極めた芸術作品にもなっています。シックで優れたデザインの図書館は、ドラマや映画の撮影にも使われます。ダスティン・ホフマン主演の「卒業」でも、UCLA バークレー校のクラシックな図書館でのシーンがありました。そう、図書館は一つの舞台にもなるのです。私自身にとっては、学生時代、旧図書館の閲覧室でドイツ語の予習をし、窓から農大キャンパスの四季の変化を眺めていた光景が懐かしく思い出されます。ある時は自習室があまりにも私語で多かった際、先輩が一喝し、館内がシーンとしたこともありました。学部生だった頃、私には図書館にお気に入りの本がありました。それは『講義のあとで～碩学30人が語る学問の世界』（日本リクルートセンター 1980年）という本です。4年間で何度も何度もこの本を借りて繰り返し読みました。2006年に農大に赴任した際、その本に再会することができ、裏表紙の内側に付けてある貸し出しカードに何度も記入されている自分の氏名を見て、とても懐かしく思いました。農大に教員として戻って来る日が訪れるとは学生時代の私には想像もできなかったことです。

ミシガン州立大学の図書館、博物館、そして「食と農」の博物館

私は2017年に海外協定校のミシガン州立大学（MSU）に客員教授として講義、実習を担当する機会をいただきました。その滞在中は、同大学の図書館はもちろん、博物館も利用することが度々ありました。双方ともに普段から一般の来館者も多く、定期的な市民セミナーも活発に行われ、まさに社会に開かれた図書館、博物館の存在になっていることを感じました。ミシガン、アメリカに限らず、ヨーロッパなどでも、博物館はもとより、図書館も広く市民に開放されている大学が海外では数多くみられます。

そもそも MSU の博物館は、教職員の研究、教育のために設けられたものであったこともこの時に知りました。この教職員教育の施設であったということは、本学においても再考されるべきことでしょうか。と言うのも、本学の「食と農」の博物館もまた、今日の「博物館」という名称を考え、日本の博物館の父と称される田中芳男が東京高等農学校時代の1904年（明治37年）に設置した「標本室」が原点であり、やはりそこには教職員教育の目的も持っていたことがうかがえるからです。ひるがえって、現在の農大の教職員はどれだけ博物館を利用しているのでしょうか？

「食と農」の博物館は、2004年に開館しました。開館当時、農学のユニークな博物館として数多くのマスコミにも取り上げられましたが、現在もなお毎年活発な企画展示が行われています。また、アカデミアセンターの一階には、「実学の杜」が設けられ、農学の府としての本学のこれまでの歴史が紹介されています。これら二つの存在と姿はまさに本学の学術情報課程のあり方を体

現していると言えるでしょう。

「自然の中の数学」展

2020年10月～2021年4月

その「食と農」の博物館にて、私は、企画展を開催する機会に恵まれました。タイトルは、「自然の中の数学」展です。

農学をはじめ、自然科学に携わる上で、数学は欠かすことができません。得手、不得手にかかわらず、栽培面積、収穫量、統計計算などをはじめ、経営面での収益、複利計算など、とにかく農学と数学・数字には切っても切れない縁があります。さらに農学分野から、自然全体に目を向けた場合、数学は文字通り森羅万象のすべてに存在するのです。

私たちは、自然を眺めるときに「美しい」と感じるがあります。それは、身のまわりの樹木や石などをふと眺めるときも同様です。では、なぜ私たちは、自然を見て、美しいと感じるのでしょうか？その理由の一つに、実は数学があるのです。自然界の中には、実に様々な数学の法則やしくみが隠れています。逆にいうと、私たち人間は、有形、無形の自然の中から、数学を生んできたともいえます。

そこで、本企画では、身近な自然の中に存在する数学を紹介し、数学が苦手という方にとっても、「へえー、そうなんだー」とトリビア的に魅かれるような展示をすることによって、自然の中から数学を再発見することを目的としました。展示内容は、森林、樹木、植物をはじめ、自然の様々な事象が対象です。博物館職員のみならず定期的にディスカッションを重ね、次第に展示の骨組みやデザイン、ポスターなどが決まっていきました。この過程で、普段見学している博物館展示はこんなふうに作ら

れていたのだという舞台裏、舞台下も学ぶことができました。職員の皆様には、開催中も終始あたたかなご配慮とご支援をいただきました。重ねまして感謝申し上げます。展示のモデルができ、会場の組み立てが始まった時などは、「いよいよだなー」ととても感激いたしました。コロナ禍ではありましたが、講演会、トークショーなどの企画も無事に予定通り開催することができたことはまさに僥倖で、しかも、いずれの企画も満席の盛況でした。この展示内容は、

東京農大出版会より、『自然の中の数学』として同名で2023年に出版される予定です。

農学というまさしく森羅万象にかかわる学問を学び、その博物館、図書館で学んだ学生が、広く国内外に旅立ち、実社会にだけではなく、自らの心の中にも博物館、図書館を創り、自らの資料を編纂し、本に親しんでいく人材となっていくことを願ってやみません。



「自然の中の数学展」(2020年10月～2021年4月)のオープニングにて(左手にはマスク)



展示の様子

学術情報課程の成り立ち



元学術情報課程助教授 兼 「食と農」の博物館 副館長

梅室 英夫

明治24（1891）年3月6日徳川育英会賛主榎本武揚により分農農業科が設立された。第二回卒業式に同氏の述べた式辞に斯れば「わが農民特有の能力に加ふるに、学術と実験を以て、農業に属する各般の改良を図らば・・・」とあり、この時すでに学術が成語として使用されていた。

明治26（1893）年5月18日育英賛から独立し、私立東京農学校が設立された。しかしその経営は苦しく明治34（1901）年7月大日本農会に経営を移行し、明治35（1902）年3月に大日本農会幹事長田中芳男を校長として招請した。田中は学識が広くその生涯を博覧会、博物館設立に携わり、日本の博物館の祖と言われている。明治36（1903）年8月専門学校令により、東京高等農学校に改称し、明治40（1907）年1月校長辞任。明治34年当時の写真からは、標本室が設置され、農具、昆虫、山羊・綿羊の剥製などが展示されている様子が窺える（農大校友会ニュース第132号参照）が、これらは明治37（1904）年11月30日に大日本農会より受贈したものである。明治41（1908）年11月横井時敬が校長の任に就き、大正14（1925）年5月18日、大日本農会付属東京高等農学校は財団法人東京農業大学に改称される。同年5月1日の新図書館設置に伴い標本部門は図書館の一組織に組み込まれ、初代館長に人類学者、カラフト民俗学の石田収蔵（大正14年5月18日～昭和15（1940）年1月31日）が就任した。同標本部門は昭和7（1932）年4月30日付けで、東京農業大学図書館付属標本室として日本博物館協会に加盟し

た。昭和19（1944）年4月2日～昭和36（1961）年6月28日大野史朗が図書館長（農大図書分類表作成）に就任した。図書館は文字・実物・映像の情報が三位一体となり、図書部、標本部、視聴覚部を組織した。標本部にはすでに造園学科助教授岩田次郎、元宮内庁生物学御研究所助手加藤四郎（農大卒業恩師服部広太郎）が在籍していた。

私は卒業と同時に勤務して資料整理を行い、昭和43（1968）年4月から昭和56（1981）年まで全国的な規模で古農機具資料の収集を実施した。それらの農機具は昭和35（1960）年に打ち出された「所得倍增計画」を背景に、都市と農村の所得格差をなくすために制定された「農業基本法」（昭和36年）に基き、「第一次農業構造改善事業」が開始（昭和37（1962）年）される以前のもので、これを古農機具と位置づけた。収集は畑作、水田作、林業、生活用具などについて聞き取りを行いながら、主に農大校友の方々の協力を得て行われ、農学部一学部時代における各学科に対応した資料が多い。惜しむべきは淡水産、民俗芸能に關しての資料を収集していない。昭和53（1978）年1月『古農機具類写真目録』（第1集）（図版数2,038点、掲載資料数1,964点）を、また、昭和55（1980）年4月には『古農機具類写真目録』（第2集）（図版数704点、掲載資料数496点を刊行した。

腊葉（押し葉）標本は常谷幸雄図書館長が昭和初期より、日本、中国、東南アジア、朝鮮、台湾、ヨーロッパなどから収集した資料で、なかでも伊豆七島の資料は学会で

高く評価され、約13万点がデータベース（MSDOS4900）に登録された。昭和58（1983）年3月に『東京農業大学図書館標本部所蔵維管束植物標本目録1 シダ植物編』650種、12,752点を刊行している。

図書館は昭和43年4月新館開館に伴い組織改正が行われ、特殊資料部標本室・視聴覚室に分かれた。昭和56年12月15日に標本部を「農業資料室」とし、文部省から博物館法に基く博物館相当施設として指定を受け、博物館実習施設となる。

昭和57（1982）年4月1日、学芸員資格取得のため、文部省から学術情報課程設置が認可され全学科に開講した。学内での組織は学術情報課程主任を図書館長が兼務。開講時間は教職課程とかち合わないよう6・7限目に設定、さらに夏期休暇中にわたる場合も多々あった。昭和58年4月には司書資格取得履修も認可された。初年度の履修生は10数名、2年度からは学芸員、司書合わせて80数名であったが徐々に増えて、現在では例年約200名が資格を取得している。

博物館実習の一環として平成5（1993）年3月、旧醸造学科の校舎3階にあった「醸造博物館」に収蔵されていた東京農業大学醸造振興会が所蔵する資料情報を、『醸造博物館所蔵品図録』として取り纏め刊行した。平成11（1999）年4月から農業資料室は図書館から分離し教職・学術情報課程と合併し、平成18（2006）年にはオホーツク

キャンパスの生物産業学部で学術情報課程が設置され学芸員資格が履修可能になった。

平成16（2004）年、農業資料室は東京農業大学「食と農」の博物館に名義変更され、新しく竣工された博物館が一般公開された。一方、農業資料室に収蔵されていた腊葉標本13万点は国立科学博物館に寄贈された。また平成25（2013）年、学内整備により古農具類は厚木キャンパスへ移動したが、令和4（2022）年世田谷キャンパスに戻り、「食と農」の博物館やサイエンスポートに展示されている。

なお、博物館見学実習は3泊4日で水族館、動物園、植物園、民俗博物館、世界の民家集落施設、美術館、歴史館、科学館などを見学し、宿舎では見学館の学芸員による博物館の運営、催事などについて講義、質疑などを行った。

現在80余名が自治体、または指定管理のもとで学芸員として勤務実績を積み、園長、館長として活躍されている方もいる。早いものでそろそろ第一期の履修生は定年を迎えようとしている。動物園、植物園、自然科学系博物館をめざす学芸員は多いが、全国の大学学芸員科目を開講している大学およそ300校の内、自然科学系は数校にすぎない。これからも自然科学の専門性を身に着けた学芸員を輩出しなければならない。指導者と履修生が博物館について親身になって相談可能な場を設けることを期待している。



奄美大島原野農芸博物館での学外実習

40年を振り返って



学術情報課程 主事

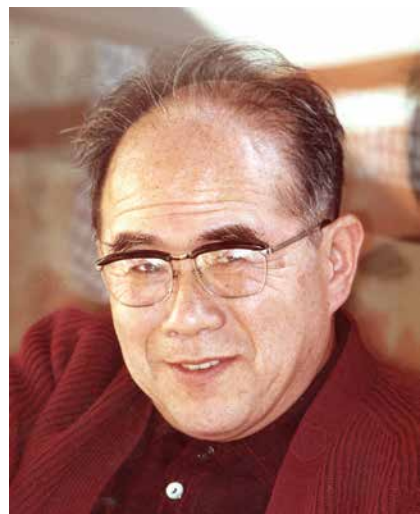
惟村 直公

昭和55（1980）年に大学院農芸化学専攻の博士前期課程に入学した当時、最も困った問題に直面していました。それは、『学術論文の探し方が分からない！』状況だったのです。情報が欲しいのですが、どうやって探し出すのか全く分からない状況でした。考えてみれば、学部学生時代は農芸化学の専門分野の勉強はしても、学術論文の探索方法は全く学んでいませんでした。卒論で使う学術論文は、指導教員に頂いていましたので、自ら情報を入手することはありませんでした。このツケを大学院に入学して一気に払う結果になったのです。まさに、この当時は情報に飢えていた状況にありました。

このような状況を打破するためにいろいろな方に相談してみましたが、「専門書の参考文献から文献を入手する」、「図書館司書に文献調査を依頼する」などのアドバイスを受けました。しかし、このような方法では、新しい論文を探せないことや、一学生が図書館職員に文献探索を依頼しにくいなどの理由で満足なものではありませんでした。結局、思い切って大学院の指導教授に相談したところ、“Handbuch der organischen Chemie”を紹介され、二次資料について初めて知ることになりました。それをきっかけとして、様々な二次資料について知ることになり、二次資料の解説書や二次資料に掲載されている利用方法を参考にして、何とか文献を調べられるようになりました。ただ、二次資料のマニュアル検索は、時間と労力がかかり、必要な文献

を得るのに、1か月以上図書館にこもるなど大変な思いをしていました。

そんな折、昭和54（1979）年に財団法人日本科学技術振興財団の科学技術館主席学芸員であった吉村典夫先生（写真）が農大総合研究所に着任され、昭和55年には大学院農芸化学専攻農芸化学特別総合演習で情報検索等を担当されることになりました。当時、大学院に入学したばかりの私は、この授業に参加できませんでした。しかし、授業を受講した先輩から、「Chemical Abstractsのデータベースを検索できる研究室があるので一緒に行ってみないか？」とのお誘いを受け、訪ねたのが吉村典夫先生の研究室でした。吉村先生は、快くデータベースを利用させてくださり、1か月以上かかった文献探索が5分もかからないうちに完了し、その威力に驚かされたのは今でも覚えています。ただ、表示された利用



吉村典夫先生

料金を見て、その高額な費用にもさらに二重に驚きました。利用料金が高額なため、残念ながら学生の身分では諦めざる負えない状況でした。しかし、吉村先生からは、その後もデータベースの講習会や説明会があると誘っていただきました。講習会では、担当者に大学院生なので、文献検索についてアドバイスをしてくれるようお願いして下さったことは今でも感謝しております。

昭和57（1982）年になると吉村先生が学芸員課程を設立され、昭和58年から学部で学生募集が開始されると、先生から学芸員課程を聴講生（現、科目等履修生）として履修してみないかとのお誘いを受けて受講しました。さらに、翌年の昭和58（1983）年には司書科目も開設され、この2コースを合わせて現在の学術情報課程が誕生しました。私も司書のコースを引き続き聴講生として履修させていただきました。

学術情報課程の授業は、どの科目も農大にはない新鮮なもので、授業内容の全てが21世紀の情報化社会を見据えたような興味深いものでした。この課程を履修したことによって情報活用能力が向上したのを実感できました。残念ながら吉村先生は、昭和59（1984）年に他界されましたが、学術情

報課程の設立理念に賛同された教授陣により課程が支えられました。教授陣には、慶應義塾大学の澤本孝久先生と津田良成先生、図書館情報大学（現、筑波大学）元副学長の藤野幸雄先生、同大学の佐々木敏夫先生、情報科学技術協会会長の中村幸雄先生、NHKの荻昌朗先生など、情報分野の錚々たるメンバーがいらっしゃいました。当時は、図書館情報学や博物館情報学の分野に疎かったため、どれだけすごい教授陣か分からず、授業の後に質問をしに伺うついでに、図々しくも酒宴にまで参加させて頂きました。後に、私もこの分野に私も足を踏み入れることになり、農大の教授陣について尋ねられて先生方のお名前を挙げると、「農大はすごい教授陣をそろえているのですね」と一様に驚かれました。

学術情報課程が設立されてから40年の月日がたちます。最初の履修学生は僅か十数名でしたが、現在では700名近い学生が履修するまで発展してきました。その間、多くの先生方に課程を支えて頂きました。課程を支えて頂いた先生方に感謝するとともに、学術情報課程を履修している学生には、情報社会で活躍できる情報リテラシーを持った人材になって頂きたいと思います。

情報のあふれる時代を眺めて



2002～2005年度 学術情報課程 教授

西田 俊子

私が東京農業大学の学術情報課程にご縁を頂くようになりましたのは20年前、今世紀初頭の2002年、故藤野幸雄先生のご紹介によるものでございました。藤野先生とは1960年代後半、国際文化会館図書室で一緒に仕事をさせて頂いて以来、後年私が英国大使館文化部（British Council）図書館長として図書館運営を担当致しました際も、何かとご助言、ご指導を頂いて参りました。

当時、大学で情報と申しますと、主に学術情報が主な対象であり、専門分野では分野毎の専門図書、あるいは専門学会のジャーナル等が主なソースであり、それらの情報の検索、収集また分類というような、いわゆる図書館学を基礎にした学問体系と考えられておりました。そのためそれらを使いこなすには、それらの方法論を身につけた専門家に頼ることが多かったと思います。従って機密情報は別としても、高度な情報となればなるほど、詳細な情報を得るには費用も掛かるという時代でした。

そこで、当時の学生の皆さんには図書館に関する一般知識に加え、情報体系に関する知識とデータベース検索の利用法等を理解頂き、情報を効率良く利用できるように指導することでした。

その他の一般情報と言えば、新聞や放送等のマスメディア、または百科事典や各種年鑑、白書というものもありましたが、今日のインターネットを中心とした情報の拡散状況は想像できませんでした。

インターネットの前身は1980年代末、米

国の大学や研究所間で学術研究用にコンピュータを利用したネットワーク基盤が確立、応用が始まっており、その後さらに使いやすいプロトコルの開発により、商業利用を促進させ、急速に拡大してきました。この展開をさらに推進したのは電気通信技術のハードウェア、ソフトウェアの開発であり、誰もが身近のパソコンやスマホといった端末機からでも、ほしい情報にアクセスできるようになったことです。そこでは商業利用の場として応用、あるいは様々な情報が色々な立場で主張されるようになり、それらが信用出来るものかどうかは別にして、洪水のように私達の頭上に降りかかるようになりました。さらに電気通信技術の発達情報は情報の伝送量を飛躍的に増大させて来ました。すなわち文書化された情報のみならず、画像や動画というような膨大な情報も容易に誰もが提供、また受信できるようになっています。

そこで大切になってくるのは、提供される情報の質とか正しさということになります。これを正しく見分けるのはますます難しい問題になってきています。そのため情報の発信元や複数の情報から得られる共通項等を推察し、信頼できるかどうかを判断する基準を確立することが最重要になってきます。

インターネットで膨大な情報を誰もが容易に得られる時代にどのように対処すべきかを考えさせられる20年になりました。

農大で学術情報課程を終えられた学生の皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

〈ため口〉の誕生



2003～2012年度 学術情報課程 教授

中野 捷三

〈ため口〉とは、

「相手を対等として扱った話し方。親しい人同士での話し方。」

—— (Wikipedia)

着任して間もない頃、うどんパーティをやりますからと農業資料室の原口先生からお誘い受けた。農業資料室は、現在は桜丘アリーナのある場所にあった施設で、資料室どころか、それ自体が堂々たる博物館。押し葉の標本、昆虫、種子、家禽などの剥製、農機具類などが所せましとばかり陳列されていた。ことに農機具類は、この国では農具がいかに大事に扱われてきたかを幅広く示す秀逸なコレクション、さすがは農大と大いに感激した（労作『東京農業大学図書館標本室古農機具類写真目録』1978、1980に詳しい）。後になって、博物館実習の場としても使われていたことを知った。事務室には梅室先生もおられ、授業を終えた学生さんが4人、これからうどんを打ってくれるという。学芸員は何でもできなければならない、うどん打ちも実習です、とのこと。やがて少しお酒も入り、何が話されたかはきれいに忘れたが、うどんは無論おいしく、談論風発、呵々大笑の賑やかな実に楽しいパーティであった。

その席で、先生方と学生さんたちとはすこぶる仲が良いことに気付いた。言葉遣いにそれが現れていた。初めのうちは先生方に対してはさすがに丁寧な物言いをしていましたが、次第に〈ため口〉というか、打ち解けた親しい友人同士の会話のスタイルに変

わっていった。先生方もやがて同じような口調で話すようになった。教え子というより、少し歳の差のあるかわいい後輩たちと一緒におしゃべりをして、楽しい時間を過ごそうとしていることがよくわかった。そうでなければ、あのような和やかで温かな雰囲気は自然に生まれてくる訳がない。それまで長い間、上意下達を旨とする組織の中で時を過ごし、型に嵌った表現が多く使われる言語環境にいたためか、その晩の若者たちと先生方との間の生き生きとした話ぶりと温かい雰囲気に、私は新鮮なショックを受けた。

さらに、収穫祭での同窓会でも同じような経験をした。当日は、朝から履修生、卒業生がどんどんやって来る。仲間同士、家族同伴、無論独りで来る方も。少しお酒が入ると、課程の先生方とは無論、やあやあ、という感じで、堅苦しいところ一切なし。新参の私に対しては、学科で同級、先輩・後輩、3年生の時からゼミの友達、部活で一緒、などと友情を結んだ発端から職業や仕事の話、はては趣味に至るまで話してくれる方もおられた。卒業後2、3年という若い方から働き盛りの壮年、あるいは50歳代の紳士グループまで、年齢もいろいろ。さらに、都内は無論、千葉、埼玉、神奈川の近県、群馬、山梨、長野、三重、広島など

遠方の県から、卒業生が集まってくる。皆さん、かつて自分が貴重な時を過ごした農大キャンパスに帰ってきて、何かから解放されたかのように嬉しそうに歓談しておられる。農大キャンパスは、卒業生にとって、具体的存在であると同時に、魂の故郷（ハイマート）ともいうべき精神的存在でもある。そこでは、どうやら時間を逆戻りさせて「昔自分がいた頃の農大キャンパス」に戻ることができるらしい。収穫祭の2日間、今はないバラック建ての旧14号館・学芸員博物館実習室および現在の同窓会の場となっている17号館の実習室は、〈ため口〉の飛び交う温かい雰囲気になり、文字通り交歓の場と化すのである。

自分の学生時代を思い返してみる。部活なし、先輩・後輩なし、ゼミにも気の合う連中はなし。先生はというと、大教室のマイク授業、距離感を狭める機会もなかった。正真正銘の文系の中の孤独と言っている。したがって、〈ため口〉（当時、このコトバはなかった）で話すのは気の合った同級生のみ。その点、農大生諸君は恵まれていると思う。惟村先生の話では、ほとんどの学科では、3年生になると4、5人のグループに分けられ、教授の指導の下、大学院生から研究の手ほどきを受け、実習や実験の準備も一緒に行うという。夜まで実験が長引けば文字通り同じ釜の飯も食うことになる。いよいよこれから本格的に理系の学問の世界に進む学生諸君にとっては温かな制度という感じがする。あるいは、スポーツや文化サークルに所属し活動していれば、先輩後輩の関係がめばえ、仲間意識が生まれるのは自然である。その他、出会いの機会は、キャンパスのそこら中に無数に転がっている。〈ため口〉誕生の好機である。ぎこち

ない会話からともに流暢な〈ため口〉を操って話すことを暗黙裡に許すに至るまで、時間はあまりかからない。

この10年間に多くの学生さんと出会った。その中で〈ため口〉で話してくれた学生さんがいたかどうか。とっつきにくい顔付きをしているためか、勤務中の私に対しては無論、offの折の私に対してさえ、〈ため口〉で接してくれた学生さんは殆どいなかったように思う。その中でAさんは数少ない例外であった。彼はB市立図書館長を2年間勤めて定年退職し畜産学科に入学、卒業。同時に司書資格も取得。公務員として、最後のキャリアに市立図書館長を希望したのは、経済学専攻であったが畑違いの部局にばかり回され、その間ずうっと図書館に一種の憧れを抱いていたからとのこと。ところが実際に館長になってみると、「司書資格を持たないところから、職員からよく馬鹿にされた」。ヨーシそれなら、ということで奮起一番、学士（農学）の取得と同時に司書資格取得も目指したという。卒業後、畜産学系のC大学図書館で洋書の入力作業などに従事。2、3年経つと「図書館の仕事は面白い、特に若い学生さんから相談やら質問を受け、一緒に資料をさがすのは楽しい」という趣旨の話をしてくれた。私見ながら、江戸の敵を長崎での感が深い。ここ数年、コロナ禍もあり音信はしばらく途絶え訝しく思っていたところ、昨年の暮れ近く、奥様からご懇篤な欠礼通知を戴き、亡くなられたことを初めて知った。本厚木の駅近辺で、夜の部でよくお目にかかり、それこそ〈ため口〉で、互いに近況などを話したりした。生涯学習実践者の範として、本誌に書き留めて置きたい。

毎年、卒業式の当日は楽しみであった。美しく着飾った女子学生、スッキリと真新しい背広に身を包んだ男子学生。何人かは挨拶に来てくれた。またまた惟村先生の話で恐縮だが、学術情報課程の学生さんは大変よくデキルので、毎年、必ずと言っていいほど、成績優秀の表彰者の中に何人か履修生がいるとのこと、嬉しい話で、学術情報課程はこのことを大いに誇りとすべきで

ある。

私事で恐縮ではあるが、家人の後を追ってスーパーに行く。死語に近いが「わしも族」または「ぬれ落ち葉」。—— パン、日本酒、キノコ、豆腐などなど、手が伸びるのは、どういうわけか、〈ため口〉では話してくれなかった卒業生の勤務先の製品ばかり。皆さんお元気だろうか、ふと思う。



竣工当初（1968年頃）の図書館



1967年までの図書館閲覧室

思い出すままに —博物館実習との関わり—



2006～2011年度 学術情報課程 教授

一般財団法人進化生物学研究所

小西 達夫

私は2006年度から6年間、世田谷区と厚木キャンパスで、博物館実習と博物館概論等を担当しました。それまでは、独立行政法人国立科学博物館筑波実験植物園に勤務していました。母校は農大で遺伝育種研究室で植物細胞遺伝学を専攻し、卒業後、東京農業大学遺伝学研究所（所長故近藤典夫名誉教授、現在の一般財団法人進化生物学研究所）に勤務し、遺伝育種学専攻生の指導を行い、アフリカ、マダガスカル、南米諸国等の動植物学術調査の収集品の調査研究・保全等の研究活動に従事しました。研究の成果は学術発表し、様々な自然科学関連の展示会の開催、さらに科学的に楽しむ学べる自然科学系の博物館施設の開設等に指導・活用し、保全・維持・管理に関わりました。ちょうど、学術情報課程が開設した1980年代に、開園をひかえた科博の筑波実験植物園に移りました。同植物園を定年退職後、縁あって学術情報課程に勤務しました。現在は進化研でタロイモの調査・保全研究、学芸員実習生の指導を行っています。

学芸員は博物館法（昭和26年12月1日法律第285号）に定められた博物館における専門職員です。法律が制定された当時は300館に満ちませんでした。また、学芸員養成課程のある大学は少なく、専任の教員も限られ、多くは文化系の他分野の教員で、履修する学生も主専攻のかたわらの履修者が多い時代でした。博物館は1970年（昭和

45年）になると1,000館を超えて1980年には約2,000館を超えました。ちょうど、経済成長の中で多様な博物館が創設され、図書館などともに身近な社会教育機関となった時代です。学芸員課程を創設する大学が増えていきました。同時に自然科学、理・工学系の教員、学芸員数も増えています。農大が、学術情報課程を開設したのも丁度この時期で、今から40年前のころになります。

実際に教壇たったのは18年前で、すでに全国には博物館は5～6,000館に増え、毎年同じ数の学芸員の資格者が生まれる状態で、博物館への就職は狭き門でした。博物館に対する要求は時代とともに移り変わり、社会の要望により法律も改訂されて行きます。学芸員のレベルアップが議論され、学芸員の経験不足を補うインターン制度、あるいは大学院卒を導入などの意見がありました。

課程は開設に関わったメンバーである梅室氏らにより、20数年の豊富な経験のもとに築かれた実績があり、充実していました。学芸員のレベルアップには豊かな経験が必要不可欠で、博物館実習は重要な履修科目の一つです。特に、当時の学芸員課程は人気があり、履修者多く、中には教職と司書課程を併せて履修する学生も増えていました。履修者の専攻学科も様々で、学科によっては実習時期が重なり、補講など調整など難しい事もありました。

問題は、増える履修者に対応する実習室の広さを確保しなければならない状態を回避することでした。厚木キャンパスも同じ状態でありました。他学科の施設との共同使用などを交渉し、実習室の確保に努め、抜本的な解決をアピールした思い出があります。

楽しかったことは、名古屋方面への見学実習で、見学先が幅広く多岐にわたった分野の施設が選ばれ充実していました。2泊3日見学実習は共同生活で行われることもあり、昼間の見学、夜のミーティングと充実しており、長年の経験が盛り込まれている内容はレベルの高いものであった。

一方、博物館実習の受け入れ先は本人の希望を中心に、出身地の中から選ぶことから、多種多岐で、全国に及んでいました。受け入れ先との信頼度も高く、実習先で優れた能力に高い評価を受けたこともありました。

恵まれていた環境は、「食と農」の博物

館の活用、進化研との連携で行う昆虫、小動物、植物、古生物等の標本の収蔵庫作業や保全（育成を含む）作業、バイオリウムでの接客などの実践型の実習が出来たことでした。

早いもので学芸員課程は開設40年となり、多種多岐にわたる博物館等関連分野で重責を担う多くの先輩が増えています。就職先も指定管理者制度の導入以来、展示企画・施工などをはじめとする博物館関連業種などから様々な業種に専門職の学芸員資格とその能力が求められています。今後ますます社会の変化と共に学芸員の経験・能力が必要とする多くの業種が増え、課程がさらなる進化し発展することが期待されるでしょう。

私自身いまだに、進化研で資源植物保全研究の一環としてタロイモを保全し、研究を行っています。学芸員とのお付き合いも相変わらずで研究所で受け入れている博物館実習生の指導を続けています。

学生に図書館の働きを伝える ——図書館人としての思い



2006～2011年度 学術情報課程 教授

大滝 則忠

私が学術情報課程の図書館情報学分野における教壇に立ったのは、2006年4月から2012年3月までの丸6年間で、このように東京農業大学の闊達な学風の中に身を置く機会を与えられたことは、終生忘れられない貴重な経験で、感謝の念は尽きない。

このたび学術情報課程40年の大きな節目を迎えられたことを心からお祝いし、今後とも東京農業大学における学術情報課程の博物館情報学及び図書館情報学の両分野の教育及び研究の諸活動が一層充実して発展することを期待申し上げたい。教壇を辞して最早10年以上が過ぎて当時の記憶も薄らいできているが、忙しい学生時代に各自の専攻分野での研鑽に加えて、学術情報課程という学びの場に意欲的に集う多くの学生と接して新鮮な刺激を受けたことは忘れられない。卒業生にとって、激変するデジタル社会の中を豊かに生き抜くうえで、学術情報課程で学んだ各自の経験が様々に生きていてほしいと願いながら、この機会に、図書館人のひとりとしてのいまの思いを綴らせていただく。

本学に赴任する前、私は国立国会図書館という職場に大学卒業の年から定年までの通算36年余を勤務した。もともと法律学を専攻して、縁あって国立国会図書館に勤務することになったのは、多分に高校新聞クラブ活動に没頭した延長線上で活字の魔力に魅せられたせいで、就職の当初から社会における図書館の働きを十分に理解していたわけではなかった。国立国会図書館の職員数は当時843名で、毎年30名規模の職員採用

に際して、いわゆる司書資格を求めず、大学での多様な専門分野の卒業生を広く採用しており、就職後に館内で計画的な専門実務教育を実施して職員としての必要な育成を図るシステムをとっていた。加えて、私の場合は30歳時から2年間、米国のコロンビア大学東アジア図書館に実務出向して米国有数の最先端の大学図書館で働き、同時に米国社会での実生活を通じて公共図書館はじめ各種図書館の活動を実見する機会を得たことは、その後に自ら図書館人としての人生を全うしたいと考える大きな転機になった。

そのような私が第二の職場として図書館情報学の教壇に立つことを志願したのは、図書館員36年余の実務経験を通じて社会における図書館の働きの奥深さを実感し、そのことを大学教育の場で学生に伝えることに大きな意義を感じたためであった。その思いを当時の関係の皆様を受け止めていただき、得難い持ち場を与えていただいた。

在職6年間を通じて、科目としては図書館概論、図書館サービス論、資料組織概説、資料組織演習、図書館経営論、図書館特論（国立国会図書館論）について前・後期各3日5コマを担当した。演習科目を除いて教科書を使用しないで自製のシラバスを配布して、それをもとに授業を進める形をとった。まさに「教えることは学ぶこと」、還暦を過ぎて教壇に立って毎週数コマを準備することは、かつて30歳代で大学非常勤講師3年間で勤めた僅かな経験では、かなりの難行苦行。幸い還暦直後で体力がまだ

あったし、何よりも教室の学生の前向きの受講姿勢に後押しされながら、教壇に立つて図書館の働きを学生に伝えるという責任感が活力となって、苦勞しながらも乗り越えることができたように思う。

それにしても、前世紀末からのデジタル社会への移行が劇的に加速している。インターネット上の情報がますます多様化して充実し、年代を問わず、それを日常的に活用する人々も増え、図書館に足を運ばなくとも自室の机上端末からかなりの情報を入手できる時代を迎えている。それだけにデジタル社会での図書館では、伝統的に蓄積している印刷媒体の情報を利用しやすくするため著作権等を考慮しながらデジタル化したり、いわゆるポーンデジタル情報も取り込みながら、情報を蓄積して利用可能とする社会装置としての機能の充実が目指されている。デジタル社会において、玉石混交のインターネット情報を賢明に用いると同時に、図書館という社会装置から得られる質の高い情報を活用しながら、それぞれの職業の第一線を生き抜き、また個人の生き方を豊かにするために、図書館情報学を学ぶことを通じて社会に流通する情報について体系的な知識を得ることの意義はますます高まっているように思える。

このように学術情報課程での丸6年が経過する時点で、突然に思いがけず国立国会図書館長に就任することになった。国立国会図書館長は衆参両院本会議における承認後に両院議長連名の辞令を両院議長同席の場で交付される。いま思うに、東京農業大学の学生と接した学術情報課程での経験によって、館長職の任務をより豊かに深めながら果たすことができた。学生との交流を通じて、社会における図書館の働きのあり方に向けられた素朴かつ新鮮な学生の視点を感じ、

そのことで新たな刺激を受けることも多かった。この経験が、国立国会図書館の経営に当たる判断の際に多様性を与えてくれた。

館長在任の丸4年間を経て辞職後、既に丸7年が過ぎようとしている。この間、出身郷土の若人のための育英団体の事業経営や、縁あって就任した私立学校法人理事職の任務を通じて、いずれ未来を担う大学生の育成に関わり続けている。また同時に、半世紀以上前になる就職直後に出会って以来のライフワークとなったテーマの調査により本格的に取り組む日常にもある。このテーマは近代日本発禁図書の全体像に迫り、図書館等に現存するものを発掘する一方、所在不明のものは可能な限りの書誌情報を見極め、それらを記録して総目録として編纂すること。当時の取締実態は長く秘匿されていたが、この半世紀間で少しずつ実態確認できる範囲が広がり、さらにデジタル社会の恩恵により図書館蔵書としての所在検索が格段に容易になっている。日常的にインターネット上での事前調査を重ね、国立国会図書館はもちろん、公共・大学・専門等の各種図書館に実地に出向き、いまま現役の図書館利用者としてお世話いただいていることは有り難い。国内外の各種図書館の「公的な蔵書」の中に近代日本発禁図書が現存する実態を探求し、後世の人々が様々な必要から現物にアクセスできる手掛かりとして役立つ総目録の編纂を近く仕上げたい。このようにして、デジタル社会の進展とともに進化する社会装置としての図書館の現状を利用者として実感する日常を過ごすことができていることは幸いである。

コロナ禍を乗り越えて、毎年の収穫祭で、学術情報課程の同窓会が早期に再開され、多くの卒業生の活動ぶりの近況を聞きながら交歓できる日が待ち遠しい。

年報に記した言葉



生物産業学部 学術情報課程 教授

宇仁 義和

2006年に始まったオホーツクキャンパスの学術情報課程では、3年目の2008年から年報を発行している。授業や見学先、実習の内容と就職状況など定型の報告が主体だが、組写真で構成する表紙と巻頭言は担当教員の自由な表現の場としてきた。毎年の巻頭言について、この場を借りて振り返ってみたい。年報はすべて課程ウェブサイトに掲載している。

最初、2008年度の年報ではオホーツクキャンパスでの学芸員養成の教育方針として「学芸員に共通する知識と技能の修得」と記している。当たり前のことをわざわざ書いているのは、本学部の専門である生物学や生物産業だけでは不足する内容を課程の教育では重視するという意思表示であった。馴染みのない内容にとまどう学生もいたと思う。

2009年度は初めての単位修得者が卒業を迎える年で、42名（生物生産学科11・アクアバイオ学科25・食品化学科2・産業経営学科4）が学芸員の単位を取得して卒業した。当初履修者は未だに過去最高の64名だったので修得率は65% 余りだった。「地味ではあるが、かけがえのない仕事であると、こっそり胸を張って学芸員は働くのである」との一文は響いた人もいたようだ。

年報3年目2010年度は初めての就職者が出た。水族館への新卒での就職者2名である。文章では「じつは世の中すき間だらけである」「この国は一枚岩では決してない。上を向くもの横のくぼみ、動く場所や手掛かりはどこかにある。一様な閉塞感はずいぶん

が装う見せかけである」として、「必要とあればキャンパスはいつでも君を歓迎する。大学とは卒業生との関係を一生続けていく存在なのだから」と結んだ。

本課程の開設は、2008年の博物館法改正に向けた審議会の設置と同じ年である。法改正で課程に直接影響があったのは、2012年入学者から適用された博物館施行規則の変更だった。「博物館に関する科目」が8科目12単位から9科目19単位に増加となったことだ。これを期にいくつかの大学で課程の廃止があったが、国立大学の農学系学部では新設するところがあった。農と学芸員は成長分野なのかも知れない。

新課程1年目の2012年度は網走を話題にした。網走市には登録博物館が4館もあり、いずれも北海道では名の知れた特徴のある重要な博物館ばかりである。キャンパスからバスで行けば1コマあるいは昼休みと組み合わせた2時間ほどの時間で、十分に行って帰ることができる。オホーツクキャンパスは学内に博物館を持たないが、じつは網走という立地環境は学芸員養成において恵まれた条件にあると再認識している。

2013年度はSNS が普及し「まとめサイト」が流行し、インターネットでは「まとめサイト」をつくる作業を「キュレーション」、まとめる人たちを「キュレーター」と呼ぶことが始まった。キュレーターの語は、学芸員や博物館と離れた意味で普及していくのかも知れないと恐れたが、まとめサイトの炎上などからキュレーションという言葉はネットでは見かけなくなった。キュ

レーターの語への侵略は杞憂に終わったようだ。

「消えていいのか、日本の動物園・水族館」、大きな動物の展示は今後ますます難しくなる。財力にものを言わせて珍獣を見世物にする時代は終わり、国内では、釣りや遊びで親しんだ地域の生き物を見直し、世代間の知識や文化の受け継ぎも含んだ展示が試みられている。卒業生には、子どもの頃の思い出を胸に就職を思い描くのではなく、新しい人と動物の関係を作る仕事に取り組んで欲しいと願っている。

農大ロビー展は2015年で第5回となった。2011年度から始めたので回数は西暦1桁と一致しわかりやすい。いつもは学生の話合いで内容を決めているのだが、この年に限っては教員の発案で近藤典生東京農業大学名誉教授と動植物園をテーマにした。そして、進化生物学研究所から国内唯一のエピオルニス全身骨格レプリカ標本を借用し、北海道初公開の機会とした。

2016年度終了時で、当課程の新卒者が契約職員以上の身分でミュージアムに就職した実績は2.1%である。実数では241名中の5名。転職や一時的にでも在職していた卒業生は13名、2015年度までの単位修得者209名で割ると6.2%、16人に1人となる。このあたりが現実的に思える。新卒でなくとも、何らかの形で博物館や動物園、水族館で仕事ができるチャンスは、案外高いのかも知れないと思える数字だ。

2018年の50年前にあたる1968（昭和43）年は明治百年や「開道百年」を祝った。日本の多民族認識や歴史の見直しは必要だが、「開拓」の言葉をタブーにする動きはいただけない。棄民状態を堪えしのぎ、戦争の時代をくぐり抜け、ようやく安堵できる生活を手にした人たちやその子孫を悪者

にしては対立が深まるばかりに思える。必要なのは開拓の歴史を抹消することではなく、事実を見つめ、自分たちとは異なる視点の評価も受け入れることだろう。

この年のみ年報の後ろの話題。3年生は毎年2泊3日で札幌小樽に博物館見学旅行に出掛ける。出発日は、6月に地震に見舞われた大阪を襲った台風が札幌を通過した翌日だった。2018年9月6日、札幌での1泊目の未明に北海道胆振東部地震が発生した。見学は当然中止となり、北海道全体が停電という前代未聞のブラックアウトを体験した。見学レポートも地震体験記に切り替えた。

国際博物館会議 ICOM（イコム）2019京都大会は、日本で始めた開催された ICOM の総会である。京都では博物館の新定義が議論されたが、長くリベラル色が強い言葉を使う一方、機関や教育という基本的な要素が消えるなど、ちぐはぐな印象から議論は紛糾、結果は採決延期であった。しかし、それに至るプロセスは見ていて感動的で、多数意見の強制ではなく、コミュニティの維持と継承を選択した見事な民主的な議論というものだった。

いよいよ COVID-19。コロナによって網走への移動の自粛による農大生不在という2020年の状況は、網走や周辺の農家や漁業者、飲食店にも大きな打撃を与えた。農大生が地域に欠かせない働き手となっていたことを浮き彫りにしたのである。とりわけホタテの稚貝放流への影響は甚大であり、農大生不在の事態にどう対処するのかと市議会で話題となった。

最新の2021年度は農大ロビー展を話題にした。この展示実習は、学内施設が無いことを理由に実際の博物館や展示施設で本番の展示を学生が作り上げる機会となっている。日中は人里離れたキャンパスで過ごし、

市民に接するのがスーパーや飲食店のアルバイトだけという学生にとっては、勉学の成果や本職顔負けの技術や技能、趣味の成果を披露する貴重な機会ともなっている。

自宅とキャンパス、バイト先、この三点セットとは異なる舞台での自己表現の場として、展示に手応えを感じてくれればと願っている。



最上段左：貝殻を使ったアクセサリ作り、小さな子どもの参加では完成までの時間が予想以上にかかった

最上段右：照明器具の調節、その下は資材を広げた列品作業の全体風景

上左：随時実施した展示解説会

上右：アクセサリ作りには男の子も取り組んでいた

右：体験コーナー「ミニミニビーチコーミング」は子どもたちに人気だった下左：さまざまな漂着ゴミは外国からと思われるものも含まれていた

下中：アオイガイ軟体部の標本と殻。殻を2つ合わせた姿が葵の葉に似る下右：小清水海岸の砂と漂着物をういたジオラマ



2019年の農大ロビー展の様子。博物館実習の授業として毎年3年生が取り組む。会場は小清水ツーリストセンター（小清水町）

学術情報課程は虫捕御用の田中芳男から始まった



2010～2018年度 学術情報課程 教授

2019年度～ 非常勤講師

黒澤 弥悦

新たな出会い

慶応2（1866）年、京都では薩長や倒幕勤皇の志士たちと新選組の闘争が絶えない、風雲急を告げる時代。関東平野で昆虫採集に勤しむ虫捕御用の若き侍がい



写真1 田中芳男

た。後の本学前身・東京高等農学校初代校長の田中芳男（写真1）である。

平成22年、梅室英夫先生のご退職により、私は教職・学術情報課程（以下・学情）で博物館学芸員の資格養成を任された。引き継ぎの時、先生はその田中芳男について話された。また同郷の岩手県出身の本学名誉教授で、農芸化学科の内村泰先生にご挨拶に伺った。農大の歴史にお詳しい先生は、私が学情に就かれたことを大変喜んで下さり、突然、「田中芳男を知っていますか？ 農大の学情をよろしく頼みます」と話された。奇しくも、お二人の先生が何故、田中について私に話されたのか。その意味を今、改めて考えさせられる。

田中芳男は天保9（1838）年、信濃国飯田（現・長野県飯田市）に生まれ、後に我が国初の理学博士となる尾張藩の伊藤圭介に西洋医

術・蘭学・本草学を学び、また出府し、幕府の洋学研究機関である蕃書調所^{ばんしょしらべしよ}で舶来植物の調査に従事。そしてフランスの生物学者が同国をとおして日本の昆虫標本作製を幕府に依頼したことで、田中は幕命で昆虫標本56箱を作り携え、パリ万博に旅立つ。これが田中の人生を決定づけることになる。帰国して明治維新と直面。パリ万博の経験から幕臣でありながら新政府に登用される。日本の近代化草創期において博覧会の開催をはじめ博物館・図書館・動物園の創設などに深く関わり、学術文化に偉大な功績を残し近代日本の礎を築いた先覚者である。今日では「日本の博物館・博覧会の父」と呼ばれている。初代校長時代の田中は、国内の私立大学では最も古い、本学「食と農」の博物館の源流ともなる「標本室」（写真2）、また「図書室」の設置など、施設の充実に取り組む。



写真2 高等農学校時代の標本室

着任して初めての見学実習で学生50名程を連れ、名古屋市東山動植物園の伊藤圭介記念室を見学した。室内には伊藤圭介の師であるドイツ人医師・博物学者のシーボルト、そして田中との関係を紹介した展示があり驚いてしまった。この時、私は「農大の実学教育はシーボルトと伊藤圭介に、田中先生をとおして繋る」と力説した。田中との新たな出会いでもあった。今思うと、私の学情での原点は田中芳男から始まったと言っても良い。

本学には全国に知られた農学科の昆虫学研究室があり、昆虫などの生き物好きの多くの学生が集う。講義で虫捕御用の田中先生を語りだすと一瞬、彼らの表情は変わる。学芸員の就職は狭き門である。だが昆虫専門の学芸員として活躍する卒業生が全国に多いのは、単なる偶然だろうか・・・。

改革への挑戦

田中芳男を深く知り始めてきた一方で、課程主任の村清司先生からは「学外実習で学生たちの問題は起こさない様に」と、ご指導頂いた。当時、学芸員と司書の履修者数は、厚木・世田谷キャンパス合わせ、優に250名を超していた。学芸員養成の教員は小西達夫先生と、着任したばかりで不慣れた私で、学生たちへの指導が十分出来なかったことが悔やまれる。学生が実習先で大きな問題を起こしてしまった。実習先から「二度と農大からは受け入れません」と告げられた。評価表は厳しい内容のものも見られた。何とかしなければ、焦るだけだった。

村先生からは「大学内での学情の存在を大きくして下さい。教職・学情の課程会議と運営委員会は、教職から切り離します」と突然、告げられた。それまでの学情は大学の組織としては教職課程とは一体で、そ

の教職の陰に隠れている様な存在だった。実際、大学内での学情は知られた存在ではなかった。学生たちは単に資格を得るだけの軽い気持ちで履修している様にも思えた。小西先生ご退職後、木村李花子先生をお迎えし、大学内外への学情の広報として、先生に『学術情報課程通信』の編集をお願いした。素敵なデザインの課程通信は学情の広報活動として、学生たちに高い意識を持たせるには十分過ぎる程だった。

以前、教職の熊澤恵里子先生は「農大はもっと大学史を学生たちに教えるべき」と話されていた。課程通信では大学史などについても紹介することができる。学祖の榎本武揚と初代学長の横井時敬、そして田中芳男である。殊に学祖からは武士道精神を学ぶことができる。「博物館実習では知識・技術のみならず社会人としてのルールマナーをも指導する」と文科省の指導にある。これこそが学祖たちの武士道精神とも重なると思えた。学生たちの意識改革への挑戦だ。課程主任は村先生から額田恭郎先生、小梁川雅先生、上原巖先生に引き継がれ、歴代の先生方のご指導を頂く度に、気が引き締まり学生指導への思いが強くなっていた。

スマホ社会の現代、机上にそれとペットボトルを置き講義に臨む学生が多い。必ずそれらを仕舞わせる。さらに「歩きスマホは絶対だめ。社会問題になっています。国家資格の学芸員を目指す学生は、その様なことをしてはいけません」とまで指導した。姿勢を正し授業に臨むことを徹底させ、居眠りは厳しく怒鳴ることもあった。「実習先では館長や学芸員さんに常に視られています。昼食時は美しい姿勢で。農大生は食・農と対峙する学生です。私たちは命を頂き生かされています」と教え、実習に送り出した。指導は高圧的になることもあった。

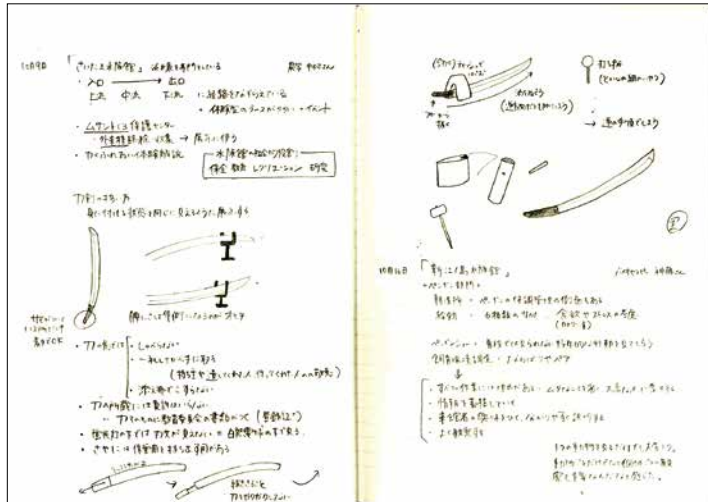


写真3 博物館実習の授業で取り組んだ学生のノート
授業終了後、学生たち一人一人のノートを確認する。

学生たちからの反発は当然あった。副学長の新部昭夫先生に相談したところ「それで、よろしいです。続けて下さい」と、励まされた。また「お行儀の指導は間違いではありません。大いに取り組んで下さい。繰り返し指導しなければ学生には身に付きません。科学的根拠があります」と、非常勤講師の田留健介先生（埼玉県自然学習センター）の奨めもあった。

授業ではノートを配り、手書きによる纏め方を指導した（写真3）。これは実習先で日誌を確認される。この訓練にもなる。レポートは原稿用紙での提出とした。原稿用紙は学芸員・司書資格を履修する極めて意識の高い学生の提案だった。一字一句をマス目に記す行為は、学芸員として美しい日本の伝統的な執筆文化を知る機会にもなる。出席カードには全ての情報を丁寧に記入させる。教務課推奨の「C-Learning」は学生のスマホから登録できるが使用させない。多様な手作業は、国立民族学博物館の初代館長の梅棹忠夫の著書・『知的生産の技術』（岩波新書）を身に付けさせるためだ。

学生たちへの一方的な指導だけではない。教員自身も学芸員である。来館されるお客様と資料を介しての対話や祖先が残し伝えてきた貴重な資料（写真4）、自然界の産物を扱う博物学と向き合うのが主業である。学芸員は清潔感のある身だしなみが大切だ。講義ではネクタイ姿で学生たちと向き合う。実習先の依頼文書の宛名書きや推薦書は、恥ずかしながら、学生時代から続けてきた毛筆で渾身の思いで書き上げた。研究室を訪れる学生たちは、それを緊張した姿で見入っていた。沈黙の教育だ。

農大さんは凄い。立派です！

実習先に学生指導を兼ね挨拶に伺った。以前と異なり、館長・学芸員さんから「農大の学生さんは凄い。立派です！」と言われることが多い。実際、全国から届く実習評価表を整理されている教務課の星野晴美さんが「学生たちは全員凄いです。大変力の入った評価ですね」。また「実習先への提出書類、学生は随分綺麗に書きますね」と、それを引き継いだ木村有紀さんも同じ



写真4 博物館実習の授業で取り組んだ、祖先が使い残した農作業着の調査

ことを話されていた。

学生たちの就活では面接官から「一番立派でしたね」、また「都内有名大学の志願者との合同面接会で私が採用されました。信じられません」、「小論文の試験は原稿用紙でした。授業で使っていたので助かりました」と、知らせてくれる学生たちは多い。某市役所に採用され、新職員研修では「大変立派でした。どこで、そうした所作を学んだの」と、市の担当者から尋ねられ、「博物館の授業で学び、身に付いていたのかも知れません」と話されたことを、ご家族の方が電話で教えて下さった。

学情では司書資格養成の先生方には大変お世話になった。コロナ禍前、昼休み先生方との会食が度々だった。学生から「学情の先生方は何時も仲良しですね」と尋ねられ、学情に思いを寄る学生ではと、思うことがあった。学部学科の先生方からは「学生がお世話になっています」と、度々お声を掛けて頂いた。大学内で学情が知られるようになったのだろうか。

これまで2000名程の学生たちを社会に送

り出した。実習に送り出す以上、全員の名前を覚えなければならない。学生たちの記録を観る度に、教え子たちの顔が浮かぶ。電話やメールが入る。今はお行儀指導ではない。人生相談に変わった。交通事故に遭い、補講の実習にも出席できず、資格が取れないと泣き崩れる学生。歩くことが不可能だった。実習教材をご自宅に持ち込み出張授業をおこなった。今では元気になり頑張っている。

退職し非常勤講師となった今でも、講義では田中芳男の話で夢中になる。学生が講義内容を家族に教えたら、「田中芳男を知る歴史好きの母が驚き、農大は凄い大学だから、しっかり勉強しないとだめよ!と、母から気合を入れられました」と教えてくれた。

本学「食と農」の博物館に館長の江口文陽先生（現・学長）が田中芳男の胸像を建立された。平成31年3月、退職の日だった。万感胸に迫る。博物館を訪れる農大生を温かく迎えてくれる田中芳男先生。ありがとうございます。更なる学情のご発展を祈ります。

「農大産学芸員事情」



学術情報課程 兼 「食と農」の博物館 教授

木村 李花子

農大で「学芸員課程」が開設されたのは1982年で、私は農学科を卒業してすぐに、その第1期生として講義を受けた。実に40年前の学術情報課程の誕生を目の当たりにしたわけだが、開講当初ということもあり履修生は数名だった。実習場は当時の図書館で、標本室が併設されていた。入り口には鶏の剥製を収めた木製の展示ケースが並び、床には材鑑標本等がところ狭しと置かれていた。そこは実習生を世界の秘密に誘う少し薄暗い一隅だった。

時は高度経済成長時代、田中角栄内閣の日本列島改造論に伴い地方創成が叫ばれ、日本中が地方博物館の建設ラッシュに沸いた頃である。外部講師招聘授業として、今は大手となった博物館展示業者代表の講義があった。一躍時代の最前線に立った新しい業種の担い手の高い理念や気概に、スライドの画像が変わる毎に気持ちが高揚していったのを覚えている。博物館は熱くて面白い、学術情報課程はまずそれを教えてくれた。

その後学芸員として「馬の博物館」で17年間働いた。科学から歴史、芸術、民俗、競馬などあらゆる事象を「馬」というキーワードで収集し、再構築していくのが仕事である。古今東西の馬に係る文物や映像の蒐集や展示も行ったが、走りながら学ぶというのが当時の私のやり方だったように思う。立ち止まって学んでいる余裕はなかった。そして理念よりも実地から多くを学ぶ実学型の学芸員が出来上がっていった。「馬

の博物館」では馬事振興に寄与するという目的で、学生時代から取り組んだ再野生馬の生態行動研究を続けることが出来た。しかし研究に専念したいという気持ちが日増しに強くなり、当時フィールドにしていたインドに移住して、NGO・馬事文化研究所を設立することになった。助成金を財源に、8年に亘り動物行動学や民族生態学的フィールドワークに邁進したが、蓄積した科学データが現地の社会問題の解決に一石を投じるなど、研究を通しての社会貢献という手応えを得たのもこの頃である。具体的には草地利用データの開示が、移動民と定住民双方の信頼を得て、長年に亘る軋轢を解消する根拠となったわけだが、もう一つの成果は、科学者として、学芸員としてニュートラルな立場を自らに課すことの重要さを再認識した事だった。我々の多くがそうである定住民にとって、他者としての移動民の世界認識が同等に存在するのを常に意識する事、他者理解のためには科学や博物学的アプローチなどの公平な視点が不可欠だという事、その理念を移牧民の調査をする中で確かなものに出来たのではないかと思う。この多様な世界をより豊かにキュレーションするためには、こうした経験に裏打ちされた理念を明確に持つことが必須ではないだろうか。

半世紀の時を超えて母校に戻り、学術情報課程の博物館情報学分野で教鞭をとる事になった。立場は違えども同じ場所に立ち戻ったわけである。現在の履修生の数は当

時とは比べ物にならないほど増えたが、様々な学科から履修生が集まり、一つの問いに対して各々の専門性や、地域に根差した答えや意見が出てくる。それは当然であり、経験を根拠とした力を感じる。しかしそれだけでは本当の独自性は培われない。学術情報課程が目指すものは全人性であると共に、個々人の持つオリジナリティーを研磨し、外部に発信する能力である。そのような観点から授業では、資料の「鑑賞」の機会も設けている。自然史資料、生理学的資料、民俗資料、考古・歴史資料、美術資料など様々なジャンルの資料を、実物や画像を解説しながら共に鑑賞するのだが、客観的な知識を得た上で、主観的な感想を理論的に記述する事を一番の目的にしている。特筆すべきは現代美術作家、マルセル・デュシャンの「泉」が毎年多くの共感を得る事だ。便器を泉と言い換え、大量生産品を美術品と見做すことで規制概念を破る、という行為に大いに触発されるようだ。通念を打ち破り、新しい見方を探る、これはデュシャンだけに限ったことではなく、科学者でも、キュレーターでも、資料や事物に対してとるべき基本的な姿勢であろう。オリジナリティー溢れる新しい眼を育む、これがもう一つの目的である。

資料のひとつとして生き物を扱うのも農大の博物館実習の特徴である。厚木や世田谷の両学生には、生き物連携センターで1回は実習を行うようにしている。馬の体尺測定や毛色・旋毛などを確認する個体識別が中心であるが、農大に在籍していても大型動物に触れる機会がない世田谷の学生などには、特に新鮮な体験となっているようだ。実験室でDNAレベルまで細分化して生き物を捉えるのではなく、生命そのもの

に直に触れる体験が出来る機会を、協力連携施設の一般財団法人進化生物学研究所が提供して下さっている。また厚木キャンパスの植物園では、キャンパスと一体となった樹木や植物を保全管理することで生命の循環を体験できる場になっている。本施設も含めた博物、動物、植物の学内「館園実習施設」が揃っている事は授業の充実ばかりではなく、本課程の資格取得にとって大きな利点である。コロナ禍で実習生が学外実習を受けられなかった期間、「食と農」の博物館、厚木キャンパスの植物園には許容数を大幅に上回る人数を受け入れて頂いた。この場をお借りして御礼申し上げたい。

学術情報課程では農大が誇る古農機具コレクション3,600点の収納・展示を、現在3か所で、それぞれ異なった形態で展開している。まず「食と農」の博物館2階の「村の古民家」(写真1)では、古民家での具体的な展示、「情景展示」によって、実際の使用状況が理解し易い場になっている。一方、新設のサイエンスポートでは、白い背景によって属性をニュートラル化した「ホワイトキューブ展示」(写真2)により古農機具資料の造形と機能が強調され、新しい解釈や利用のインスピレーションを刺激する場になっている。展示の完成後、真っ先に見に来たのは、留学生たちだった。母国の記憶を農具の中に見つけたのだろうか。ほころんだ顔が印象的だった。そして、最大の収蔵場所、7号館の2階には、まだ展示されることがない資料も含む古農機具資料の圧倒的な塊が、貴重な文化財“農事遺産”が、バックヤード機能を持ち収蔵(写真3)されている。森林科学科の学生が古農機具の材の分析により卒論を書く事例も増えてきたが、教育研究資源として益々活用の機

会が増えそうである。

最近は学芸員を研究専門学芸員と普及教育専門学芸員に分割しようとする動きもあり、全人的学芸員像は変化を余儀なくされるのかもしれない。しかし、農学という総合科学的特徴や、生命、自然、といった根

源的な問題に直接触れる学問を修める農大生には本課程でより広い視野を獲得し、農大産学芸員として、また、学芸員資格を持つ技能者として自信を持って歩を進めてほしい。本課程に従事する者も、日々深化を重ねる事を約すから。



写真1 「食と農」の博物館
2階「村の古民家」



写真3 7号館バックヤード



写真2 サイエンスポート展示

理系司書の養成—学術情報課程に奉職して



2013～2017年度 学術情報課程 教授

那須 雅熙

私が東京農業大学（以下、農大）の学術情報課程（以下、学情）図書館情報学分野に奉職した期間は、2013年4月1日から2018年3月31日の5年間であった。

農大は農学系の総合大学で、おおむね理系の大学であり、前職の女子大とはかなり様子が異なる教育・研究環境にあった。文系では資料と教員がいればどこでも教室、研究室になりうるが、理系では研究室単位の実験・実習データを基礎とする教育・研究体制が一般的である。当然、付属施設である博物館・図書館のあり方もそれに適応していなくてはならない（ちなみに今後は、研究室の枠を越えた「研究データアーカイブ」を構築し、新たな教育・研究情報資源として広く公開し提供することも課題だろう）。情報環境が著しく変化する中で、学情における司書の養成はどうあるべきか。以下は、それに対する5年間の模索の記録である。

1. 「図書館実習」「図書館総合演習」、図書館等の見学

2012年度からの新カリキュラムの導入にあたって、学情では選択科目のうち、「図書館実習」「図書館総合演習」を開講した。それぞれ1単位ながら、最も工夫が必要で新機軸を要求されたのはこの二科目であった。「図書館実習」は、キャリアプラン・デザインを描く機会と捉え、毎年、公共図書館に少数ながら学生を送り出した。また、「図書館総合演習」はゼミ形式により、プレゼンテーションや討論を主体にしたアク

ティブラーニングの場を運営した。図書館等の見学も取り入れたが、希望者が多く募集を全学に拡大した。

（1）図書館実習

実習先は、主として履修生の地元の公共図書館、可能でない場合は世田谷区立図書館、座間市立図書館に受け入れて頂いた。理系学生の実習が重宝され喜ばれたとの報告があった。首尾よく、実習先やその自治体に就職が決定した例もある。

（2）図書館総合演習

個別指導により設定したテーマのもと、各自が調査研究の成果をまとめプレゼンテーションを行い、それをめぐって活発な議論が展開された。題目は以下のように、問題意識が高く時宜に適うものであった（漏れがあればお詫びします）。

〈図書館〉 複合施設について、MLA 連携について、自分だけの空間、サードプレイスとしての図書館を考える、場としての図書館、図書館のロングテールについて、これからの図書館に求めるもの、日本とイギリスの図書館の比較、発展途上国と図書館、図書館で働くには、日本と諸外国の図書館司書制度、司書資格の専門性、図書館員のモラル、図書館と金、図書館委託、近代以前の日本の図書館

〈図書館・情報サービス〉 図書館の機能とサービス、図書館の利用時間、よりよい児童サービスとは、ブックスタート、図書館はヤングアダルトの砦となりうるか、日

本と北欧の図書館のシニアサービス、障害者の人が利用しやすい図書館、情報行動研究、ビジネス支援

〈情報資源〉 出版流通の視点から見た図書館の今後、日本の電子図書館、図書館と電子書籍、マンガ図書館の現在、図書館資料保存

〈公共図書館〉 全国の図書館の事例（取り組み篇、空間篇）、日野市立図書館、高崎市立中央図書館、私たちが夢みる未来の図書館（南阿蘇に図書館がほしいと願う会）、伊万里図書館から学ぶ公共図書館に必要なこと、TSUTAYA 図書館の問題と可能性を考える

（３）図書館等の見学

・国立国会図書館（５回）／国立国会図書館国際子ども図書館（４回）

元教授の大滝則忠館長が、特に歓迎の挨拶と質疑応答の機会を設けてくださり感激した。

・日比谷図書文化館（５回）／千代田区立図書館（１回）

選書企画、展示、イベントなどユニークな文化活動を展開している施設である。特に図書館のキュレーター機能に関心があり、また学芸員の資格の取得も目指している学生に非常に好評であった。

・図書館流通センター（TRC）新座ブックナリー、TRC 本社（２回）

優良な図書館産業や指定管理者も、司書の就職先である。OB の船木園子（書誌データ担当）、大場雄吾（情報システム担当）両氏による案内、説明、質疑応答の接遇を受けた。

・印刷博物館（３回）

活字印刷工程の実習により、印刷物や書籍の成り立ちを知り印刷文化の一端に触れ

た。図書館では博物館固有の専門図書館サービスについて学んだ。

・ブリザベーション・テクノロジー社（３回）

ブックキーパー脱酸性化処理工程を見学するとともに、手作業による簡易補修を実習した。保存科学には生物学、化学や物理学の知見が必要であることを理解した。

２．学芸員・司書（マルチ型有資格者）の養成

最近、博物館、図書館、文書館・公文書館の文化情報資源の統合に向けた MLA 連携の重要性が叫ばれている。学情の履修生も、学芸員や司書だけでなく両方の資格を目指す学生が増えてきている。

キャンパス見学会や「食と農」の博物館における展示会でも、特にこの学芸員・司書の連携についてアピールした。

（１）キャンパス見学会

・2013.8.4～5、2014.8.3～4、2015.8.2～3、2016.8.7～8、2017.8.5～6

展示：資料保存・虫損の修復、電子書籍、データベース検索、夢の電子図書館・博物館めぐり、図書館を題材とした絵本、蔵書票／模擬講義：「図書館の役割って何だろう」

（２）「食と農」の博物館における企画展示会への協力

・2014.3.28～9.15 「農と祈り一田の馬、神の馬」

履修生が苦心して作成した主題書誌を、会場で配布し好評を博した。

（図書館司書履修生（代表：木村到、小林拳）『書誌－日本の馬と信仰』2014年3月／那須雅熙「馬に関するレファレンスについて」東京農業大学「食と農」の博物館、

学術情報課程 企画・編集『日本人と馬：埜を越える十二の対話』東京農業大学出版会, 2015.3, pp.404-407)

・2015.4.1～8.3 「学術情報課程展—その教材と研究資料」

情報資源組織化の三大ツールである「日本目録規則」「日本十進分類法」「基本件名標目表」を中心に陳列した。『日本十進分類法』新訂10版(2014年刊)は、私が日本図書館協会分類委員会委員長として改訂作業に取り組んだものである。

(那須雅熙「学術情報課程展—その教材と研究資料」に寄せて 『農大学報』140, 第59巻第1号, 2015.7, pp.334-336)

3. 農業支援図書館の発展と農学出身司書への期待

近年、農業支援図書館の活動が注目されており、農学を専門とする司書の役割や能力が期待されている。学生の参考に資するため、2016年3月オガールプラザ(岩手県

紫波町情報交流館、図書館等)、同年10月小山市立中央図書館を出張訪問し調査を行い、論文を執筆した。

(那須雅熙「公共図書館の農業支援サービス」日本農学図書館協議会編『日本農学図書館協議会誌』184, 2016.12, pp.11-20)

日本の図書館では、理系の司書があまり存在せず、科学技術に関するサービスが必ずしも十分ではない。最近では、利用者から、また現場から、理系司書の獲得に対する差迫った要求の声が上がっている。このような図書館界の現状を踏まえ、ニーズに応えるため、今後も学情では、更なる研究を重ね、教育方法を検討して、他大学で行われていない理系司書の養成を心がけて頂きたい。

(那須雅熙《退職にあたって》「理系司書の養成について」『農大学報』146, 第62巻第1号, 2018.7, pp.245 -247)

農学部植物園の過去・現在・未来

農学部植物園 准教授

杉山 立志

植物園の歴史は学術情報課程より長く 75周年

農学部植物園の始まりは古く、1947（昭和22）年に設置されている。個別には見本園や樹木園などが存在していたが、植物園と称したのがこの時である。2022年は設置75周年であった。それを祝うように、この数年開花しなかったヒスイカズラや数十年に1度しか咲かないアオノリュウゼツランが開花した（写真1、2）。

学内では、研究材料としている植物を見ることができても、研究材料にならないければ学ぶ機会がない。そこで教科書で学ぶ作物の実物を見たり、多様な品種を学ぶために植物園が設置されたのだろう。当初は用

賀農場内の見本園は小規模だったと『東京農業大学百年史』には書かれている。

1962（昭和37）年に厚木農場の設置に伴い多くの樹木を厚木に移植して充実が図られた。そして1975（昭和45）年に東京農業大学植物園として、実習教育をするとともに、一般公開もされるようになる。1986（昭和61）年には富士農場、那須牧場、網走寒冷地農場、奥多摩演習林内に分園を設置するほど植物園の必要性が評価されていた。そして植物目録も刊行されている。1988（昭



写真1 ヒスイカズラ (*Strongylodon macrobotrys* A.Gray)。自生地では絶滅危惧種に指定されている。色は写真では再現できない。実物は息を呑むほど美しい。



写真2 アオノリュウゼツラン (*Agave americana* L.)。花序は高さ7m程度になる。

和63)年には『東京農大植物園ニュース』が刊行された(終了日は不明)。植物園ニュースの第1号(1988年3月)によれば、組織も充実しており、園長の下に、副園長、運営委員会が設置されており、さらには事務部、教育研究部、管理部、小委員会も設置していた。

1993(平成5)年に神奈川県から厚木農場全体を植物園とする博物館相当施設として指定され、学術情報課程の実習の場として使用できるようになった。学外からも実習を受け入れていた。1998(平成10)年厚木キャンパスの設置に伴い、農学部植物園として改組されている。その後は縮小傾向にあり分園の存在も明確ではなく、2018(平成30)年には専属の職員が退職した。私が着任する2020(令和2)年までの2年間は専属教職員不在で、宮本太先生が園長を兼務していた。温室の管理はサークルの厚木植物研究会の学生が行っていた。彼らの活動場所を提供することで、その対価として植物園所有の植物の管理をするという関係にある。通常の植物園では、パートタイム職員やアルバイト、そして愛好会などのボランティアに支えられる部分全体が、サークル活動で支えられている。「学生が維持管理する植物園」といえる。

孤軍奮闘の現在

植物園としては厚木キャンパス全体が博物館相当施設として指定されている。したがって、温室以外についても管理が必要となる。宮本先生のご尽力により、キャンパス内の樹木の整理を行い、『自生樹木図鑑』『葉木図鑑』が完成し、代表的な樹木にラベルをつける事ができた。現在は『植栽木図鑑』を作成中である。1986年に植物目録を作りながら、その後の情報管理が不十分

であり再度資料整理をしているのが現状である。これは博物館の資料管理の良くない事例として実習では紹介している。

樹木については、宮本先生と私で管理をしている現状である。それでは人手不足である。そこで、博物館実習生に活躍してもらっている。自生植物図鑑と葉木図鑑には鳥瞰図があり、それらにラベルの付いている木々が示してある。その数、約200。複数の木にラベルを貼っているの、200以上となる。博物館実習ではこれらのラベル確認と周辺の除草を初日に行くことでキャンパス全体を知り、植物園らしさを理解できるようにしている。

通常の博物館実習は「収集された資料の維持管理」がほとんどである。しかし、一度形を失った農学部植物園では「維持管理」するものはわずか200のラベルともいえるので、「植物園を再構築する」ということへ方向を大きく変えている。現在は、「椿園」の整備を進めている。厚木キャンパスの椿園は、用賀農場のツバキを移植し、200種近くの江戸ツバキ^{ちようか}で構成される。その中心は華道家の安達潮花氏のコレクションである。これらのツバキのラベルはほとんど失われ、整備もしていなかったので歩けないほどの下草があった。博物館実習で2020年から整備をはじめ、下草の除去が進み、ラベルを作りつつある。しかし、まだまだ歩きやすい状態ではないので、通路の提案、ラベルの提案など、どのようにツバキを見せて、椿園を作るべきかを課題として進めている。「植物園を作る」実習を進めている。

国内でも珍しい、学芸員養成のための大学植物園

博物館実習以外にも農業実習、生物学実験や附属小学校の実習などとして活用され

ており、教育機能は十分に発揮している。その一方で、本学が植物園を設置した当初の目的として推定している「広く植物を理解する場」としては十分に機能していない。分類の異なる多様な植物には異なる栽培条件が求められるので、人手不足では維持管理するのは困難である。では、農学部植物園はこれからどのような方向に進むべきなのか？ このことは着任以来ずっと私の頭を悩ませている。

最近わかったことは、学芸員養成課程を持つ大学で植物園を所有して、養成に活用している大学は農大だけだということだ。学芸員養成課程を持つ大学のほとんどは、大学創立者のコレクションなどを集めた博物館を持つ。一方、植物園を持つ大学では多くが理学部に所属し、研究室の一つとして機能しているだけで、学芸員教育をしていない。そのため、農大の植物園は学芸員養成課程に組み込まれた貴重な博物館相当施設ということになる。この特徴を伸ばし、学内外に知ってもらうためにも、通年で実習を行える「組織」や「施設」が必要と考えている。そのことで、実習の内容をより

実践的に改善し、恒常的な教育の場として博物館機能が充実する。

知ってもらうには、積極的な情報発信が必要である。博物館として考えると不足しているのが、自由散策できる情報が無いことである。一般に植物園にはマップがあり、ラベルがあり、自由に散策する。現状ではマップもあるし、樹木ラベルもあるが、十分ではない。時代を考えるとスマートフォンで地図を見て、樹木の位置や名前、情報が表示されるデジタルマップや植物リストとのリンクなど、新しい仕組みが必要だと考えている。

これらの改善をするには私一人が動いていても、組織を動かすのは困難である。より良い博物館実習を通して、学術情報課程に関わる教職員の協力や実習生たちからの高い評価を得ることで、学内の価値向上に努めていきたい。サークルの学生が栽培に関わり、博物館実習の学生たちが植物園づくりを発案し、それを形にする。「学生が作り、学生が育て、そして学生が成長する唯一の大学植物園」となることを目指している。

卒業生・修了生からのメッセージ



学術情報課程を活かして40年



農学部 農業拓殖学科 1983年3月卒業
農業生産法人 (有) 今帰仁アグー 代表

高田 勝

学芸員が現在の様に一般認識されていない時期に東京農業大学で学術情報課程の講義が行われたことは意義深いものです。

私は、第1期生として講義を受けましたが、その内容は現在でも生活に活かしています。

動物園運営で情報を考える

私は、動物園とこども科学館を併設する沖縄こどもの国と言う施設長・園長の仕事をしていました。現在は、沖縄市の郷土博物館の委員をしています。俯瞰的に物事を見て判断する事が身に着いたのは学術情報課程を履修したからに他なりません。

思い描く構想を現実に落とし込み「琉球弧の野生動物展示」「琉球弧の在来家畜展示（写真1）」「琉球競馬の復活（写真2）」などを行って来ました。

館内の展示内容の明確な発信とともに、マスコミや通信社に取材をお願いし、有効に広く発信する事を考えてきました。



写真1：在来鶏の謡あわせ大会



写真2：伝統衣装を着けての琉球競馬

社会教育施設、生涯学習施設を考える

博物館や動物園を運営するうえで、いつも考え、悩み、試みてきたことは、「社会教育施設、生涯学習施設とはどうあるべきか」という事です。

単に誘客促進を目的にするだけではなく、「来園者に何を発信し、また自分たちや施設がどうあるべきか」をいつもスタッフと話をし、軌道修正をする日常だったのです。

これは、知識、技術以前に考える事であり、根幹をなすもだと今でも思っています。

自営農家として

学術情報課程を履修したことは、博物館や動物園ではなく一般事業、職業でも知識が発揮されると考えています。

私は、専業の畜産農家でもあり、和牛繁殖業を営むとともに沖縄の在来家畜を飼育しています。

現在の家畜は、経済形質を選抜し斉一性が進んだ改良品種になり、効率よく生産されています。一方、在来家畜は生産性が低いため改良品種により消滅してきた経緯があります。ただ、在来家畜は、生活の文化的要素、飼育環境の中で独自性を持って成立したもので生物資源、文化資源、食料資源として多様性の一翼を担っていると考えています。

この家畜群を経済的価値が優先する社会の中で生き残らせる方法を学術情報課程の知識を使いました。認知の定着要素は、社会的な運動性、意味付けや意義付けを行う事と考え、収集・保管・展示・発表と言う事を行った結果、沖縄の島豚や島山羊が料理法や味の評価だけではなく、文化的な背景（写真3）、生物資源、経済資源として注目されるようになって行きました。これは、場所や職業を選ばないと考えています。



写真3：琉球王家の玉陵に供える島豚や島鶏

東京農業大学で学術情報課程を履修した学芸員の品格

現在では多くの大学などで学芸員の資格が取得できるようになり、各大学で特色があるように思います。

田畑で発掘したり、蔵の中を探したりという事もあり、調査や実習では、生活の中に入り込むことも多くあります。

受け入れていただいた方には、配慮と感謝をし、真摯に接する事が重要で、怠ると本人だけでなく、勤め先、大学、教授にまで悪影響があり、個人としての付き合いも途切れてしまいます。また、対応が良ければ、多大な評価を得る事となります。

東京農業大学で資格を得た学芸員は、資料の収集・保管・展示などの専門業務に優れているだけでなく、行動に品格を持って事にあたるのがとても重要だと考えています。今後、学芸員はますます重要なポストになりますし、相手の身になって物事を考え調査、研究も兼ねて後輩たちとともに進みたいと考えています。

学術情報課程の開設40年に寄せて



農学部 林学科 1985年3月卒業

豊橋市自然史博物館

長谷川 道明

学術情報課程開設40年を心からお祝い申し上げます。私は、1981年の入学、1985年の卒業ですので、学術情報課程の開設は在学中のことでした。いわゆる「昆虫少年」だった私は、昆虫の研究が目的で農大に入学し、昆虫学研究室に在籍を許されてからは分類学を専攻しました。研究室では、分類学の研究に必須なタイプ標本を多く所蔵する欧米の博物館の話題は日常的なものでしたし、卒業研究ではスミソニアン国立自然史博物館に保管されているタイプ標本の借用も経験しました。また、新宿にあった国立科学博物館分館で昆虫標本整理のアルバイトをしていましたので、博物館に親しんだ学生時代を送っていたと思います。しかし一方で、昆虫の研究以外では、真面目な学生とは言えず、学術情報課程は単位を落とし、「博物館への就職は現実的ではないので、学芸員資格は無くても別に困ることはない」と高を括って、履修を途中で投げ出していました。

ところがそんな私に幸運が舞い込み、卒業後、戸田市郷土博物館の研究調査員（非常勤の学芸員）の話をいただき、突然、博物館への就職が決まりました。当時、戸田市では、急速な都市化で失われる自然の記録を残すため、『戸田市動物誌』編纂の事業を進めていたのですが、担当されていた方が退職してしまい、その後任人事の相談を受けた恩師が、卒業しても進路が決まっていなかった私を心配して推薦してくださったのです。一転して学芸員の資格が必要になり、焦った私は学術情報課程に泣きつくことになりました。履修を途中放棄しておきながら、非常勤とはいえ博物館に就職することになり、資格が必要になったから聴講したいというのは、我ながら恥ずかしいと思いましたが、快く聴講生として受け入れてくれた当時の学術情報課程の先生方には深く感謝しています。「長谷川君、学生の時に、途中でやめているんだね。」と言いただきましたが、戸田市郷土博物館での実務を博物館実習として認めていただくなど、便宜も図っていただき、何とか学芸員資格を修得することができました。

戸田市郷土博物館での経験で、私は博物館の仕事に強く惹かれるようになり、研究調査員を2年務めた後、岐阜県博物館の学芸嘱託員を3年経験し、1990年に豊橋市自然史博物館に正規の学芸員として採用されました。早いもので、2023年3月で定年退職を迎えます。長々と自分の思い出を書いてしまいましたが、思い起こせば、農大の昆虫学研究室と学術情報課程のお陰で、得た半生とも言えます。

私ごときは、大した役には立てなかったかも知れませんが、日本の博物館、特に地方の自然史系博物館は、この40年で大きく躍進しています。この躍進の陰には、農大の専門研究と博物館を結び付け、多くの人材を輩出した農大の学術情報課程の存在があったことは間違いないと思います。日本の博物館は、現在多くの課題を抱えています。課程開設40年を迎える学術情報課程に感謝とお祝いを申し上げるとともに、これからの博物館を担う人材が多く巣立つことを期待しています。

学術情報課程で学んだこと



農学部 栄養学科 1995年3月卒業

NPO 法人 里山自然学校はずみの里 調査部 調査部長

川田 昌代

この度は、東京農業大学学術情報課程40年という事で、大変おめでとうございます。

私は、高校の授業で生物に大変興味を持ち、自然系の大学を受験することにしました。農業や環境の事を学びながら、栄養士の資格も取れ、さらに博物館の学芸員の資格まで取れるという農大は、とても魅力的な大学だなと思います。私たちにとって、農学も栄養学も博物学もどれも繋がっていて切り離せない大切な学問であると感じます。

学術情報課程では色々なことを学ぶことができました。写真のネガを暗室で焼いたり、製本作業をしたり、アクリルで標本を閉じ込めたり。3年生になると研究室に所属するので、時間のやりくりは大変でしたが、私にとって学術情報課程の時間は、とても楽しい時間でした。

学生たちが最も楽しみにしていたのが、博物館実習です。自分の希望する博物館で、実際に勉強をさせてもらうというものです。先輩や同級生の中には、こんな機会でもなければ行くことができない、小笠原や北海道の施設に希望を出す人たちも多くいました。私は当時、所属していた野生動物研究会というサークルで良く通っていた高尾山の山頂にあるビジターセンターに希望をだしました。サークルでは、週末になると夜通し高尾山でムササビの調査をすることが多く、なじみの場所でした。

当時、学術情報課程をご指導くださった梅室先生は、どんな遠い場所でも、学生たちがお世話になる博物館には、必ず実際に足を運んで挨拶に来るというので有名でした。山頂のビジターセンターにも、汗をかきながら先生は来てくださったのを今でも覚えています。

実習では、登山者に山頂の周りのコースを案内したり、自分で選んだ写真をもとにスライド解説をさせて頂いたりしました。最終的には、ビジターセンターの一角に私がムササビの展示を作成することもできました。たくさんの経験は今でも私の宝物です。

大学を卒業し、私は、岩手県奥州市にある牛の博物館の学芸員の旦那さんと結婚しました。私自身は学芸員になる夢はかないませんでしたが、現在は、岩手県一関市のNPO法人里山自然学校はずみの里で、環境調査や観察会などを行っています。また、NACS-J 日本自然保護協会の自然観察指導員、岩手県環境アドバイザーとしても活動しています。自然観察会や水生生物調査など、参加者に楽しんでもらいながら自然に親しむ機会を提供するにあたり、学術情報課程で学んだ様々な事が役に立っていると感じます。どうやったら、みんなに興味をもってもらい、分かりやすく伝えることが出来るのか、学生時代に学んだ事を思い出しながら研究を重ねています。

牛の博物館では、イベントや行事のお手伝いなど、設立当初からボランティアとして活動させて頂いています(写真1)。主人の博物館での仕事を見ていると、学芸員は展示や解説ばかりではなく、施設の管理や資料の保存など、目に見えない部分で沢山の仕事があり、多

くのスキルが求められる仕事であることを痛感します。学生時代の短い期間では、それらすべてを学ぶことはできませんが、博物館学とは何か、資料を保存することの大切さや、人に伝える技術の基本など、将来にわたって学んでいく基礎を理解することは、とても大切なことであると感じます。是非、現在学んでいる学生さんたちも、濃厚で貴重な時間を大切に、今の学びが将来の糧になるよう応援しております。



写真1 博物館ボランティア活動：牛の博物館（うしはくゆるゆる探検隊）

『失われた20年！？』



農学部 農学科 2003年3月卒業

山崎 勝裕

平成14年度農学科卒業し、現在は巡り巡って地方公共団体で文化財行政の一翼を担っている山崎勝裕と申します。今でこそ学術情報課程で学んだことを活かした仕事に就いているように見えますが、ここに至るまでには様々な紆余曲折がありました。

遡ること学生時代。当時の農学部は、世田谷キャンパスから厚木キャンパスへ移転途上にあり、厚木キャンパスの実質2期生としての入学でした。そのため、研究室が世田谷から移転しておらず、建物自体が建設途中のものがある有様で、例えば農業実習の授業などは、実質荒地を開拓して農地にする、といった状況でした。

そのような中で、好奇心から一年生より教職課程を学んでいた自分は、学術情報課程の募集を知り、即座に申し込むことにしました。その理由は、将来社会に出て勤め上げた後、老後の一環として、自分の趣味である鉄道関係の収集物を集めた私設博物館を作ろうと思い立ったからでした。そして館内に図書コーナーもつくろう、ということから学芸員資格だけではなく司書資格も学ぶことにしました。さてその授業は、厚木キャンパスが途上ということもあり、夏季集中講義が世田谷よりも多かった印象で、集中講義の最終コマで試験ということもあり、集中して学ぶことができました。特に学芸員科目での國學院大學から来られていた博物館学の第一人者の教授の講義では、単位を落とす方が少なくなく（再試験や再履修等の復活制度はありませんでした）、申し込み時にはたくさんいた仲間が、気が付いたら受講生が半分以下にまでなったことを思い出します。また司書科目は、元々受講希望者が少ない上に女性がほとんどで、女子大的な感じだったのが印象的で、先生を囲んで学食で懇親会を企画・開催したことが今でも感慨深く思う次第です。ところで、学術情報課程のうち一番印象的だったのは博物館実習Ⅰ・Ⅱでした。博物館実習Ⅰでは、大学のバスで名古屋市内のユースホステルに宿泊しつつ、愛知県の各ジャンルの博物館・動植物園等実地で学ぶものだったのですが、行きのバスで高速道路に入って早々タイヤがパンクをしてしまい、サービスエリアで立ち往生して先行きの不安を感じたものでした。ただ今でも覚えていることは、見学先の一つであるリトルワールドで世界のビールの飲み比べをしたことや、宿泊先のユースホステルでの講義後に抜け出して名古屋市内で飲み歩いたこと等、遊んだことばかりです。そして博物館実習Ⅱでは、鉄道好きが高じて、現在地に移転する前の「電車とバスの博物館」での実習。電車やバス・旅客機といった各シミュレータで自身の腕を上げる日々で充実した時を過ごしたものの、お客さまとは何かについて強く学びました。

その後、就職することになるのですが、当時は就職氷河期ということで司書・学芸員の募集はほぼ無く、やっぱり老後のための資格と思っていたのですが、園芸と勘違いをして造園職として入職した地方公共団体の外郭団体で、文化財庭園の現状変更を文化庁と協議する業務で多少関わることになったことを始め、ヘッドハンティングで転職した博物館では、実際に学芸員として企画展から常設展示まで様々な形で関わらせていただきました。その後、実

家の家業再建で暫く離れるものの、博物館での経験から実物の鉄道車両（電車）の維持管理を行い後世まで伝承していく活動を本格的に行い、全国各地に飛び回るようになり、実際に電車を所有する等（写真1）、趣味を超えた活動として、今でも週末の度に作業等を行っている状況です。そのせいか、仕事でも家業が貰い火で焼け落ち廃業する羽目になる中、地方自治体の公民館図書室での唯一の司書として司書資格を活かした後、現在の文化財行政業務へ至っています。学術情報課程で学んだ一番の成果は、必要な資料を最低限の項目から検索して的確に入手することが得意になったことであり、それが人生にも活かされているのか、とつくづく感じている次第です。



写真1 使命感をもって、最近クラウドファンディング担当としてお金を集めて長崎市から神奈川県小田原市へ里帰りを果たした路面電車（現在進行形で維持管理補修中）

「運命の出会い」



地域環境科学部 造園科学科 2009年3月卒業

西武造園株式会社

八木 量子

このたびは、学術情報課程40年を迎えられた事、心よりお慶び申し上げます。

私が学術情報課程の履修を決めたのは、高校生の時でした。東京農業大学を一般公募推薦で受験する際、大学案内を隅から隅まで読み漁っていた時に「学芸員」という職を初めて知り、興味を持ったことがきっかけです。

幼い頃から、生き物や植物に興味があった私は、「植物を絵の具（材料）として、絵（図面）を描く」というキャッチコピーだった造園科学科に大変興味を持ち、将来は公園の設計する仕事に就きたいと思うと同時に、自然と人との橋渡し役といわれるインタプリター（自然解説員）にも憧れていました。

「学芸員」を調べると植物園で働くために必要な資格であることを知りました。植物園ならばインタプリターの仕事ができると思い、「学術情報課程も履修できる東京農業大学へ入学したい!」と思いを込めて面接に臨んだことをよく覚えています。

造園科学科に合格・入学した後は、植物の知識を深めながら、学術情報課程の授業にも熱心に取り組みました。が、統一本部で収穫祭一筋だった私は、なかなか授業に出られず、当時は梅室先生に色々とお世話になりました。

実習では、神奈川県内の植物園にお世話になり、真夏の炎天下の中、圃場で播種や、園内の灌水作業、植物の剪定等を行いました。学芸員は涼しい部屋で黙々と調べもの…というイメージとは真逆な仕事でしたが、園内でお客様と触れ合うことが多く、植物園の学芸員は植物と人を繋ぐ仕事であると実感しました。

しかし、植物園での学芸員の採用はなかなかありません。ちょうどその頃、地方自治法の改正により指定管理者制度が導入され、民間会社が公園や植物園の管理運営を代行できる時代へと変わっていたことでした。

そこで卒業後は民間の造園会社に入社し指定管理者として公園の管理運営業務に携わる道を選びました。そんな中、学芸員資格は社内ではまだ珍しかったため、新たに受託した「植物公園（小田原フラワーガーデン）」に私が配属されることになったのです。なんと計画通り。びっくりです。

現場では、未来を担う子供たちに植物の面白さや素晴らしさを伝えることをテーマに、「学芸員」として展示・企画・広報を主として携わりました。実習で感じた通り、植物公園は学芸員とお客様と距離が近く「インタプリター」として植物と人との橋渡し役を担うことができました（写真1）。最終的には園長を務め、植物を絵の具（材料）として地域に愛される植物公園を描く（築く）ことを目標として、公園管理運営士、一級造園施工管理技士、樹木医などの資格も取得しながら学芸員の仕事内容に捕らわれることなく挑戦し続けました。

ふと気が付いたら、高校生の時に思い描いていた「将来の夢」をしっかりと叶えているのだ

なあと。この原稿を書きながら思い出し、自分でも驚いています。

高校生の時、大学案内で「学芸員」というキーワードを目にすることがなかったら、今の仕事には結びついていないなので、「学術情報課程」はまさに私にとっての「運命の出会い」であったと改めて実感し、履修できたことに感謝をしております。

これから履修する学生さんにとっても「運命の出会い」になりますように…今後も学術情報課程がさらに充実し、ますます発展されますことを心よりお祈り申し上げます。



写真1 チューリップの球根植付体験

学術情報課程と現在の仕事とのかかわり



生物産業学部 アクアバイオ学科 2010年3月卒業

多摩六都科学館 研究交流グループ

飯田 麻実

こんにちは。私は今、科学館で働いています。仕事の内容は、子ども向けの自然科学に関するプログラムを開催したり、展示物を作成することです。アクアバイオ学科（現・海洋水産学科）で学んでいたのですが、ここでは主に地学（化石、鉱物、岩石など）の分野を担当しています。大学時代はよさこいソーラン同好会に所属して、網走にある居酒屋「きた鳥」でアルバイトをしていました。

元々は、水族館に就職希望で学芸員資格取得を目指していました。しかし、水族館での就職は叶わず、大学で先生の手伝いや産休代替で中学校の理科の教員をしたり、学芸員とは関係のないような仕事をしながら、今の仕事にたどりつきました。

学術情報課程で学んだことで特に印象に残っていることは、「自分で考えた特別展の企画書をつくる」という授業です。私は大相撲が好きで、お相撲さんが身につけているものの色鮮やかさや、デザインにも魅力を感じていました。そこで、着流しや化粧回し、締め込みのカラーバリエーションといったお相撲さんのファッションを紹介する企画展を考えました。何を展示しようか、どこに配置しようかと考えているときがとても楽しかったのを覚えています。自分が好きなもの、おもしろいと思ったことを人に紹介する楽しさを知る機会となりました。

この仕事をしていて、学術情報課程で学んだことはもちろん、その他にもいろいろな経験が役に立っていると感じています。これを書いている2022年夏は、貝についての企画展に携わっています。貝といえば、「ホタテバイト」（養殖したホタテの稚貝をカゴから出す作業などをするアルバイト）で実際に栽培漁業の一部を見たことや、居酒屋の水槽にいたクリオネを観察したこと、学科の授業で、ホタテを解剖したこともありました。解説や企画を作るときも、全く経験がないことよりも何か自分に関わりがあり、おもしろいと感じていたことは作りやすいです。今回の養殖についての解説パネルを作るにあたっては、北海道で漁業に携わっている大学の同級生に詳しい話を聞くこともできました。

科学館にはプラネタリウムがあるのですが、星の話になると、能取岬（オホーツクキャンパスの多くの学生は行ったことがあるのではないのでしょうか）にドライブに行って星を見たことを思い出したり、標本登録のような作業では、大学時代の先生のお手伝いでアザラシの頭骨を整理したりしていたことがよみがえります。人前で話す機会も多いので、学校で授業をしていた経験も役に立っていると思います。

将来どのような仕事をするかわかりません。私は今、解説文の他にも、企画書や報告書などの文章を書くことや、予算についてお金の計算をしていることも多くあります。展示物を作るために工作をしていることもありますし、解説のための図やイラストを描いていることもあります。学生時代には、このような仕事をするなんて想像もしていませんでした。

勉強ではなく、ただ楽しんでいたような経験、なんとなくやることになった経験も役に立つことがあるかもしれません。いろいろな経験をして、学生生活を楽しんでほしいと思っています。



多摩六都科学館の地学の教室開催中の様子



展示室5 地球の部屋

知を満たしてくれる場としての博物館、 お客様の疑問や不思議に応える立場の学芸員

農学部 農学科 2013年3月卒業
白馬五竜高山植物園 植栽担当学芸員

風間 勇児

2012年度東京農業大学卒業生の風間勇児です。現在、長野県白馬村にある白馬五竜高山植物園で学芸員として働いております。白馬村は長野県北部にある小さな村で県内有数の豪雪地帯として知られています。冬はスノースポーツが盛んで、当植物園も冬場はスキー場として運営しています。村の西側には北アルプスの峰々がそびえており、北アルプスの名峰「五竜岳」から伸びる遠見尾根^{とおみ}の1,500m～1,650mの範囲にあるスキー場ゲレンデが夏場そのまま植物園になります。冬場3m以上の積雪がある特殊な環境のため、植物園としての営業期間は積雪のない6月から10月の5ヶ月間と短いですが、夏場の最高気温が25℃以上にならない冷涼な気候を活かしてコマクサをはじめ、国内の高山植物のみならず、アジア、ヨーロッパの高山植物も含め300種以上の高山植物を栽培展示しています。



12万株のコマクサ群生地 (7月中旬)

私が東京農業大学在学中に学術情報課程を履修したきっかけは、主に二つありました。まず一つ目は、幼い頃より博物館に馴染み深かった点です。幼いころから本といえば物語よりも科学書や図鑑を見ている方が好きでした。本では文字と写真でしか語ってくれませんが、博物館に行けば実物や模型を見ることができます。また、学校の授業とは異なり自分が興味のある分野を自分のペースで学ぶことができるという点も私が博物館を好きな理由のひとつです。ここで述べている「博物館」とは、自然史博物館や民俗博物館に限らず、植物園や動物園、水族館、美術館も含まれます。このことを履修して間もなくの「博物館概論」の講義で学び、とても納得がいったのを覚えています。

学術情報課程履修の二つ目の理由は、大学卒業後は生物の持つ魅力についてのメッセンジャーとして活動したいと思った点です。学術情報課程では生涯学習や社会教育についての講義がありますが、学校教育とは違ったより多角的な視点で資料の魅力を伝えることができる点は博物館の持つ魅力であると思っています。学校教育の現場では、教科書に書いてある

ことを短期間で学び、テストで習熟度を試しますが、所詮は短期で覚えた内容は知識として記憶に残りません。私は、長い目で見て自分の糧になる知識とは、自分が学びたいと思ったときに必要なことを徹底的に反復して得たものだと思っています。これに関連して、当園勤務中に主体的な学びや、アクティブラーニングについて学びました。子供から大人まで含め当園に来園する方たちの植物について知りたいという意欲を尊重し、来園者の疑問にお客様目線で応えられるよう心掛けています。私が幼少期に博物館を通して、自然科学の道に足を踏み入れたように、当園を通して、生物や自然そのものに対する学びのきっかけになってくれたらと思っています。

最後にこれから社会人になる学生たちに向けてのメッセージです。学術情報課程では資料の扱いについて学びますが、これは今後の人生の生きる糧になります。資料を収集してもデータベースを作成しなかったり、資料に対するラベルが欠損してしまったりすると資料の価値は半減してしまいます。データは資料と同じくらい大切に扱わなければならないものだという事を学術情報課程を通じて学びました。大学4年間の学びや経験は間違いなく今後の人生の大切な資産になります。この資産を整理し大切に、自分の中の生きる糧を培ってください。

学生時代のわくわくドキドキを地域の人たちに



生物産業学部 アクアバイオ学科 2013年3月卒業

高木 大稔

私が学芸員という仕事を目指すきっかけは小学生の時でした。三重県の「おおみや昆虫館」で昆虫標本を作製するキットを母に買ってもらい、職員の方にチョウの胸部圧迫と展翅の仕方を教えてもらったことです。魚釣りや昆虫採集に没頭していた当時の私には、こんな仕事をしている人がいるのかと驚き、のちに学芸員という仕事があることを知った私は、将来は多くの人に、地域に生息する生物を伝える仕事をしたいと思い、学芸員を目指すことにしたのです。

大学で学術情報課程を履修し始めると、日々授業や、館園見学、博物館や学芸員の世界について知ることが楽しく興味深いものばかりで、博物館実習で実際の仕事を体験することや、農大ロビー展の展示作業は自分が憧れた学芸員に近づいていると感じることができ、楽しいものでした。

根室地方にある標津サーモン科学館でおこなった博物館実習は、日々の開館閉館などのルーティン、展示生物の捕獲から水槽での展示・解説の作成までの一連の流れ、地域の子どもの来館学習、そして施設管理に関わる業務まで、特に関心があった水族館の仕事を体験できる貴重な機会でした。なかでも、市村学芸員（現：館長）に館内を案内していただいた後、展示に関する感想と意見を求められ、提案した大水槽への「イトウ」の展示をさせていただいたこと、サーモン科学館周辺の川からバイカモを採集し展示した際は、見栄えよりも生き物本来の姿で展示するようにしなければならぬと教えていただいたこと、職員の方々に自主的に楽しく仕事ができるようなアドバイスをさせていただいたことが特に印象に残っています。

そして私は、現在えりも町郷土資料館・水産の館の学芸員として仕事をしています。当館に常駐の学芸員は私一人。その状況で、歴史・文化・自然史・埋蔵文化財をはじめ、社会教



郷土資料のさび落とし

育の分野や学校への出前授業など、地域にかかわる様々な仕事をこなしています。

職員として5年目の現在、私はインターンシップや職場体験の受入で博物館の仕事を教えたり、小学生の授業などで地域について人に教える立場になりました。教える際には、博物館実習の経験を活かし、地域や博物館の現状、疑問に思ったことを自分で探求していく楽しさを見つけられるように意識しています。今では、地域の人々や子どもたちが、日常の中で疑問に思ったこと、地域で見つけた生物や地域の歴史などを資料館まで聞きに来てくれるようになりました。私とのそうしたやりとりをきっかけに学芸員を目指して勉強している高校生がいると保護者から聞くこともあり、子どもの頃の夢の実現に近づいていることを実感しています。生物に関わらず、幅広い分野でそれを継続するためには、日々の情報収集や調査、勉強が欠かせません。自分で勉強していくことはもちろんのこと、道内の博物館や学芸員とのネットワークに助けられたり、学生時代にお世話になった博物館関係の方々に教えていただくこともあります。また、意外にも、学生時代に学術情報課程で使用していた教科書が役に立ったりすることもあります。

今後も、継続的により多くの人たちが身近な地域について探求や再発見をするきっかけを作る学芸員になれるように、務めていきたいと思っています。

学芸員や司書の資格は「飾り」だろうか



応用生物科学部 生物応用化学科 2014年3月卒業

株式会社自然教育研究センター

岩下 菜智

「学芸員資格をとれば、皆さんみたいな仕事に就けますか？」

職場体験でやってきた高校生の無邪気な言葉に、さて何と返答しようかと迷った。定番の「この仕事に就くには、どんな勉強やスキルが必要ですか？」という質問。これといった能力もなく、専攻と違うことを仕事にした私は、いつも困ってしまう。その結果、見栄も手伝って、学芸員課程の話をしてしまったため、冒頭の、何とも答えにくい言葉を受ける羽目になったのだった。

大学卒業から、9年目。新卒で都内の公園施設に就職し、異動も経験しつつ、公園の仕事を続けてきた。解説（写真1）、展示作成、イベント、団体対応、商品開発など、様々な業務を担当し、最近では大型催事の統括や、マネジメント業務も任されている。

出身学科は、生物応用化学科、通称「化学」。その名の通り、「無機化学」「生物化学」「環境化学」「分析化学実験」と、化学の授業がずらりと並ぶ。高校時代から好きだった化学の世界は興味深かった。一方で、もっと幅広く学びたいという思いもあった。そうした欲求を満たしてくれたのが、学芸員科目・司書科目だった。



写真1 林での解説風景

学術情報課程では、ある時は法律を読み解き、またある時は、資料の分類を学んだ。絵本の読み聞かせや、農機具のスケッチもした。仕事で活かされた経験もある。黒澤先生の樹脂

標本製作の授業、大滝先生の法規の授業。変わったところでは、惟村先生の論文検索演習や、葛城先生の偏愛マップ作成も、社会人になって意外な場面で役立ったものの一つだ。授業外でも、履修仲間と博物館の企画展を観に行くなど、多くの刺激を受けた。様々な学部仲間と共に学び、専門分野と全く別のことを知るのは、純粋に楽しく、視野が広がる経験だったといえる。

国立科学博物館での博物館実習も、素晴らしい体験だった。収蔵庫にこれでもかと並ぶ標本、資料の分類とデータベース化、研究部の先生方から直接うかがった研究への熱意、業界を牽引する展示や教育普及の取り組み。10日弱の実習は、「こんな、知の面白さにかかわれる仕事をしたい」と気持ちを固めるには、十分すぎるほどの影響力があった。

世の中には、面白いことが無数に存在する。博物館や自然公園で解説を聞くと、何となく眺めていたものに、突然ストーリーが生まれ、見方が変わる瞬間がある。こうした、ちょっとしたアプローチで、人々がそれまで見えていなかった面白さに気づけるよう、お手伝いをしたい。そんな思いが、今も私の仕事へのモチベーションとなっている。

「学芸員や司書の資格をとれば、博物館や図書館に就職できるか」と問われれば、答えは否。これらの就職先は限られている上、現場には資格などなくても優秀な方が何人もいて、「学芸員資格は飾り」などと言われても、無理もないように感じる。

しかし、私自身が「学術情報課程を履修しなくても、現在の仕事をしていたか」と聞かれたら、ノーと答えるだろう。資格がなくても今の職には就けるが、この仕事を選び、自分なりの目標や志、使命感を持って日々働いているのは、学生時代の経験があつてこそだ。

敢えて言おう、学芸員資格も司書資格も、飾りである（こんなことを書いたら、怒られるかもしれない）。だが、資格取得のための道のりは、決して飾りではない。自ら興味を持って広い視野で学び、知る面白さ、伝える楽しさを知った経験は、かけがえのない財産なのだから。

「学業両立のススメ」



地域環境科学部 造園科学科 2015年3月卒業

第一東京弁護士会図書室 臨時職員

稲田 香帆

学術情報課程40年、誠にありがとうございます。今回このようにお祝いの機会を頂けた事、大変嬉しく思います。

さて、学術情報課程の思い出というが大いに学びの機会に溢れ、楽しいばかりの記憶しかありません。

とはいえ、学習することが増える以上、負担も増えることは事実です。

私は教職課程こそっていませんでしたが、学科の授業に加え興味のある他学科の講義の聴講、部活動、サークル活動、縁あって任された収穫祭文化学術展の本部役員業務、苦学生として避けられないアルバイト、やるべき事もやりたい事も多い大学生の時間に余暇こそ意識して確保しても、そこに暇はなかったと記憶しています。履修意向の面談の際もスケジュール管理について確認された記憶がありますので、一般に学生が大変だと感じるものだったのかもしれない。

それでも、私は学科と学術情報課程を両立し、農大生としてやりたい事を諦めなかったことを後悔していません。大学生活との両立の中で、学術情報課程での学びを大学生活ですぐに活用し、そこで得た経験を見直して学術情報課程の学習の一助とするサイクルの実現により、資格取得以上に大きな成長があったからです。

例えば、当時造園科学科の4年次前期には対象地の自然再生計画を立案する講義がありました。現地調整を実施し、おのおので計画立案をすすめ、最終的に計画書の提出とプレゼンを行うものです。私はこれに個人で取り組むにあたって、対象地の概要や歴史・計画上の課題とした水質改善・水路などについて論文をはじめとする研究資料の収集を行うため図書館を利用しました。欲しい情報を得るための手法は学術情報課程で学んでいたもので、資料を厳選することだけに時間を使うことができました。その後も計画立案のため、学術情報課程で学んだ情報技術やサービス論・資料展示の手法など持ちうる知識を駆使してまとめ上げ、チームで発表した友人たちに劣らぬ計画書を作成できました。

これに私が気づいたのは卒業間近のことでしたが、学術情報課程を履修して良かったと心から思います。

そんな私ですが、現在は法律図書館で司書として働いています。専門的な分野にこそ高度な情報収集と取捨選択の技術が必要だと身を持って知ったからこそ、専門図書館で働きたい気持ちが強かったためです。法曹とは縁などないと思っていましたが、この業界もなかなかどうして楽しいですよ。

さいごに、学術情報課程に感謝を、それから未来の履修者の皆さんがこの課程で得た学びを文化的な営みの中で活かしていけることを願って筆を置かせていただきます。

豊かな学びの時間



科目等履修生 2016年3月修了

白^{はく} marunouchi マネジャー

中村 奈津子

学術情報課程創設40周年を迎えるにあたり、心よりご祝辞を申し上げます。

私は2014年より2年間、科目等履修生として在籍させていただきました。

当時は写真事務所に勤務し、写真ギャラリーの企画運営と写真家のマネジメントをしていました。ギャラリーサイドとして作家と展覧会を作り、ファンドレイジングをしたり、マネジメントの立場で美術館やギャラリーの学芸員さんと接するうち、私も学芸員資格を取得したいと考えるようになりました。社会人が学芸員の資格を取得するにはいくつか方法がありますが、悩んだ末に、実際の講義を受講できて通学の便がよい農大を志望しました。私は教育学部の文系出身ですが、寛大なお計らいにより受講を認めていただけたのです。職場や家族の協力を得られたことも受講の背中を押してくれました。

講義では娘と同世代の学生さんと机を並べ、睡魔と闘いながらレポートを仕上げ、鈍る記憶力をフル稼働して試験勉強、緊張の実習発表……。すべての学びが血となり肉となったと感じています。現役学芸員や一線で活躍されている先生方による講義は、実践的で参考になることが多くありました。授業を契機に写真ギャラリーの照明をLEDに入れ替えたり、現在は陶芸作品や掛軸、古物などを日常的に扱っています。地域に開かれた大学附属博物館が隣接しているのも魅力でした。なにより特筆すべきは黒澤先生のお行儀指導でしょう。人として大切な心構えを教授されたことを懐かしく思い出します。

履修中、もっとも心に残っているのは博物館実習です。私は現代アートを扱う原美術館（2020年閉館）で実習しました。副館長や学芸員の方からレクチャーを受けたり、作品に間近に接したり、憧れの美術館で貴重な経験をさせていただきました。しかし、学芸員の仕事の現場を知るうち、資格を持っているだけでは通用しない、険しい道のりでもあると思いました。

履修が修了して2年半後、事務所が写真ギャラリーから撤退するタイミングで転職し、縁あって現在は陶芸や工芸作品を中心に扱うギャラリー（写真1）の立ち上げから関わっています。陶芸家・辻村史朗氏の作品を常設展示し、年に数回企画展作家の作品展を開催しています。扱う作品は陶芸、ガラス、木工、漆、金工、染色、書籍など多岐に渡り、企画展ごとに作品に合わせた季節のお花や、掛軸、書画などお客さまが実際に使うシーンを想像しながら展示を設えます。また作家と協働し、展覧会の構成や作品のディレクションを担うこともあり、知識、経験に加えて、美意識や感性も求められる仕事にやりがいを感じています。

意思あるところに道は開けるといいますが、願うだけでなく熱意をもって行動を起こせば、夢に近づくことができると実感しました。私の想いに応えてくださった黒澤先生、木村先生はじめ諸先生方、大学関係者のみなさまに深謝いたします。かつてあれほど渴望した学芸員資格は、振り返ってみるとゴールではなく通過点に過ぎません。これからも出会いを大切に

しながら研鑽を積んでゆきたいと思います。農大で過ごした豊かな学びの時間を心の拠りどころとして。



写真1 ^{はく}白 marunouchi

「資料」との出会い



国際食料情報学部 食料環境経済学科 2017年3月卒業

東広島市 財務部 資産税課

宮迫 陽奈

「資料」とは何か。司書や学芸員らによって学術的意義を見出された「モノ」である。では、人はどこで「資料」と出会うのだろうか。おそらく多くの人が図書館や博物館で「資料」に初めて出会う。私もその一人だ。ただ真に「資料」と出会い、向き合ったのはこの学術情報課程での授業であった。

私は幼い頃より本や歴史が好きなことがきっかけで、司書や学芸員という職に興味をもった。本や歴史遺物といった「モノ」に触れられて楽しそうという漠然とした気持ちで受講を決めた。そのため、いずれの仕事も「モノ」と人を繋いでいくという観点が私には欠如しており、講義の趣旨を自分の中にすぐに落とし込むことができなかった。特に図書館サービス論では、そもそも図書館での情報提供を図書館サービスとして捉えられていたことに驚いた。博物館経営論では、黒澤先生のお行儀論が多く、博物館経営とどう関係があるのか疑問符が浮かんだ。

しかし先生方と同期たちと現場へ赴く数々の見学実習で、講義の趣旨がフッと自分の中に入った感覚があった。見学実習では、「資料」に携わる人たちの生の声や実際に「モノ」が「資料」としての意義を見出される瞬間を自分の五感で認識し、講義室の座学だけでは得られない、「モノ」と人の繋がりを感じた。

なかでも図書館流通センター（TRC）で情報資源の組織化が行われている現場では出版されていく書籍が、多くの人の手によって、さらに多くの人々にアクセスしてもらえるよう情報が整理、分類されていた。「資料」は「モノ」を通したその先にある人を見据えていないと誕生しないと、実感させられた。また博物館においては、メッセージが込められた「資料」が来館者との出会いによって「展示資料」へと変化し、人々に記憶されていく。その記憶が良質なものであるには「資料」に携わる人の業務への姿勢が重要であると理解することができた。振り返ると、これらの見学実習は、教育研究理念を「実学主義」とする東京農業大学、その学術情報課程で学ぶからこそ意義があると強く思う。

私は授業を通して、司書や学芸員が「モノ」だけを調査・研究・整理・保存していればいいわけではなく、「資料」として学術的意義を見出し、人に伝えることが大切だということ学んだ。私がそう思えたのは、それもこれも那須先生、惟村先生、黒澤先生、木村先生をはじめとする先生方が楽しそうかつ、熱い指導をしてくださったおかげである。教わった知識以上に、先生方が笑顔で楽しそうに話す姿を鮮明に覚えている。

この学びをきっかけに私は卒業後、調査研究をしたいという意欲から歴史学を専攻するために進学した。加えて「資料」のより良い活用のためにアーキビストという職に就きたいと思い、文書館や医科学研究所、平和記念資料館で実務を積んだ。現在は地方の一行政職員として日々を送っているが、地域に残された「モノ」が「資料」として地域の人たちに、ひい

ては過去から未来の人へ繋いでいく一端を担えるよう業務を通して関わっていきたいと思う。

末筆ではございますが、この度は、東京農業大学学術情報課程開設40周年を迎えられた事、心よりお慶び申し上げますとともに学術情報課程の益々の発展と皆様のご活躍を祈念いたしまして、結びの言葉とさせていただきます。



写真1 グループワークで考えた架空の展示企画



写真2 資料レスキューの服装

学生時代の思い出と現在の仕事との関係

生物産業学部 アクアバイオ学科 2018年3月卒業

登別マリンパークニクス

鈴木 麻衣

私の学生時代の思い出は野外でのアザラシの生態調査に参加したことです。北海道には5種類のアザラシが生息または来遊します。その中でも私はゼニガタアザラシに強く興味を持ち調査に参加してきました。ゼニガタアザラシはアリューシャン列島から北海道の襟裳岬の沿岸にかけて生息しています。また5種類のアザラシの中で唯一、北海道で年中見ることができるアザラシです。

特に思い出に残っている調査地は、ゼニガタアザラシの個体数が道内で2番目に多い大黒島です。ここは無人島のため電気や水道はありません。また、宿泊施設もないため、テントを張って約2ヶ月調査を行いました。調査地ではアザラシの個体数調査やドローンを用いて上空から上陸場の撮影などを行いました。調査は早朝から行うことが多いうえ、天候によっては全く見つからない時もあり大変でした。しかし、初めて野生のアザラシを目の前で見たとき、逞しく生きる姿を見て感動したのを今でも覚えています。私が参加していた時期はゼニガタアザラシの繁殖期だったので、調査中は多くのアザラシの親子の行動を観察することができました。

大黒島に生息しているのはアザラシだけではありません。ラッコやオジロワシ、ウミウなど多種多様な生き物が生息していました。生き物が好きな私にとって、この調査は毎日が新しい発見で充実した日々を過ごすことができました。

学生時代は常にアザラシが生活の中にいましたが、それは社会人になった今も変わりません。たとえ飼育されている動物でも野生動物です。動物たちは人間に慣れることはありますが、ペットのように懐くことはありません。動物にとって飼育係は餌をくれる生き物くらいの認識しかありません。そんな飼育担当のアザラシをみていると野生のアザラシを思い出します。野外での観察中にはアザラシの荒々しい面もたくさん見ました。そのおかげで飼育係となった今でも動物との適切な距離をとりながら仕事に取り組むことができると思っています。

水族館には4つの社会的役割があると言われています。その中の1つに生き物の生態を学ぶ「教育・環境教育」があります。私の勤める水族館では「ききやくるいレクチャー」と呼ばれる体験学習を行っており、イルカや鰐脚類、魚類の飼育担当者が生態・飼育について



ゼニガタアザラシに給餌

て解説する場となっています。私は鰭脚類のレクチャーを担当しています。大学で学んだ海棲哺乳類の知識を最大限に生かせる仕事です。レクチャーでは小学生から専門学生まで幅広い年齢層の参加があるので、年齢にあわせた内容や話し方を常に心掛けています。レクチャーでは飼育係が参加者へ伝える立場となります。生き物の正しい情報を正確に伝えられるように学生生活で得た知識と経験を活かしつつ、これからも学ぶことを忘れない飼育係になりたいです。

今後は、学生時代に学んだ海棲哺乳類の知識や情報を少しでも多くの人に伝えていきたいです。そのためには、幅広い年齢層に合わせたパネルや掲示物を作成することが重要になります。そして、楽しみながら学べる水族館を目指して学芸員として務めていきたいです。

学びに匹敵する財産



農学部 畜産学科 2018年3月卒業

一般社団法人長野市開発公社 事業開発課 主事

塚田 泰佑

この度は、東京農業大学学術情報課程開設40周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私が東京農業大学に在学したのは平成26年から29年の4年間になります。幼き頃から動物園の飼育員という目標を掲げ、それを実現するために農大を選びました。在学中は、農学部畜産学科に在籍し、同時に学術情報課程にて学芸員資格取得の勉強に勤めました。

動物園への就職は狭き門とされており、在籍していた家畜育種学研究室の先生にも「心臓に毛が生えていないと難しい。」と言われておりました。学術情報課程の授業では、博物館に関するあらゆる分野を学びましたが、それだけではありません。学芸員としてはもちろん、人として大切なことを多く教えていただいたと感じています。特に博物館実習では、わずか10日間の実習に向けて前年度から、実習先選び、書類の作成、実習先へのアポイント等を行い、実習後は学んできたことの発表・共有を通じて一足先に社会の一部を経験させていただきました。学術情報課程で学んだことを生かし、就職活動では公立動物園の指定管理者である企業2社から内定をいただくことができました。

私は現在、長野市で動物園を指定管理により運営している企業の職員として仕事をしています。職種は、目標としていた飼育ではありません。毎日スーツで出勤し、動物園と関係各所の連絡・調整や、動物園に関わる渉外業務などを行っています。

飼育員とは少し違う職種ですが、動物園をまた違った視点から見ることができ、やりがいと学びの多い仕事です。昨年度は、木村先生、黒澤先生にご依頼いただき、世田谷キャンパスの学術情報課程3年生の皆さんの前で、「動物園の運営・管理」という題目でお話をさせていただきました。この仕事に携わってから日は浅いですが、実際に仕事として経験したことを私なりに学生の皆さんへお伝えしました。卒業後も、農大そして学術情報課程との関わりを持つことができ、大変嬉しく思っております。ありがとうございました。今後も、母校で学んだことを仕事に生かし、その経験を母校に還元することで、日本の博物館や動物園の発展に寄与することができればと考えております。

当時、厚木キャンパスの学術情報課程では農学科、畜産学科、バイオセラピー学科の3学科の学生が合同で講義を受けておりました。「学芸員」という1つのコンテンツを介して、学科を超えた仲間が多くできたことは、講義での学びに匹敵する財産です。現役で学術情報課程を学んでいる学生の皆様、人とのつながりの大切さは卒業してから気付きます。学術情報課程での学びと、そこで出来た学友を卒業してからもずっと大切にしていってください。そして、この文を読まれた私の同期の皆様、ご連絡お待ちしております。一献を交えつつ、昔話に花を咲かせましょう。

末筆ながら、東京農業大学学術情報課程の一層のご発展と皆様方の今後のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

学術情報課程との出会いと選択



農学部 畜産学科 2019年3月卒業

青森県立図書館 会計年度任用職員

原 萌子

この度は、学術情報課程開設40年誠におめでとうございます。恐れ多いですが記念誌への執筆依頼をいただき、とても嬉しく思っています。これから学術情報課程を受講する方に、現在資格取得に向けて勉学に励んでいる方に、私の話からも参考になることがあれば幸いです。

私は2015年に農学部畜産学科(2018年より動物科学科に名称変更)に入学し、3年次からは動物衛生学研究室に所属していました。卒業後は非常勤職員として青森県の三内丸山遺跡センターに2年間勤務、その後、青森県立図書館に会計年度任用職員として勤務し2年目となりました。現在は、正規職員を目指し司書採用試験に向けて勉強中です。

動物に関わることがしたいと畜産学科に入学したため、学術情報課程のことを知ったのは入学後でした。両コースを履修したきっかけは、学芸員＝動物園というイメージから興味があったためで、司書もせっかくなら一緒に、と軽い気持ちで履修を決めました。こんなきっかけでしたが、司書として働きたいと思う今、受講して本当に良かったと思っています。

私がこの道に進みたいと思った一番のきっかけは、4年次の夏に行った青森県立郷土館での博物館実習(写真1、2)でした。1日ずつ、考古・民俗・自然分野などに関わり、展示についての工夫を教えてもらい、資料の手入れや収集した資料の記録作業などをさせていただきました。実習を終えるころに、価値ある資料を後世に残すことに携わりたいと考え始め、就職先について悩み出しました。当時すで



写真1 資料の点検と梱包作業の様子

に一般企業から内定をもらっていましたが、熟考のうえ4年の秋で内定を辞退し、そこから学芸員や司書の募集を探し始め、三内丸山遺跡センターにて採用していただきました。

三内丸山遺跡センターでは発掘された土器の復元や企画展示の準備補助などが主な作業でした。雇用期間が終わるタイミングで青森県立図書館の募集が出ていたため応募してみたところ、司書資格に目を向けてくださり採用になりました。図書館では1年目は一般室カウンターを担当し、2年目は資料収集チームに配属され、寄贈資料の受付・登録や毎週の新刊配



写真2 企画展に向け、大ホールの準備作業中

架などをしており、充実した日々を送っています。学生時代、私は選択科目のうち図書館実習を選びませんでした。学生のうちに実習でもインターンでもアルバイトでも、何か図書館に直接的に関わる経験をしていればよかったと思っています。

私は非常勤職員の道を選びましたが、選択肢としては、内定を頂いた企業で正規雇用で働きながら、学芸員の募集を探す、もしくは公務員試験の勉強をするという手もありました。新卒で、雇用期限のある非常勤という立場になることはリスクもあります。もし同じように迷っていらっしゃる方がいたなら、よく考え、ご家族、先生方、周囲の人にたくさん相談してみてください。私は話ができたおかげで自分の気持ちに整理をつけ、決断に至りました。

最後に、学術情報課程で学ぶ皆様が学生生活を謳歌し、自分の望む進路を選べるよう応援しています。また、当時講義を担当してくださり時に進路相談にも応じてくださった先生方、改めて本当にありがとうございました。東京農業大学学術情報課程が益々発展されることを心から願っております。

76

資料編



東京農業大学世田谷キャンパスにおけるオープンキャンパスでの 学術情報課程のコーナー



学術情報課程関連40年の歩み〈年表〉



西暦（和暦）	主な事項
1978（昭和53）年	1月 東京農業大学図書館標本室が『古農機具類写真目録』（第1集）を発行
1980（昭和55）年	4月 東京農業大学図書館標本室が『古農機具類写真目録』（第2集）を発行
1981（昭和56）年	12月 図書館標本部が「農業資料室」（博物館相当施設）として指定され、実習施設となる
1982（昭和57）年	4月 文部省から学芸員資格取得履修の認可、学芸員課程が発足（課程主任は蛭木 翠教授）
1983（昭和58）年	3月 『東京農業大学図書館標本部所蔵維管束植物標本目録1 シダ植物編』を発行
	4月 文部省から司書資格取得履修の認可
1984（昭和59）年	4月 学術情報課程に改組
1986（昭和61）年	2月 『古農機具類作図テキスト』〈第一集〉を発行
1989（平成元）年	4月 北海道オホーツクキャンパスが開校。生物産業学部が開設（同キャンパスでの学術情報課程の授業は2006年度から）
1993（平成5）年	1月 東京農業大学植物園が博物館相当施設として指定される
1994（平成6）年	3月 『醸造博物館所蔵品図録』（東京農業大学醸造振興会）を博物館実習の一環として発行
1997（平成9）年	4月 学芸員資格取得に関する科目改訂（5科目10単位→8科目12単位）
	司書資格取得に関する科目改訂（19単位→20単位）
1998（平成10）年	4月 厚木キャンパス開校に伴い、同キャンパスにおいて学術情報課程の授業開始に伴う2キャンパス体制となる
2000（平成12）年	4月 教職・学術情報センターに改組（教職課程、学術情報課程、農業資料室が傘下組織）。『履修のてびき』に学術情報課程も掲載開始
	4月 教職・学術情報課程に改組（教職課程、学術情報課程が傘下組織）
2004（平成16）年	4月 東京農業大学「食と農」の博物館（博物館相当施設）が開館
2006（平成18）年	4月 北海道オホーツクキャンパスにおいて学術情報課程（学芸員資格取得）の授業開始
2009（平成21）年	3月 『博物館と学芸員を目指す：東京農業大学オホーツクキャンパス学術情報課程年報』創刊
	6月 北海道オホーツクキャンパスで全国大学博物館学講座協議会（全博協）全国大会を開催
2011（平成23）年	2月 集中豪雨による土砂崩れで被災された一般財団法人奄美文化財団 原野農芸博物館の復旧支援の為、現地での資料クリーニングに協力
2012（平成24）年	1月 第1回農大ロビー展を開催（北海道立北方民族博物館）
	2月 沖縄・奄美・九州・四国方面にて、教材としてイノシシの頭蓋骨を調査・収集（令和元年2月まで）
	4月 学芸員資格取得に関する科目改訂（8科目12単位→9科目19単位）
	司書資格取得に関する科目改訂（20単位以上→24単位）
	9月 特別展「牛と人の生活史」―大山錦子が描く世界―（2012.9.1～9.23）を実施（「食と農」の博物館）
	10月 企画展「古農具展 ―その技と美―」（2012.10.12～2013.3.24）を実施（「食と農」の博物館）
2013（平成25）年	10月 イベント「鋤―その技 伝統的な鋤の使い方」、イベント「連携する博物館と図書館の今昔」（いずれも「食と農」の博物館）、ギャラリートーク（平成25年3月まで12回）
	1月 『学術情報課程通信：農大と図書館・博物館・動植物園を結ぶネットワーク』創刊
	1月 特別展講演会「連携する博物館と図書館の今昔」を実施（講師：大滝則忠国立国会図書館長）
	4月 『耕す 一壟と鋤』（東京農業大学出版会）を神奈川大学名誉教授河野道明博士と共同執筆
2014（平成26）年	8月 世田谷キャンパス旧1号館工事のため、古農機具コレクションを厚木キャンパス木造校舎に一時移管
	3月 「食と農」の博物館2階展示室に、教材として「村の古民家」を製作・設置
	3月 「食と農」の博物館開館10周年記念展示「農と祈り ―田の馬、神の馬―」（2014.3.28～9.15）を実施（「食と農」の博物館）同時開催 午年に因む図書コーナー「農大生の書評―活躍した役畜」
	5月 特別展講演会「馬と人の恋～『遠野物語』とオシラ神をめぐる』を実施（講師：前川さおり遠野文化研究センター学芸員）
	7月 特別展講演会「猿猿」を実施（講師：川田啓介 奥州市牛の博物館上席主任学芸員）

西暦（和暦）	主な事項
2015（平成27）年	3月 『日本人と馬 ―一坪を越える12の対話』（東京農業大学出版会）を「食と農」の博物館と共編集
	4月 企画展「学術情報課程 ―その教材と研究資料―」（2015.4.1～8.3）を実施（「食と農」の博物館）
	10月 「女わざと自然とのかかわり ―農を支えた東北の布たち―」（2015.10.14～2016.3.13）を実施（「食と農」の博物館）
	12月 第5回農大ロビー展「近藤典生と自然動植物公園」を開催（北海道立北方民族博物館）
2016（平成28）年	3月 『農の暮らしに生きた女わざ』（東京農業大学出版会）を「食と農」の博物館と共編集
	10月 田中芳男没後100年記念企画展「田中芳男と東京農業大学 ―博物学から近代農学へ―」（2016.10.12～2017.3.12）を共催（「食と農」の博物館）
2017（平成29）年	10月 企画展「農民芸術 ―編まれた民具」（2017.10.25～2018.3.11）を実施（「食と農」の博物館）
2018（平成30）年	4月 厚木キャンパスに学術情報課程標本室、兼実習準備室（本部棟地下1階より移設）を設置
	4月 （一財）進化生物学研究所主催の企画展「サクラソウ展 ―マスタセンセイからの贈り物―」（4.19～5.6）に展示協力
	10月 平成30年度全国大学博物館学講座協議会東日本部会大会・総会 実施（世田谷キャンパス・横井講堂）
	10月 企画展「ブタになったイノシシたち Wild boars Becoming Pigs ―Domestication―」（2018.10.26～2019.3.10）を実施（「食と農」の博物館）
	11月 生き物文化誌学会「イノシシ例会」講演会実施協力（「食と農」の博物館）
2019（平成30）年	3月 「食と農」の博物館2階に設置する田中芳男胸像の建立に協力
	4月 （一財）進化生物学研究所主催の企画展「サクラソウ展 ―マスタセンセイからの贈り物―」（4.18～5.6）に展示協力
	10月 企画展 小さな隣人「マウスという名の鼠」（2019.10.24～2020.4.15）を実施（「食と農」の博物館）
	11月 東京農業大学全学応援団 ―全学生が応援団？ 今日からあなたも応援団！―（2019.2.6～3.21）を全学応援団所属の履修生2名が「食と農」の博物館2階で展示
2020（令和2）年	4月 北海道オホーツクキャンパス2号館3階に学術情報課程実習室を設置
	6月 『月刊みんぱく』6月号に田中芳男と「食と農」の博物館について執筆（教材配布）
	9月 京都大学名誉教授野澤謙博士の学術資料・図書等を教材として受け入れる
	10月 企画展「闇」から見る恐竜時代（2020.10.9～2021.4.11）を（一財）進化生物学研究所と、また、企画展「自然の中の数学」（同時開催）を、地域環境科学部森林総合科学科 上原 巖教授と共催で実施（共に「食と農」の博物館）
2021（令和3）年	2月 教職課程と合同で、世田谷区立経堂図書館との共催イベント「生きものの色の意味を考えよう」を経堂地区会館別館で開催（21日）
	4月 （一財）進化生物学研究所主催の企画展「サクラソウ展」（4.15～4.21）に展示協力
	4月 特別展「両極の馬具 ―日本人の馬あしらい」（2021.4.23～9.5）を、（公財）馬事文化財団の特別協賛により実施（「食と農」の博物館）
	7月 日本農業新聞に古農機具のコラム「古きを訪ねて」を連載執筆（令和4年3月まで）
	7月 博物館情報学研究室、図書館情報学研究室が11号館1階から2階へ引越（17、18日）
	9月 東京農業大学創立130周年記念展「学祖群像―豊かさをつなぐ」（2021.9.24～2022.9.21）の実施協力（「食と農」の博物館）
2022（令和4）年	3月 厚木キャンパスに一時移管していた古農機具コレクションが、世田谷キャンパス（7号館2階）に戻る
	3月 東京農業大学創立130周年記念誌『学祖群像―東京農業大学の偉人たち』（一般社団法人 家の光協会・「食と農」の博物館編集刊行）監修協力（教材配布）
	4月 サイエンスポート西側に古農機具、北側にビール缶オブジェ（河合省三名誉教授コレクション）、東側に（一財）進化生物学研究所所蔵コレクションを展示協力
	4月 （一財）進化生物学研究所主催の企画展「サクラソウ展」（4.21～5.7）に展示協力
	4月 教職課程と合同で、世田谷区立経堂図書館との共催イベント「五感で学ぶ！生き物探検」を世田谷キャンパスで開催（16日）
	6月 「食と農」の博物館主催の体験イベント「在来馬に乗ろう」に実施協力
	10月 特別展「荒川弘〈百姓貴族〉× TOKYO NODAI 2022」（2022.10.14～2023.3.4）の実施協力
	12月 世田谷区立経堂図書館との共催イベント「学芸員と巡ると図書館員が語る」を実施協力（「食と農」の博物館）（10日）

学術情報課程 歴代主任一覽



代	氏名	氏名ヨミ	役職位名	発令日	任期満了日	所属学科
1	蛭木 翠	ニナキ ミドリ	学芸員課程主任	1982.9.1	1984.3.31	農芸化学科
2	蛭木 翠	ニナキ ミドリ	学術情報課程主任	1984.4.1	1988.3.31	農芸化学科
3	中島 常雄	ナカジマ ツネオ	学術情報課程主任	1988.4.1	1990.3.31	農業経済学科
4	小泉 武夫	コイズミ タケオ	学術情報課程主任	1990.4.1	1992.3.31	醸造学科
5	中村 武久	ナカムラ タケヒサ	学術情報課程主任	1992.4.1	1996.3.31	教養（生物）
6	檜垣 宮都	ヒガキ ミヤト	学術情報課程主任	1996.4.1	1998.3.31	林学科
7	牧 恒雄	マキ ツネオ	学術情報課程主任	1998.4.1	2000.3.31	生産環境工学科
8	吉羽 雅紹	ヨシバ マサアキ	教職・学術情報センター長	2000.4.1	2001.3.31	農芸化学科
9	渡部 邦雄	ワタベ クニオ	教職・学術情報センター長	2001.4.1	2004.3.31	教職課程
10	猪俣 道也	イノマタ ミチヤ	教職・学術情報課程主任	2004.4.1	2010.3.31	教職課程
11	村 清司	ムラ キヨシ	教職・学術情報課程主任	2010.4.1	2013.3.31	栄養科学科
12	額田 恭郎	ヌカダ トモオ	教職・学術情報課程主任	2013.4.1	2016.3.31	醸造科学科
13	小梁川 雅	コヤナガワ マサシ	教職・学術情報課程主任	2016.4.1	2018.3.31	生産環境工学科
14	上原 巖	ウエハラ イワオ	教職・学術情報課程主任	2018.4.1	2021.3.31	森林総合科学科
15	入江 憲治	イリエ ケンジ	教職・学術情報課程主任	2021.4.1		国際農業開発学科

学術情報課程 歴代教員一覽（着任年度順）



氏名	氏名ヨミ	在任期間
梅室 英夫	ウメムロ ヒデオ	1982年度～2009年度
吉村 典夫	ヨシムラ ツネオ	1983年度～1984年度
中村 幸雄	ナカムラ ユキオ	1984年度～1991年度
澤本 孝久	サワモト タカヒサ	1984年度～1994年度
葛城 昭	カツラギ アキラカ	1984年度～1991年度
惟村 直公	コレムラ ナオヒサ	1985年度～
草間 基	クサマ モトイ	1987年度～1995年度
伊藤 全	イトウ タモツ	1989年度～1996年度
山崎 文男	ヤマザキ フミオ	1994年度～1997年度
神谷 淑子	カミヤ シュクコ	1996年度～2002年度
藤野 幸雄	フジノ ユキオ	2000年度～2001年度
西田 俊子	ニシダ トシコ	2002年度～2005年度
中野 捷三	ナカノ ショウゾウ	2003年度～2012年度
小西 達夫	コニシ タツオ	2006年度～2011年度
大滝 則忠	オオタキ ノリタダ	2006年度～2011年度
宇仁 義和	ウニ ヨシカズ	2006年度～
黒澤 弥悦	クロサワ ヤエツ	2010年度～2018年度
木村 李花子	キムラ リカコ	2012年度～
那須 雅熙	ナス マサキ	2013年度～2017年度
村上 篤太郎	ムラカミ トクタロウ	2019年度～

1982年度から1999年度に学術情報課程で開講された 科目担当教員一覧（五十音順）

あ行	た行
天野 善雄	津田 良成
伊香左和子	な行
伊藤 全	長塚 隆
井上 賢治	中村 幸雄
梅室 英夫	二村 健
荻 昌朗	は行
奥 良子	平久江祐司
か行	藤野 幸雄
葛城 昭	や行
加藤 有次	山崎 文男
神谷 淑子	山本 順一
草間 基	吉村 典夫
香坂 敏夫	
児玉 邦二	
惟村 直公	
さ行	
佐々木敏夫	
澤本 孝久	
清水 幹夫	

注）同期間の「履修のてびき」に学術情報課程の開講科目が未掲載だったため、年度ごと・授業科目ごとに記載できず、一覧とした。

世田谷キャンパス 学芸員科目 年度別担当者一覧表

〈1997(平成9)年度～2011(平成23)年度〉 ※1982年度～1999年度までは「履修のてびき」に未掲載

開講科目 *	年度	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)
	単位数			
生涯学習概論	1	清水幹夫	清水幹夫	清水幹夫
博物館概論	2	加藤有次	加藤有次	加藤有次
博物館経営論	1	青木 豊	青木 豊	青木 豊
博物館資料論	2	青木 豊	青木 豊	青木 豊
博物館情報論	1	加藤有次	加藤有次	加藤有次
視聴覚教育メディア論	1	原口光雄	原口光雄	原口光雄
教育学概論	1	清水幹夫	清水幹夫	清水幹夫
博物館実習	5	梅室英夫・佐々木翠	梅室英夫・佐々木翠	梅室英夫・佐々木翠

* 必修科目8科目合計14単位を履修

開講科目 *	年度	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)
	単位数			
生涯学習概論	1	宮地孝宜	宮地孝宜	宮地孝宜
博物館概論	2	A組) 小西達夫 B組) 青木 豊	A組) 小西達夫 B組) 青木 豊	A組) 小西達夫 B組) 青木 豊
博物館経営論	1	梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫
博物館資料論	2	A組) 青木 豊 B組) 小西達夫	A組) 青木 豊 B組) 小西達夫	A組) 青木 豊 B組) 小西達夫
博物館情報論	1	梅室英夫	梅室英夫	及川昭文
視聴覚教育メディア論	1	小川 史	小川 史	小川 史
教育学概論	1	宮地孝宜	宮地孝宜	宮地孝宜
博物館実習	5	梅室英夫・小西達夫	梅室英夫・小西達夫	梅室英夫・小西達夫

2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)
清水幹夫	林 幸克	林 幸克	宮地孝宜
青木 豊	青木 豊	青木 豊	青木 豊
梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫
青木 豊	青木 豊	青木 豊	青木 豊
梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫	小西達夫
原口光雄	原口光雄	小川 史	小川 史
清水幹夫	林 幸克	林 幸克	宮地孝宜
梅室英夫・佐々木翠	梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫・小西達夫

** 博物館法施行規則の一部改正による新課程への移行措置として名目上の開講

2010 (平成22)	2011 (平成23)	2012 (平成24) **	2013 (平成25) **	2014 (平成26) **
宮地孝宜	宮地孝宜	A組) 小川 史 B組) 宮地孝宜	A組) 宮地孝宜 B組) 小川 史	小川 史
A組) 小西達夫 B組) 青木 豊	A組) 小西達夫 B組) 青木 豊	A組) 梅室英夫 B組) 青木 豊	A組) 梅室英夫 B組) 青木 豊	A組) 梅室英夫 B組) 青木 豊
黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
A組) 青木 豊 B組) 小西達夫	A組) 淡輪 俊 B組) 梅室英夫	A組) 木村李花子 B組) 梅室英夫	A組) 木村李花子 B組) 梅室英夫	A組) 木村李花子 B組) 梅室英夫
及川昭文	及川昭文	吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
小川 史	小川 史	吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
宮地孝宜	宮地孝宜	馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
小西達夫・黒澤弥悦	小西達夫・黒澤弥悦・ 梅室英夫	A, B組) 黒澤弥悦・ 梅室英夫・木村李 花子 C組) 黒澤弥悦・淡 輪 俊・梅室英夫・ 木村李花子	A組) 黒澤弥悦・木 村李花子・梅室英 夫・淡輪 俊 B組) 黒澤弥悦・木 村李花子・梅室英夫	黒澤弥悦・木村李花 子・梅室英夫・ 蒲生康重

〈2012(平成24)年度～〉

開講科目*	年度 単位数	2012 (平成24)	2013 (平成25)
生涯学習概論	2	A組) 小川 史 B組) 宮地孝宜	A組) 宮地孝宜 B組) 小川 史
博物館概論	2	A組) 梅室英夫 B組) 青木 豊	A組) 梅室英夫 B組) 青木 豊
博物館経営論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦
博物館資料論	2	A組) 木村李花子 B組) 梅室英夫	A組) 木村李花子 B組) 梅室英夫
博物館資料保存論	2	田邊優子	田邊優子
博物館展示論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦
博物館教育論	2	馬場祐次郎	馬場祐次郎
博物館情報・メディア論	2	吉岡亮衛	吉岡亮衛
博物館実習	3		A組) 黒澤弥悦・木村李花子・梅室英夫・淡輪 俊 B組) 黒澤弥悦・木村李花子・梅室英夫

* 必修科目9科目合計19単位を履修

開講科目*	年度 単位数	2017 (平成29)	2018 (平成30)
生涯学習概論	2	小川 史	小川 史
博物館概論	2	A組) 黒澤弥悦・木村李花子 B組) 青木 豊	A組) 黒澤弥悦・木村李花子 B組) 関 俊明
博物館経営論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦
博物館資料論	2	A組) 木村李花子 B組) 蒲生康重	A組) 木村李花子 B組) 蒲生康重
博物館資料保存論	2	田邊優子	田邊優子
博物館展示論	2	桐山昇一	桐山昇一
博物館教育論	2	馬場祐次郎	馬場祐次郎
博物館情報・メディア論	2	吉岡亮衛	吉岡亮衛
博物館実習	3	黒澤弥悦・木村李花子・蒲生康重	黒澤弥悦・木村李花子・蒲生康重・田留健介

2014（平成26）	2015（平成27）	2016（平成28）
小川 史	小川 史	小川 史
A組）梅室英夫 B組）青木 豊	A組）黒澤弥悦・ 木村李花子 B組）青木 豊	A組）黒澤弥悦 B組）青木 豊
黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
A組）木村李花子 B組）梅室英夫	A組）木村李花子 B組）蒲生康重	A組）木村李花子 B組）蒲生康重
田邊優子	田邊優子	田邊優子
桐山昇一	桐山昇一	桐山昇一
馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
黒澤弥悦・木村李花子・ 梅室英夫・蒲生康重	黒澤弥悦・木村李花子・ 蒲生康重	黒澤弥悦・蒲生康重

** コロナウイルス感染症拡大防止のため、原則オンデマンド授業

2019（令和元）	2020（令和2）**	2021（令和3）	2022（令和4）
小川 史	小川 史	小川 史	小川 史
A組）黒澤弥悦 B組）関 俊明	A組）黒澤弥悦 B組）関 俊明	A組）木村李花子・ 田留健介 B組）関 俊明	A組）木村李花子 B組）関 俊明
黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦・田留健介	黒澤弥悦
A組）木村李花子 B組）蒲生康重	蒲生康重	蒲生康重	蒲生康重
A組）木村李花子 B組）蒲生康重	A組）木村李花子 B組）蒲生康重	A組）木村李花子 B組）蒲生康重	A組）木村李花子 B組）蒲生康重
桐山昇一	桐山昇一	桐山昇一	桐山昇一
馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
A組）村上篤太郎 B組）吉岡亮衛	A組）村上篤太郎 B組）吉岡亮衛	A組）村上篤太郎 B組）吉岡亮衛	A組）青野由利 B組）吉岡亮衛
木村李花子・黒澤弥悦・ 蒲生康重・田留健介	木村李花子・黒澤弥悦・ 蒲生康重・田留健介	木村李花子・黒澤弥悦***・ 蒲生康重・田留健介	木村李花子・田留健介・ 蒲生康重・工藤光平

*** 前学期のみ担当

世田谷キャンパス 司書科目 年度別担当者一覧表

〈1997(平成9)年度～2011(平成23)年度〉 ※1983年度～1999年度までは「履修のてびき」に未掲載

	開講科目*	年度	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)
		単位数			
甲群	生涯学習概論	1	清水幹夫	清水幹夫	清水幹夫
	図書館概論	2	藤野幸雄	藤野幸雄	西田俊子
	図書館経営論	1	二村 健	二村 健	宮沢厚雄
	図書館サービス論	2	藤野幸雄	藤野幸雄	西田俊子
	情報サービス概説	2	神谷淑子	神谷淑子	惟村直公
	児童サービス論	1	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
	レファレンスサービス演習	1	惟村直公	惟村直公・山崎文男	惟村直公
	情報検索演習	1	神谷淑子	惟村直公・山崎文男	惟村直公
	図書館資料論	2	神谷淑子	神谷淑子	神谷淑子
	専門資料論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	資料組織概説	2	林 美里	林 美里	西田俊子
	資料組織演習	2	山崎文男	神谷淑子	西田俊子・惟村直公
乙群	資料特論	1	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
	コミュニケーション論	1	秋山隆志郎	秋山隆志郎	秋山隆志郎
	情報機器論	1	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
	図書館特論	1	山崎文男	山崎文男	山崎文男

* 必修科目 (甲群) および、乙群から2科目以上履修、合計20単位を履修

	開講科目*	年度	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)
		単位数			
甲群	生涯学習概論	1	宮地孝宜	宮地孝宜	宮地孝宜
	図書館概論	2	A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠	A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠	A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠
	図書館経営論	1	宮沢厚雄	大滝則忠	大滝則忠
	図書館サービス論	2	大滝則忠	大滝則忠	A組) 大滝則忠 B組) 葛城慶子
	情報サービス概説	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	児童サービス論	1	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
	レファレンスサービス演習	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	情報検索演習	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館資料論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	専門資料論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	資料組織概説	2	大滝則忠	大滝則忠	大滝則忠
	資料組織演習	2	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠
乙群	資料特論	1	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
	コミュニケーション論	1	宮沢厚雄	葛城慶子	葛城慶子
	情報機器論	1	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
	図書館特論	1	大滝則忠	大滝則忠	大滝則忠

2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)
清水幹夫	林 幸克	林 幸克	宮地孝宜
A組) 中野捷三 B組) 西田俊子	A組) 葛城慶子 B組) 西田俊子	A組) 葛城慶子 B組) 西田俊子	A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠
宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄
西田俊子	西田俊子	西田俊子	大滝則忠
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
中野捷三	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
西田俊子	西田俊子	西田俊子	大滝則忠
中野捷三	中野捷三	中野捷三	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠
長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
秋山隆志郎	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄
長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
山崎文男	山崎文男	西田俊子	大滝則忠

** 図書館法施行規則の一部改正による新課程への移行措置として名目上の開講

2010 (平成22)	2011 (平成23)	2012 (平成24) **	2013 (平成25) **	2014 (平成26) **
宮地孝宜	宮地孝宜	A組) 小川 史 B組) 宮地孝宜	A組) 宮地孝宜 B組) 小川 史	小川 史
A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠	A組) 葛城慶子 B組) 大滝則忠	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 高山直也 B組) 大滝則忠	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙
大滝則忠	大滝則忠	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
惟村直公	惟村直公	葛城慶子	田中岳文	田中岳文
大滝則忠	大滝則忠	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 中野捷三 B組) 大滝則忠	A組) 高山直也 B組) 大滝則忠	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙
長塚 隆	長塚 隆	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子	葛城慶子			
長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
大滝則忠	大滝則忠	A組) 大滝則忠 B組) 惟村直公	A組) 那須雅熙 B組) 惟村直公	A組) 那須雅熙 B組) 惟村直公

〈2012(平成24)年度～〉

開講科目*		年度 単位数	2012(平成24)	2013(平成25)	2014(平成26)
甲群	生涯学習概論	2	A組) 小川 史 B組) 宮地孝宜	A組) 宮地孝宜 B組) 小川 史	小川 史
	図書館概論	2	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
	図書館制度・経営論	2	A組) 高山直也 B組) 大滝則忠	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙
	図書館情報技術論	2	長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆
	図書館サービス概論	2	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
	情報サービス論	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	児童サービス論	2	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
	情報サービス演習	2		惟村直公	惟村直公
	図書館情報資源概論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報資源組織論	2	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
	情報資源組織演習	2		A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙
乙群	図書館基礎特論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス特論	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館情報資源特論	1	葛城慶子	田中岳文	田中岳文
	図書館総合演習	1	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
	図書館実習	1		那須雅熙・ 惟村直公	那須雅熙・ 惟村直公

* 必修科目(甲群)および、乙群から2科目以上履修、合計24単位を履修

開講科目*		年度 単位数	2019(令和元)	2020(令和2)**	2021(令和3)
甲群	生涯学習概論	2	小川 史	小川 史	小川 史
	図書館概論	2	村上篤太郎	村上篤太郎	A組) 田中岳文 B組) 村上篤太郎
	図書館制度・経営論	2	村上篤太郎	村上篤太郎	村上篤太郎
	図書館情報技術論	2	田中岳文	田中岳文	田中岳文
	図書館サービス概論	2	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘	村上篤太郎
	情報サービス論	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	児童サービス論	2	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
	情報サービス演習	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館情報資源概論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報資源組織論	2	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘
	情報資源組織演習	2	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘
乙群	図書館基礎特論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス特論	1	葛城慶子	田中岳文	葛城慶子
	図書館情報資源特論	1	田中岳文	田中岳文	田中岳文
	図書館総合演習	1	村上篤太郎	村上篤太郎	蟹瀬智弘
	図書館実習	1	惟村直公・ 村上篤太郎	惟村直公・ 村上篤太郎	惟村直公・ 村上篤太郎

** コロナウィルス感染症拡大防止のため、原則オンデマンド授業

2015 (平成27)	2016 (平成28)	2017 (平成29)	2018 (平成30)
小川 史	小川 史	小川 史	小川 史
那須雅熙	那須雅熙	那須雅熙	大塚奈奈絵
A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	村上篤太郎
長塚 隆	長塚 隆	長塚 隆	田中岳文
那須雅熙	那須雅熙	那須雅熙	大塚奈奈絵
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子	伊香左和子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
那須雅熙	那須雅熙	那須雅熙	蟹瀬智弘
A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	A組) 高山直也 B組) 那須雅熙	蟹瀬智弘
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
田中岳文	田中岳文	田中岳文	田中岳文
那須雅熙	那須雅熙	那須雅熙	田中岳文
那須雅熙・ 惟村直公	那須雅熙・ 惟村直公	那須雅熙・ 惟村直公	惟村直公

2022 (令和4)
小川 史
村上篤太郎
村上篤太郎
田中岳文
村上篤太郎
惟村直公
伊香左和子
惟村直公
葛城慶子
蟹瀬智弘
蟹瀬智弘
惟村直公
葛城慶子
田中岳文
蟹瀬智弘
惟村直公・ 村上篤太郎

厚木キャンパス 学芸員科目 年度別担当者一覧表

〈1998(平成10)年度～2011(平成23)年度〉 ※1998年度,1999年度は「履修のてびき」に未掲載

開講科目 *	年度 単位数	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)
生涯学習概論	1	清水幹夫	鈴木聡志	鈴木聡志
博物館概論	2	加藤有次	青木 豊	青木 豊
博物館経営論	1	青木 豊	梅室英夫	梅室英夫
博物館資料論	2	青木 豊	青木 豊	青木 豊
博物館情報論	1	加藤有次	梅室英夫	梅室英夫
視聴覚教育メディア論	1	原口光雄	原口光雄	原口光雄
教育学概論	1	清水幹夫	鈴木聡志	鈴木聡志
博物館実習	5	梅室英夫・ 佐々木翠	梅室英夫・ 佐々木翠	梅室英夫・ 佐々木翠

* 必修科目8科目、合計14単位を履修

開講科目 *	年度 単位数	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)
生涯学習概論	1	新井浩子	新井浩子	新井浩子
博物館概論	2	A 組) 小西達夫 B 組) 井上洋一	A 組) 小西達夫 B 組) 井上洋一	A 組) 小西達夫 B 組) 井上洋一
博物館経営論	1	梅室英夫	梅室英夫	黒澤弥悦
博物館資料論	2	A 組) 落合知子 B 組) 小西達夫	落合知子	A 組) 黒澤弥悦 B 組) 小西達夫
博物館情報論	1	梅室英夫	及川昭文	及川昭文
視聴覚教育メディア論	1	小川 史	小川 史	小川 史
教育学概論	1	新井浩子	新井浩子	新井浩子
博物館実習	5	梅室英夫・ 小西達夫	梅室英夫・ 小西達夫	小西達夫・ 黒澤弥悦

2003（平成15）	2004（平成16）	2005（平成17）	2006（平成18）	2007（平成19）
新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子
青木 豊	井上洋一	井上洋一	井上洋一	A 組）小西達夫 B 組）井上洋一
梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫
青木 豊	落合知子	落合知子	落合知子	A 組）落合知子 B 組）小西達夫
梅室英夫	梅室英夫	梅室英夫	小西達夫	梅室英夫
原口光雄	原口光雄	小川 史	小川 史	小川 史
新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子
梅室英夫・ 佐々木翠	梅室英夫・ 佐々木翠	梅室英夫	梅室英夫・ 小西達夫	梅室英夫・ 小西達夫

** 博物館法施行規則の一部改正による新課程への移行措置として名目上の開講

2011（平成23）	2012（平成24）**	2013（平成25）	2014（平成26）
近藤牧子	小川 史	小川 史	小川 史
A 組）大貫英明 B 組）井上洋一	A 組）大貫英明 B 組）井上洋一	A 組）大貫英明 B 組）井上洋一	A 組）大貫英明 B 組）井上洋一
黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
A 組）下湯直樹 B 組）梅室英夫	A 組）木村李花子 B 組）下湯直樹	A 組）木村李花子 B 組）下湯直樹	A 組）木村李花子 B 組）下湯直樹
及川昭文	吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
小川 史	吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
近藤牧子	馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
小西達夫・ 黒澤弥悦・ 梅室英夫	黒澤弥悦・ 木村李花子・ 梅室英夫	黒澤弥悦・ 木村李花子・ 梅室英夫	黒澤弥悦・ 木村李花子・ 梅室英夫・ 蒲生康重

〈2012(平成24)年度～〉

開講科目 *	年度 単位数	2012 (平成24)	2013 (平成25)	2014 (平成26)
生涯学習概論	2	小川 史	小川 史	小川 史
博物館概論	2	A 組) 大貫 英明 B 組) 井上 洋一	A 組) 大貫英明 B 組) 井上洋一	A 組) 大貫英明 B 組) 井上洋一
博物館経営論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
博物館資料論	2	A 組) 木村 李花子 B 組) 下湯 直樹	A 組) 木村李花子 B 組) 下湯直樹	A 組) 木村李花子 B 組) 下湯直樹
博物館資料保存論	2	田邊優子	田邊優子	田邊優子
博物館展示論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦	桐山昇一
博物館教育論	2	馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
博物館情報・メディア論	2	吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
博物館実習	3			

* 必修科目9科目、合計19単位を履修

開講科目 *	年度 単位数	2018 (平成30)	2019 (令和元)	2020 (令和2) **
生涯学習概論	2	小川 史	小川 史	小川 史
博物館概論	2	A 組) 大貫英明 B 組) 黒澤弥悦	A 組) 大貫英明 B 組) 黒澤弥悦	A 組) 大貫英明 B 組) 黒澤弥悦
博物館経営論	2	黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
博物館資料論	2	A 組) 蒲生康重 B 組) 下湯直樹	蒲生康重	A 組) 蒲生康重 B 組) 黒澤弥悦
博物館資料保存論	2	田邊優子	蒲生康重	木村李花子
博物館展示論	2	桐山昇一	桐山昇一	桐山昇一
博物館教育論	2	馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
博物館情報・メディア論	2	吉岡亮衛	A 組) 吉岡亮衛 B 組) 村上篤太郎	A 組) 吉岡亮衛 B 組) 村上篤太郎
博物館実習	3	黒澤弥悦・木村李花子・ 蒲生康重・田留健介	黒澤弥悦・木村李花子・ 蒲生康重・田留健介	木村李花子・黒澤弥悦・ 蒲生康重・田留健介

** コロナウィルス感染症拡大防止のため、原則オンデマンド授業

2015（平成27）	2016（平成28）	2017（平成29）
小川 史	小川 史	小川 史
A組）大貫英明 B組）黒澤弥悦	A組）大貫英明 B組）黒澤弥悦	A組）大貫英明 B組）黒澤弥悦
黒澤弥悦	黒澤弥悦	黒澤弥悦
A組）木村李花子 B組）下湯直樹	A組）蒲生康重 B組）下湯直樹	A組）蒲生康重 B組）下湯直樹
田邊優子	田邊優子	田邊優子
桐山昇一	桐山昇一	桐山昇一
馬場祐次郎	馬場祐次郎	馬場祐次郎
吉岡亮衛	吉岡亮衛	吉岡亮衛
黒澤弥悦・木村李花子・蒲生康重	黒澤弥悦・蒲生康重	黒澤弥悦・木村李花子・蒲生康重

2021（令和3）	2022（令和4）
小川 史	小川 史
黒澤弥悦	A組）田留健介 B組）黒澤弥悦
黒澤弥悦・田留健介	黒澤弥悦
A組）蒲生康重 B組）黒澤弥悦	A組）蒲生康重 B組）黒澤弥悦
木村李花子	木村李花子
桐山昇一	桐山昇一
馬場祐次郎	馬場祐次郎
A組）吉岡亮衛 B組）村上篤太郎	A組）吉岡亮衛 B組）蒲生康重
木村李花子・黒澤弥悦 ***・蒲生康重・田留健介	木村李花子・田留健介・蒲生康重・工藤光平・杉山立志

*** 前学期のみ担当

厚木キャンパス 司書科目 年度別担当者一覧表



〈1998(平成10)年度～2011(平成23)年度〉 ※1998年度, 1999年度は「履修のてびき」に未掲載

	開講科目*	年度	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)
		単位数			
甲群	生涯学習概論	1	清水幹夫	鈴木聡志	鈴木聡志
	図書館概論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館経営論	1	二村 健	宮沢厚雄	宮沢厚雄
	図書館サービス論	2	藤野幸雄	葛城慶子	葛城慶子
	情報サービス概説	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	児童サービス論	1	伊香左和子	藤野幸雄	葛城慶子
	レファレンスサービス演習	1	惟村直公・神谷淑子・山崎文男	惟村直公	惟村直公
	情報検索演習	1	惟村直公・神谷淑子・山崎文男	惟村直公	惟村直公
	図書館資料論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	専門資料論	1	栗田 信	栗田 信	栗田 信
	資料組織概説	2	中村克明	中村克明	中村克明
	資料組織演習	2	神谷淑子・惟村直公・山崎文男	神谷淑子	神谷淑子
	資料特論	1	栗田 信	栗田 信	栗田 信
乙群	コミュニケーション論	1	秋山隆志郎	宮沢厚雄	宮沢厚雄
	情報機器論	1	惟村直公	桑原尚子	桑原尚子
	図書館特論	1	山崎文男	佐々木翠	佐々木翠

*必修科目（甲群）および、乙群から2科目以上履修、合計20単位を履修

	開講科目*	年度	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)
		単位数			
甲群	生涯学習概論	1	新井浩子	新井浩子	新井浩子
	図書館概論	2	中野捷三	中野捷三	中野捷三
	図書館経営論	1	中野捷三	中野捷三	中野捷三
	図書館サービス論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報サービス概説	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	児童サービス論	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	レファレンスサービス演習	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	情報検索演習	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館資料論	2	中野捷三	中野捷三	中野捷三
	専門資料論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	資料組織概説	2	A組) 中村克明 B組) 中野捷三	A組) 榎本裕希子 B組) 中野捷三	A組) 榎本裕希子 B組) 中野捷三
	資料組織演習	2	大滝則忠	大滝則忠	大滝則忠
乙群	資料特論	1	中野捷三	中野捷三	中野捷三
	コミュニケーション論	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報機器論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館特論	1	中野捷三	中野捷三	中野捷三

2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)
新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子	新井浩子
葛城慶子	中野捷三	中野捷三	中野捷三	中野捷三
宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
葛城慶子	中野捷三	中野捷三	中野捷三	中野捷三
栗田 信	栗田 信	栗田 信	栗田 信	惟村直公
中村克明	中村克明	中村克明	A組) 中村克明 B組) 中野捷三	A組) 中村克明 B組) 中野捷三
中野捷三	中野捷三	中野捷三	大滝則忠	大滝則忠
栗田 信	栗田 信	栗田 信	栗田 信	惟村直公
宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄	宮沢厚雄
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
佐々木翠	佐々木翠	中野捷三	中野捷三	中野捷三

** 図書館法施行規則の一部改正による新課程への移行措置として名目上の開講

2011 (平成23)	2012 (平成24) **	2013 (平成25) **	2014 (平成26) **
近藤牧子	小川 史	小川 史	小川 史
中野捷三	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
中野捷三	高山直也	高山直也	高山直也
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子	葛城慶子	田中岳文	田中岳文
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
中野捷三	高山直也	高山直也	高山直也
惟村直公	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
A組) 榎本裕希子 B組) 中野捷三	高山直也	高山直也	高山直也
大滝則忠	大滝則忠	那須雅熙	那須雅熙
中野捷三	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子			
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
中野捷三	A組) 惟村直公 B組) 葛城慶子	A組) 惟村直公 B組) 葛城慶子	A組) 惟村直公 B組) 葛城慶子

〈2012(平成24)年度～〉

開講科目*		年度 単位数	2012 (平成24)	2013 (平成25)	2014 (平成26)
甲群	生涯学習概論	2	小川 史	小川 史	小川 史
	図書館概論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館制度・経営論	2	高山直也	高山直也	高山直也
	図書館情報技術論	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス概論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報サービス論	2	葛城慶子	田中岳文	田中岳文
	児童サービス論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報サービス演習	2			
	図書館情報資源概論	2	高山直也	高山直也	高山直也
	情報資源組織論	2	高山直也	高山直也	高山直也
	情報資源組織演習	2			
乙群	図書館基礎特論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス特論	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館情報資源特論	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館総合演習	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館実習	1			

* 必修科目（甲群）および、乙群から2科目以上履修、合計24単位を履修

開講科目*		年度 単位数	2019 (令和元)	2020 (令和2) **	2021 (令和3)
甲群	生涯学習概論	2	小川 史	小川 史	小川 史
	図書館概論	2	葛城慶子	田中岳文	A組) 田中岳文 B組) 葛城慶子
	図書館制度・経営論	2	村上篤太郎	A組) 村上篤太郎 B組) 田中岳文	A組) 村上篤太郎 B組) 田中岳文
	図書館情報技術論	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス概論	2	葛城慶子	村上篤太郎	葛城慶子
	情報サービス論	2	田中岳文	田中岳文	田中岳文
	児童サービス論	2	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	情報サービス演習	2	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館情報資源概論	2	田中岳文	田中岳文	田中岳文
	情報資源組織論	2	村上篤太郎	村上篤太郎	村上篤太郎
	情報資源組織演習	2	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘	蟹瀬智弘
乙群	図書館基礎特論	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公
	図書館サービス特論	1	葛城慶子	田中岳文	葛城慶子
	図書館情報資源特論	1	葛城慶子	田中岳文	葛城慶子
	図書館総合演習	1	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
	図書館実習	1	惟村直公	惟村直公	惟村直公

** コロナウィルス感染症拡大防止のため、原則オンデマンド授業

2015 (平成27)	2016 (平成28)	2017 (平成29)	2018 (平成30)
小川 史	小川 史	小川 史	小川 史
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	大塚奈奈絵
高山直也	高山直也	高山直也	村上篤太郎
惟村直公	惟村直公	惟村直公	田中岳文
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	大塚奈奈絵
田中岳文	田中岳文	田中岳文	惟村直公
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	伊香左和子
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
高山直也	高山直也	高山直也	葛城慶子
高山直也	高山直也	高山直也	蟹瀬智弘
那須雅熙	那須雅熙	那須雅熙	蟹瀬智弘
惟村直公	惟村直公	惟村直公	惟村直公
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	田中岳文
葛城慶子	葛城慶子	葛城慶子	田中岳文
那須雅熙・惟村直公	那須雅熙・惟村直公	那須雅熙・惟村直公	惟村直公

2022 (令和4)
小川 史
A組) 田中岳文
B組) 葛城慶子
A組) 村上篤太郎
B組) 田中岳文
惟村直公
葛城慶子
田中岳文
葛城慶子
惟村直公
田中岳文
村上篤太郎
蟹瀬智弘
惟村直公
葛城慶子
葛城慶子
葛城慶子
惟村直公

北海道オホーツクキャンパス 学芸員科目 年度別担当者一覧表



〈2006(平成18)年度～2011(平成23)年度〉

開講科目	年度	2006(平成18)	2007(平成19)	2008(平成20)	2009(平成21)
	単位数				
生涯学習概論	1		宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館概論	2	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館経営論	1			宇仁義和	宇仁義和
博物館資料論	2		宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館情報論	1		宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
視聴覚教育メディア論	1			宇仁義和	宇仁義和
教育学概論	1	井上正道	井上正道	井上正道	井上正道
博物館実習	3			宇仁義和	宇仁義和

〈2012(平成24)年度～〉

開講科目	年度	2012(平成24)	2013(平成25)	2014(平成26)	2015(平成27)
	単位数				
生涯学習概論	2		宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館概論	2	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館経営論	2			宇仁義和	宇仁義和
博物館資料論	2		渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕
博物館資料保存論	2		渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕
博物館情報・メディア論	2			宇仁義和	宇仁義和
博物館教育論*	2	入宇田尚樹・宇仁義和	入宇田尚樹・宇仁義和	入宇田尚樹・宇仁義和	入宇田尚樹・宇仁義和
博物館展示論	2		宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
博物館実習**	3			宇仁義和	宇仁義和

* 博物館教育論の評価責任者は後に記載

** 博物館実習の評価担当者は宇仁

*** 博物館法施行規則の一部改正による新課程への移行措置として名目上の開講

2010 (平成22)	2011 (平成23)	2012 (平成24) ^{***}	2013 (平成25) ^{***}	2014 (平成26) ^{***}
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
井上正道	井上正道	入宇田尚樹	入宇田尚樹	入宇田尚樹
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和

2016 (平成28)	2017 (平成29)	2018 (平成30)	2019 (令和元)	2020 (令和2) ^{****}	2021 (令和3)	2022 (令和4)
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕	柳谷卓彦	柳谷卓彦	柳谷卓彦
渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕	渡部 裕	柳谷卓彦	柳谷卓彦	柳谷卓彦
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和
入宇田尚樹・ 宇仁義和	入宇田尚樹・ 宇仁義和	西村一夫・ 宇仁義和	西村一夫・ 宇仁義和	西村一夫・ 宇仁義和	宇仁義和・ 中村元香	宇仁義和・ 中村元香
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和	町田善康
宇仁義和	宇仁義和	宇仁義和・ 渡部裕	宇仁義和・ 渡部裕	宇仁義和・ 柳谷卓彦	宇仁義和・ 柳谷卓彦	宇仁義和・ 柳谷卓彦・ 中村元香

**** コロナウイルス感染症拡大防止のため、原則オンデマンド授業

資格取得のための履修科目一覧表（世田谷・厚木キャンパス）



学芸員資格

科目名	対象年次			単位数
	2	3	4	
生涯学習概論		○		2
博物館概論	○			2
博物館経営論		○		2
博物館資料論	○			2
博物館資料保存論		○		2
博物館展示論		○		2
博物館教育論		○		2
博物館情報・メディア論		○		2
博物館実習*			○	3
所要単位数				19

*3年次終了時に未修得の科目がある場合には、4年次に『博物館実習』のうち「館園実習」を学外では実施できない。『博物館実習』は、週2コマの「実務実習」、「見学実習」、「館園実習」（5日間以上）を実施する。

司書資格

科目名	対象年次			単位数
	2	3	4	
生涯学習概論		○		2
図書館概論	○			2
図書館制度・経営論		○		2
図書館情報技術論		○		2
図書館サービス概論	○			2
情報サービス論	○			2
児童サービス論	○			2
情報サービス演習*			○	2
図書館情報資源概論		○		2
情報資源組織論		○		2
情報資源組織演習*			○	2
図書館基礎特論		○		1
図書館サービス特論		○		1
図書館情報資源特論		○		1
図書館総合演習		○		1
図書館実習**			○	1
所要単位数 ***				24

*3年次終了時に「図書館概論」「情報サービス論」「図書館サービス概論」「図書館情報技術論」「情報資源組織論」「図書館情報資源概論」を未修得の場合は、4年次の「情報サービス演習」「情報資源組織演習」を履修できない。両科目は、それぞれ60時間の演習を行う。

**3年次終了時に必修科目18単位を取得できない場合は、履修することができない。なお、「図書館実習」は45時間以上の実習を公立図書館で行う。

*** 選択科目は2科目2単位以上の修得が必要

履修費用（創設時より）

資格	金額
学芸員資格・司書資格（単修）	130,000円
学芸員資格・司書資格（併修）	180,000円

学芸員・司書資格取得者数

* 平成5（1993）年度までは、聴講生と称した。

年度	大学部	農学部	応用生物科学部	生命科学部	地域環境科学部	国際食料情報学部	生物産業学部	科目等履修生*	合計
	短期大学部	生物生産技術学科	環境緑地学科	—	醸造学科	栄養学科	—		
昭和57 (1982)	学芸員	—	—	—	—	—	—	16	16
昭和58 (1983)	学芸員	82	—	—	—	—	—	12	94
昭和59 (1984)	学芸員	73	—	—	—	—	—	10	83
	司書	9	—	—	—	—	—	4	13
昭和60 (1985)	学芸員	79	—	—	—	—	—	5	84
	司書	35	—	—	—	—	—	2	37
昭和61 (1986)	学芸員	88	—	—	—	—	—	6	94
	司書	33	—	—	—	—	—	0	33
昭和62 (1987)	学芸員	89	—	—	—	—	—	5	94
	司書	35	—	—	—	—	—	0	35
昭和63 (1988)	学芸員	88	—	—	—	—	—	2	90
	司書	55	—	—	—	—	—	2	57
平成元 (1989)	学芸員	80	—	—	—	—	—	3	83
	司書	45	—	—	—	—	—	0	45
平成2 (1990)	学芸員	82	—	—	—	—	—	6	88
	司書	48	—	—	—	—	—	1	49
平成3 (1991)	学芸員	119	—	—	—	—	—	5	124
	司書	54	—	—	—	—	—	1	55
平成4 (1992)	学芸員	80	—	—	—	—	—	9	89
	司書	37	—	—	—	—	—	2	39
平成5 (1993)	学芸員	142	—	—	—	—	—	6	148
	司書	57	—	—	—	—	—	0	57
平成6 (1994)	学芸員	120	—	—	—	—	—	6	126
	司書	63	—	—	—	—	—	0	63
平成7 (1995)	学芸員	147	—	—	—	—	—	11	158
	司書	54	—	—	—	—	—	0	54
平成8 (1996)	学芸員	139	—	—	—	—	—	2	141
	司書	58	—	—	—	—	—	0	58
平成9 (1997)	学芸員	136	—	—	—	—	—	5	141
	司書	52	—	—	—	—	—	0	52
	司書(短大)	8	4	—	3	6	—	—	21
平成10 (1998)	学芸員	140	—	—	—	—	—	1	141
	司書	61	—	—	—	—	—	1	62
	司書(短大)	7	3	—	3	3	—	—	16
平成11 (1999)	学芸員	136	—	—	—	—	—	5	141
	司書	60	—	—	—	—	—	1	61
	司書(短大)	4	9	—	3	4	—	—	20

年度	大 学 部	農学部	応用生物 科学部	生命 科学部	地域環境 科学部	国際食料 情報学部	生物産業 学部	科目等 履修生	合計
	短期 大学部	生物生産 技術学科	環境緑地 学科	—	醸造学科	栄養学科	—		
平成12 (2000)	学芸員	125	—	—	—	—	—	5	130
	司 書	56	—	—	—	—	—	0	56
	司書(短大)	3	4	—	8	8	—	—	23
平成13 (2001)	学芸員	52	18	—	35	22	—	3	130
	司 書	11	6	—	15	18	—	0	50
	司書(短大)	8	6	—	4	4	—	—	22
平成14 (2002)	学芸員	68	14	—	29	13	—	8	132
	司 書	25	14	—	9	26	—	0	74
	司書(短大)	6	9	—	5	3	—	—	23
平成15 (2003)	学芸員	72	9	—	39	28	—	3	151
	司 書	25	3	—	13	14	—	2	57
	司書(短大)	4	3	—	5	6	—	—	18
平成16 (2004)	学芸員	75	22	—	48	27	—	3	175
	司 書	20	17	—	23	21	—	0	81
	司書(短大)	8	1	—	6	4	—	—	19
平成17 (2005)	学芸員	54	25	—	35	22	—	5	141
	司 書	22	12	—	8	15	—	1	58
	司書(短大)	6	0	—	6	3	—	—	15
平成18 (2006)	学芸員	98	25	—	55	23	—	3	204
	司 書	25	8	—	24	16	—	—	73
	司書(短大)	3	0	—	1	6	—	—	10
平成19 (2007)	学芸員	86	18	—	18	16	—	1	139
	司 書	21	12	—	7	14	—	1	55
	司書(短大)	3	5	—	2	3	—	—	13
平成20 (2008)	学芸員	84	13	—	40	27	—	1	165
	司 書	18	16	—	25	23	—	1	83
	司書(短大)	4	0	—	10	14	—	—	28
平成21 (2009)	学芸員	113	20	—	22	20	42	5	222
	司 書	29	11	—	6	7	—	0	53
	司書(短大)	0	5	—	5	5	—	—	15
平成22 (2010)	学芸員	129	28	—	34	21	23	3	238
	司 書	31	9	—	11	12	—	1	64
	司書(短大)	4	5	—	2	5	—	—	16
平成23 (2011)	学芸員	121	16	—	40	25	26	8	236
	司 書	25	6	—	21	14	—	6	72
	司書(短大)	1	2	—	4	4	—	—	11
平成24 (2012)	学芸員	133	36	—	43	25	44	0	281
	司 書	36	18	—	20	10	—	0	84
	司書(短大)	1	4	—	0	4	—	—	9

年度	大学部	農学部	応用生物科学部	生命科学部	地域環境科学部	国際食料情報学部	生物産業学部	科目等履修生	合計
	短期大学部	生物生産技術学科	環境緑地学科	—	醸造学科	栄養学科	—		
平成25 (2013)	学芸員	75	21	—	34	8	19	1	158
	司書	14	14	—	21	8	—	1	58
	司書(短大)	0	1	—	2	2	—	—	5
平成26 (2014)	学芸員	57	15	—	32	10	28	3	145
	司書	12	7	—	11	12	—	1	43
	司書(短大)	3	4	—	2	3	—	—	12
平成27 (2015)	学芸員	68	22	—	13	11	27	2	143
	司書	19	11	—	6	5	—	1	42
	司書(短大)	0	3	—	0	0	—	—	3
平成28 (2016)	学芸員	73	26	—	43	11	31	1	185
	司書	26	14	—	16	8	—	2	66
	司書(短大)	1	1	—	2	0	—	—	4
平成29 (2017)	学芸員	64	21	—	24	6	34	3	152
	司書	17	4	—	5	3	—	1	30
	司書(短大)	6	2	—	5	0	—	—	13
平成30 (2018)	学芸員	90	16	—	14	16	28	1	165
	司書	25	2	—	5	10	—	1	43
令和元 (2019)	学芸員	89	21	—	32	18	20	2	182
	司書	29	11	—	17	14	—	1	72
令和2 (2020)	学芸員	84	17	46	53	18	15	4	237
	司書	36	11	17	22	12	—	0	98
令和3 (2021)	学芸員	108	16	18	33	11	28	3	217
	司書	28	10	8	19	10	—	0	75
累積人数								学芸員	5,863
								司書	2,473

学芸員・司書関連就職先一覧



01 北海道

えりも町郷土資料館
小樽水族館
オホーツク流水館
加瀬観光株式会社「登別マリパークニクス」
釧路市立博物館
札幌市円山動物園
札幌副都心開発公社「サンピアザ水族館」
標津サームン科学館
野付半島ネイチャーセンター
のほりべつクマ牧場
北網走北見文化センター
北海道栗山町教育委員会
美幌博物館
紋別市立博物館

02 青森県

青森県教育庁文化財保護課
青森県立図書館
青森市森林博物館
三内丸山遺跡センター
03 岩手県
岩手大学ミュージアム
奥州市牛の博物館
奥州市教育委員会（歴史遺産課）
NPO法人 里山自然学校はすみの里
紫波町図書館
宮沢賢治イーハトーブ館
盛岡市動物公園

04 宮城県

泉ボタニカルガーデン
国営みちのくの湖畔公園
南三陸町自然環境活用センター

05 秋田県

秋田県立図書館
秋田市大森山動物園

07 福島県

東北サファリパーク
藤田美術館
南相馬市博物館

08 茨城県

アクアワールド茨城県大洗水族館
確実園
国立科学博物館筑波実験植物園・植物研究部
つくば市豊ゆかりの森・昆虫館
農研機構本部情報統括情報システム課
ひたち海浜公園
ミュージアムパーク茨城県自然博物館

09 栃木県

足利市立図書館
あしかがフラワーパーク
井頭公園・都市緑化植物園
宇都宮動物園
栃木県佐野市立図書館
栃木県立日光自然博物館
栃木県立博物館
トマトパーク
那須サファリパーク
那須野が原博物館
日光湯元ビクターセンター
りんどう湖ファミリー牧場

10 群馬県

赤堀歴史民俗資料館
尾瀬保護財団・ビジターセンター
群馬サファリパーク
高崎市青少年科学館
日本蛇族学術研究所（ジャパンスネークセンター）

11 埼玉県

入間市立藤の台公民館
大崎公園・園芸植物園
大崎公園・子供動物園
川口市グリーンセンター
川越市立図書館
草加市教育委員会生涯学習課
国営武蔵丘陵森林公園・都市緑化植物園
埼玉県こども動物自然公園
埼玉県自然学習センター

埼玉県職員（司書）

埼玉県生態系保護協会
埼玉県平和資料館
埼玉県立川の博物館
埼玉県立自然の博物館
さいたま水族館
さいたま緑の森博物館
狭山市立智光山公園こども動物園
蓮田市教育委員会
鉄道博物館
所沢市教育委員会生涯学習推進センター
有限会社 ワールド工芸

12 千葉県

我孫子市島の博物館
市川市動植物園
市川市立図書館
市原ぞうの国
印旛都市文化財センター
浦安市立図書館
鴨川シーワールド
京成ばら園
市立市川自然博物館
袖ヶ浦市立図書館
千葉県南房バラダイス
千葉県立現代産業科学館
千葉県立中央博物館
千葉県立房総の村
千葉市動物公園「ふれあい動物の里」
千葉市都市緑化植物園
千葉市花の美術館
千葉大学附属図書館
ふなばしアンデルセン公園
山階鳥類研究所
マザー牧場

13 東京都

足立区生物園
足立区中央図書館
足立区都市農業公園
足立区立桑袋ビオトープ公園
板橋区立教育科学館
板橋こども動物園
井の頭自然文化園
エコギャラリー新宿
江戸川区自然動物園
株式会社 荏原エージェンシー ライブラリー
桜美林大学図書館
織田学園 織田栄養専門学校図書室
科学技術館
科学技術振興機構（JST）
賀川豊彦記念 松沢資料館
葛飾区郷土と天文の博物館
環境大臣官房総務課環境情報室
株式会社 グリーンディスプレイ
宮内庁庭園課
宮内庁宮務課
京王フローラルガーデン ANGE（京王百花苑）
一般財団法人 公園財団
江東区地域振興部
国土地理院
国立科学博物館
サンシャイン水族館
株式会社 シーアイシー
自然環境研究センター
株式会社 自然教育研究センター
株式会社 昭栄美術
新宿御苑
西武造園株式会社
セザックス株式会社
世田谷区立図書館
世田谷美術館
第一東京弁護士会図書室
台東区環境ふれあい館ひまわり
高尾599ミュージアム
多摩市立グリーンライブセンター
多摩6都科学館
中央区立環境情報センター
調布市立図書館
帝京大学総合博物館
東京動物園協会

東京大学附属図書館

東京都奥多摩湖畔公園山のふるさと村ビジターセンター
東京都恩賜上野動物園
東京都葛西水族園
公益財団法人 東京都公園協会
東京都神代植物公園
東京都多摩動物公園
東京都薬用植物園
東京都夢の島熱帯植物園
東京農業大学図書館
東京レコードマネジメント株式会社
株式会社 どうぶつむら
株式会社 図書館流通センター
虎屋ギャラリー（虎屋文庫）
長池公園自然館
中野区立図書館
新島村博物館
日本近代文学館
日本自然保護協会
公益財団法人 日本動物園水族館協会
株式会社 日展
練馬区郷土資料室
練馬区立貞井図書館
白 marunouchi
羽村市郷土博物館
羽村市動物公園
公益財団法人 ハーモニイセンター
バルテノン多摩 多摩市立複合文化施設
株式会社 バレオサイエンス
東大和市立郷土博物館
府中市郷土の森博物館
府中市立中央図書館
株式会社 ホビージャパン
町田市立図書館
松岡美術館
株式会社 丸善ジュンク堂書店
三鷹市遺跡調査会
明治神宮
目黒区立中目黒公園花とみどりの学習館
株式会社 八重洲出版
株式会社 野生動物保護管理事務所
よみうりランド水族館
14 神奈川県
青山学院大学図書館
特定非営利活動法人 市村自然塾 関東
海老名市立中央図書館
馬の博物館
公益財団法人 神奈川県公園協会
神奈川県立生命の星・地球博物館
神奈川県立フラワーセンター大船植物園
金沢動物園
川崎市青少年科学館（かわさき宙（そら）と緑の科学館）
川崎市フルーツパーク
川崎市夢見ヶ崎動物公園
川崎市緑化センター
観音崎自然博物館
京急油壺マリパーク
県立津久井湖城山公園
昭和音楽大学（司書課程）
新江ノ島水族館
茅ヶ崎市歴史文化交流館
株式会社 どうぶつむら 相模湖飼育所
箱根ガラスの森美術館
箱根関所・箱根関所資料館
箱根町立箱根湿生花園
はまきんこども宇宙科学館
雪印こどもの国牧場
横浜子ども植物園
財団法人 横浜緑の協会
横浜市立金沢動物園
横浜国立大学附属図書館
横浜国立大学附属図書館
よこはま動物園ズラシア
よみうりランド植物園

15 新潟県
十日町市博物館
長岡市寺泊水族博物館
新潟県都市緑化センター
新潟大学文学部（学芸員課程）
両津郷土博物館

16 富山県
魚津市水族館
富山県立山博物館
富山市科学館
富山市ファミリーパーク
氷見市海浜植物園

17 石川県
石川県ふれあい昆虫館

18 福井県
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

19 山梨県
南アルプス市ふるさと文化伝承館
山梨県総合農業技術センター

20 長野県
大澤酒造民俗資料館
大鹿村中央構造線博物館
軽井沢町植物園
市立大町山岳博物館
須坂市動物園
一般社団法人 長野市開発公社
長野市茶臼山動物園
白馬五竜高山植物園
八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）

21 岐阜県
岐阜県立博物館
世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ
内藤記念館くすり博物館

22 静岡県
iZoo（伊豆アンデiland）
熱川バナナワニ園
伊豆シャボテン公園
移動動物園カントリーファーム
掛川花鳥園
小泉アフリカ・ライオン・サファリ株式会社
静岡県ふじのくに地球環境史ミュージアム
静岡市日本平動物園
下田市教育委員会文化財保護課
体験型カエル館 KawaZoo
浜松公園緑地協会
浜松市動物園
はままつフラワーパーク
藤枝市郷土博物館
藤枝市文学館
富士サファリパーク
富士山こどもの国
富士宮市立図書館

23 愛知県
岡崎市美術館
豊橋市自然史博物館
豊橋市美術館
豊橋総合動植物公園
日本モンキーセンター
東山動植物園
野外民族博物館リトルワールド

24 三重県
鳥羽水族館

27 大阪府
海遊館
堺自然ふれあいの森

28 兵庫県
伊丹市昆虫館
神戸花鳥園
神戸市立フルーツ・フラワーパーク
兵庫県立淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」
UCCコーヒーマuseum

29 奈良県
橿原市昆虫館

30 和歌山県
串本海中公園
白浜アドベンチャーワールド

31 鳥取県
鳥取県立博物館

32 島根県
島根県立三瓶自然館サミエル

33 岡山県
倉敷市立自然史博物館

34 広島県
東広島市
広島市交通科学館
広島市植物公園
35 山口県
宇部市常盤動物園協会
公益財団法人 下関海洋科学アカデミー「海響館」

38 愛媛県
愛媛県総合科学博物館（新居浜市科学館）

39 高知県
高知県立牧野植物園

40 福岡県
北九州市立いのちのたび博物館

41 佐賀県
佐賀県立博物館

42 長崎県
環境省対馬野生生物保護センター
西海国立公園九十九島動植物園
（佐世保市亜熱帯動植物園）
長崎バイオパーク

44 大分県
大分マリンバレイス水族館「うみたまご」
佐野植物公園

45 宮崎県
宮崎市フェニックス自然動物園

46 鹿児島県
鹿児島市平川動物公園
国立医療品食品衛生研究所 種子島薬用植物栽培試験場
屋久島有用植物リサーチパーク

47 沖縄県
沖縄こどもの国
沖縄マリンリサーチセンター
農業生産法人 有限会社今帰仁アグリー
名護自然動植物園株式会社「ネオパークオキナワ」



- ・ 令和3（2021）年度卒業生までを含む
- ・ 現在在職中、あるいは過去に在籍者がいた機関、臨時職員以上の雇用を対象
- ・ 都道府県コードは、JIS 規格による
- ・ 機関名は都道府県ごとに法人名称（例：株式会社）を除いた読み方で五十音順に配列

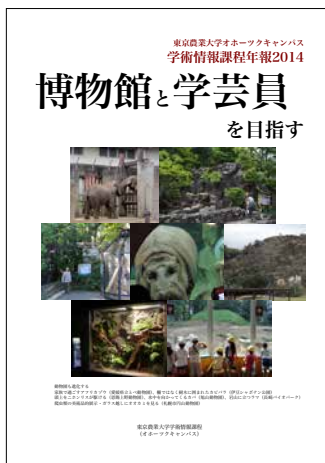
バックナンバー





『東京農業大学オホーツクキャンパス学術情報課程年報：博物館と学芸員を目指す』

バックナンバー



「食と農」の博物館における学術情報課程が
主催・共催・協力等をした企画展ポスター









東京農業大学

「食と農」の博物館

<https://www.nodai.ac.jp/campus/facilities/syokutonou/>



著者名索引



あ行

飯田 麻実	58
稲田 香帆	66
入江 憲治	5
岩下 菜智	64
上原 巖	16
宇仁 義和	31
梅室 英夫	19
江口 文陽	3
大滝 則忠	29

か行

風間 勇児	60
川田 昌代	52
木村 李花子	38
黒澤 弥悦	34
小西 達夫	27
小梁川 雅	15
惟村 直公	21

さ行

杉山 立志	44
鈴木 麻衣	71

た行

高木 大稔	62
高田 勝	49
塚田 泰佑	73

な行

中野 捷三	24
中村 奈津子	67
那須 雅熙	41
西田 俊子	23

は行

長谷川 道明	51
原 萌子	74

ま行

宮迫 陽奈	69
村 清司	13
村上 篤太郎	117

や行

八木 量子	56
山崎 勝裕	54

編集後記



本学の学術情報課程（以下、学情）が2022年度に40周年を迎えた。ここでは、本誌作成の動機、位置づけについて少し述べさせていただく。

本誌を作成するきっかけは、2022年度末に主事の惟村先生が定年退職をされることであった。惟村先生は学情の生き字引として、開設後4年目の1985年度から本学に入職され、学情一筋で、38年間のお勤めを果たされ、ご定年を迎えられる。歴代の先輩教員の皆様も、惟村先生が学情の様々な学務を一手に引き受けられていたお陰で、おそらく授業以外のことに手を煩わせることは、ほとんどなかったのではないかと思います。学情にとっての大黒柱である惟村先生が不在になる今後、学情を担っていかねばならない教員のためにも、惟村先生の在職中に、これまでの学情の活動記録をなんらかの形で残しておかなければならない、という使命感がいつの間にか湧いてきてしまった。

2020年の年末頃、2021年の真新しい手帳を前に、学情の歴史を調べてみたら、偶然にも2022年度が40周年ということがわかった。それまでは40周年になるということを認識していなかった。一般的には、40年は区切りの数字としては、中途半端な感じは否めないが、惟村先生の定年退職とあわせて、40年という区切りで、学情の活動記録をまとめておくことは、グッドタイミングかなと思うようになった。折りしも、2021年4月、「食と農」の博物館での企画展示「両極の馬具」のオープニングに参加したとき、開始前の時間に、参加されていた黒澤先生に学情の40周年の話題提供をしたところ、

叱咤激励をされてしまい、後に引き下がれなくなってしまった。今思うと、半ば、そうなることを期待していたのかもしれない。早速、惟村先生、木村先生にもご了解を得て、学情の課程会議でも了承を得て、2022年度予算申請に本誌編集・印刷費用を計上することができ、無事にスタートを切ることができた。

さて、話は脱線するが、黒澤先生の寄稿文にも取り上げられている田中芳男先生は、尾張藩の伊藤圭介に師事をしていた。私事で恐縮であるが、私の実家は名古屋市にあり、実家近くに名古屋市鶴舞中央図書館がある。同図書館を高校生の頃から利用しているが、同図書館の玄関前20メートルほど離れた外側に、いつ設置されたのかは覚えていないが、一人の座像がある。それが伊藤圭介であるが、当初は、伊藤圭介のことを全く知らない存在であった。本学に就任後、黒澤先生に伊藤圭介のことを教えていただいたことがきっかけで、その後のある日のこと、鶴舞中央図書館に行ったとき、伊藤圭介の座像に引き込まれるように近づき、座像の四方から満遍なく見つめることで、初めて座像の主が伊藤圭介であることを認識できた。以後、同図書館を利用する度に伊藤圭介の座像に向かって会釈するようになってしまった。

脱線ついでもう一話、学情における司書資格のコース開設に尽力をされたお一人として、惟村先生の寄稿文にも触れられている澤本孝久先生について、言及しておきたい。澤本先生は、戦前に北海道帝国大学農学部をご卒業され、その後、同大学大学

院を修了され、農学博士を取得された。戦後の占領期間、GHQによって、我が国で初めて慶應義塾大学の文学部に、米国人等教員による図書館学教育を行うジャパン・ライブラリースクールが開校された（1951年4月）。このとき、澤本先生は米国人のギトラー主任教授の通訳兼秘書役を務め、ギトラーの図書館学に関する理論や思想の最も忠実な理解者となり、ギトラー退任後、文学部助教授・教授となり、同スクールを文学部の図書館学科として定着させることに尽力された一人であった。その後、澤本先生は慶應義塾大学をご定年退職後、本学の学情に着任された。バックグラウンドである農学という主題をベースに、同スクールの伝統を継承する図書館情報学を兼ね備えられた澤本先生は、本学の司書育成には最適任の方であったと思っている。なお、これまた私事で恐縮であるが、私の大学院図書館・情報学専攻における指導教授の恩師が澤本先生であった。さらには、私の前職の大学図書館における上司の指導教授が澤本先生であったことは、不思議なことに忘れてはいない。20世紀末の話ではあるが、上司は津田良成先生の後任として、学情でも非常勤講師として5年間、教壇にも立たれた。その初年度であったが、上司が期末試験問題を作成されたときに、学生にとっての難易度を知りたいという依頼を受け、私が事前にその問題を解くことになったことを今でも覚えている。それから20年後に私が本学に教員として着任していることは、その当時は知る由もなく、不思議なご縁を感じざるを得なかった。

本誌の位置づけは、本誌を構成している教員・卒業生によるご寄稿、学情の年報、企画展示のポスター、各種記録等から、記録化された教材である。生憎、学情の所蔵史料紹介までは言及できなかったが、今後の学情の在り方を考える上で、本誌が貴重な資料・情報として、すぐに利活用できるものになっている。10年後の2032年度には、学情の創設50周年を迎える。学情の後輩教員には、本誌を踏み台にして、さらに充実した学情の活動記録をまとめてほしいと願っている。学情が活動した証として、記録を収集・整理・提供・保存し続けることは、まさに学情の宿命である。

本誌を作成するにあたり、原稿依頼を快諾してご寄稿していただいた江口学長、入江主任をはじめ、元教員・現教員の皆様、全国で活躍しているOB・OGの皆様、事務的なご支援を快くしていただいた教務課、図書館、教育後援会の皆様、共立印刷の尾形様、渡辺様をはじめ、関係する全ての方々に厚く感謝を表したい。とりわけ惟村先生、木村先生、宇仁先生の学情の先生方には深甚の謝意を申し上げたい。学情が今後も、優秀な学芸員・司書を数多く輩出し続けることを信じている。

末筆ながら、惟村先生が長きに亘り学情のためにご尽力されたことを記録にとどめ、ご厚情に心からの謝意を表したい。

村上篤太郎（学術情報課程 教授）

創設時の課程について

学芸員課程

学芸員課程は、昨昭和五十七年度から開かれた。本学農学部のある学科・課程のなかで最も新しい。現在、三・四年次生と聴講生を合わせて総二百四十名が本課程を選択履修している。課程の性格や履修内容が、父兄各位や学生諸君に徹底していかないようなので、この紙面を借りて若干説明させていただく。

学芸員とは、法律で決められた博物館の専門職員である。教員になるには教員免許状が必要なのと同様、学芸員になるにも資格が必要である。この資格を取るには、大学で所定の科目の単位を得るのが、最も普通な方法である。博物館というと、考古・歴史・民俗等の人文系や美術系の館を連想するひとが多い。ところが、近年は自然史・理工・動植物園等の理科系が増えて来た。また、博物館という名前はつけないまでも、類似のしをするとところが急増している。とくに、民間企業でも、その社会的責任を果たすため、同種の施設を開く傾向が高まって来た。これらの博物館や類似施設には、そのすべてに学芸員を置くことが強制されているわけではない。し

かし、大学で博物館に関する教育を受けたひとが在勤することは、甚だ結構なことである。

全国の大学で、博物館に関する教育をしているところは多い。しかしそのほとんどすべてが、人文・芸術系である。農学部では本学が唯一の存在である。

本課程の教育目標は、どんな博物館や類似施設にいつても役に立つ基礎能力を養うことである。類似施設のなかには、専門図書館や企業の特許・情報部等を含めて考えている。したがって科目の内容は、情報学（コンピュータのプログラムではない）へ傾斜している。

全学科の三年次で講義科目を、その単位取得者は、四年次で実習科目を履修する。講義はすべて、十八時に開始されるので、全学科の三年次生が受講可能である。ただし、本課程の科目の内容が、各学科のそれと異質なものもあつて、学生諸君に相当な負担となつていえるように見受けられる。

〔農大書報〕77 (Vol. 27, No. 2) 1983 p.110より原文のまま

東京農業大学学術情報課程
1982年～2022年における
40年の歩み

2023年3月31日 発行

編 集 東京農業大学学術情報課程
発 行 東京農業大学学術情報課程
世田谷キャンパス
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
電話 03-5477-2533（博物館情報学研究室）
03-5477-2521（図書館情報学研究室）

厚木キャンパス
〒243-0034 神奈川県厚木市船子1737

北海道オホーツクキャンパス
〒099-2493 北海道網走市八坂196
電話 0152-48-3857（博物館情報学研究室）

印 刷 共立印刷株式会社

表紙写真 鈴木 迅

卷七